
お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

EAST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

【Zコード】

Z6259Y

【作者名】

EAST

【あらすじ】

某社の新人賞向けの原稿を期限限定で公開いたします。

主人公露木悠斗は一ヶ月半の懊惱の後、ヒロイン櫻井雛子に告白する。答えはOK！喜ぶ悠斗だったが、彼の父の再婚相手というのが……。

月末に削除いたします。よろしければご意見ご感想などいただけますと幸いです。

11月26日 第二稿に全面差し替えを行いました。ストーリー等は変わつておりませんが、若干表現が変わつているところがあります。一度読まれた方ももしお時間があればもう一度読んでみて下さい。

プロローグ 恋人たちの季節（前書き）

プロローグ部分をお送りします。本日はこの他、第一章の1を公開します。

それではどうぞ！

プロローグ 恋人たちの季節

放課後の体育館裏。陽の光の届かない薄暗い空間に、少年と少女が立っていた。少年は詰め襟の、少女はブレザーの制服を着ている。この体育館のある私立仁正学園の生徒だ。

少年は目を血走らせ、鼻の穴を膨らませ、今にも少女に飛びかかるのではないかというようなオーラを纏っていた。

それに対し、少女の方はふんわりとした髪の毛と、少々地味めではあるが小ぶりな顔につぶらな瞳、桜の花びらを思わせる唇に、少し低いが可愛らしい形の鼻と、一応美少女にカテゴライズされても良い容姿の持ち主だ。若干幼い印象を与える容姿が、逆に保護欲をかき立てる、そんなタイプの少女である。

少年は焦っていた。考えに考え抜いた作戦だつたはずだ。だが、どうしてもそれを実行に移せない。いざ少女を目の前にすると、それまでの自信が音をたてて崩れ去ってしまうのだ。

少女の瞳が自分の目を見つめるとき、少年は自分の煩悩まで見透かされているような、そんな気がしてならなかつた。

「あの……先輩？ お話って何なんですか？」

しつとりと湿った脣から、少女の問いかけが紡がれる。当たり前だ。自分の方から下駄箱に手紙を入れて呼び出しておいて、すでに一五分はこの膠着状態が続いているのだ。

少年 露木悠斗は焦っていた。早く事態を開拓しなければならない。

だが、そんな度胸があれば最初からこんなぐだぐだな展開にはなつていはないはずなのだ。入学式のとき、新入生のなかから偶然見つけた一輪の花。それが彼女だ。その花を自分のものにしたい。悠斗はこの一ヶ月半の間、悩みに悩み、そして今に至るのである。

少女 櫻井雛子 が悠斗の顔を下から覗き込んでくる。あまりにも無防備なその表情に、悠斗の心臓は悲鳴を上げていた。これ

以上は無理だと。はやくこの苦しみから解放してくれと。

悠斗はぐつと両手を拳にして白くなるほど握りしめ、歯を食いしばった。固く目をつぶり、一度下を向く。次の瞬間、悠斗は天を仰ぐと、大きく息を吸って、自分の思いの丈を雛子に叩きつけた。

「櫻井雛子さん！ 入学式で見たときからずっと好きでした！ お、お、お、俺と付き合つて下さい……お願いしますッ！！」

悠斗はブンッと音がしそうな勢いで頭を下げた。腰は直角。最敬礼と言うヤツだ。悠斗は再び目を固く閉じ、歯を食いしばつて時がたつのに耐えていた。

もしも答えがNOだったら？ いや、自分のような非モテなんかに告白されて、雛子は困っているのではないか？

永遠にも思える数秒間が過ぎた。暑くもないのに顔が熱い。汗がダラダラ出て、悠斗の頬を伝つて地面に染みを作る。やはりダメだったかと悠斗が諦めかけたその瞬間、鈴を鳴らすような少女の声が悠斗の頭上から降ってきた。

「先輩……お顔をあげて下さい……」

その声に、悠斗は怖々といった様子で目を開ける。目の前には雑草が茂った地面と、雛子の可愛らしい膝小僧が見えていた。雛子は膝と膝をすりあわせるようにもじもじと動かしている。

悠斗は思い切つて顔をあげた。今まで頭上にあつた雛子の顔が、一気に自分の胸元あたりの高さになつてしまつ。

「先輩……、なんでわたしなんですか？ もつと可愛い女の子、たくさんいるのに、どうしてわたしなんですか？」

雛子は悠斗の目をじっと見たまま、問いかける。激しくではなく、あくまでも静かに。でも、その言葉には嘘を許さないという確固たる信念が滲んでいた。

悠斗はもう一度大きく息を吸い込むと、自分の思い付くままを言葉にした。それしか悠斗には出来そうになかった。

「俺は……俺は今までずっとモテないし冴えないヤツだった。だから、こんな事いつたら櫻井さんが困るかもしれないって、そう思つ

てひと月半も悩みに悩んだ。友達にも相談しないで、一人で部屋で悶々と悩んだんだ。でも、どう気を紛らわそうとしても、どう自分を誤魔化そうとしても、やっぱり俺は櫻井さんが好きなんだ。これは俺の我が儘かもしれない、でも、俺は、櫻井さんにずっとそばにいて欲しいんだ！」

悠斗の言葉が続くにつれ、雛子の瞳が潤みはじめる。目の縁に光るもののがたまりはじめ、やがてそれはつづりと一筋の線となつて頬を伝った。

悠斗は自分がとてもなく恥ずかしい言葉を連発してしまったことに気付き、頭を抱えてのたうち回りたい気分だった。だが、今言った言葉には微塵の嘘も含まれとはいひない。全ては自分の本心だった。

「先輩…… ありがとうございます。わたし、本当に嬉しいです」

「え？」

「わたしも、先輩のこと、ずっと見てました。先輩が校舎裏で仔猫に餌をあげてるのを見てから、ずっと……」

「ずっと、見ていた？ 自分の事を？ 悠斗の心臓がどくんと跳ねる。もしかして…… もしかしてこれは……」

「先輩、わたしも先輩が大好きです。ずっと一緒にいられたいいなつて、そう思つてました。でも、わたしつて地味だし、可愛くないし、取り柄もないし、全然自分に自信がなくて、だから自分からは言えなくて……。呼び出してくれたのが先輩だと分かった時は、心臓が破裂しちゃうんじやないかって思つほどでした」

訥々と語る雛子の言葉が、静かな旋律となって悠斗の耳に届く。その旋律は悠斗の鼓膜を振動させ、聴覚神経を刺激し、脳に情報を届けている。「この子も自分の事を想つてくれている」と。だが、悠斗には一つだけ許せないことがあつた。それは、雛子があまりに卑屈になっていることだ。まあ、それは悠斗も人のことを言えた義理ではないのだが。

「先輩……本当にわたしなんかでいいんですか？」

「櫻井さん、そんなに卑屈になるなよ。そんなこといつたら、俺だつて今まで散々非モテだのキモイだの言われてきたヤツなんだし。それに、俺の目には櫻井さんが誰よりも可愛く見えるんだ。これは嘘じやない、本当の事だぞ！」

悠斗はそこまで一気に言うと、ふうっと息をついた。

「俺だつて、君を呼び出すだけ呼び出しておいて、こんなに待たせるようなヘタレ男なんだ。幻滅したんじゃないか？　ああ、こんなヘタレだつたんだ、つて」

「そんなことありませんっ！」

雛子がその身体に似合わない大きな声を出した。自分を卑下する言葉を連発していた悠斗は口をつぐむ。

「先輩は、先輩はへタれなんかじやありません。とっても優しいひとです……」

「櫻井さん……」

「わたし、決めました！　わたしは、先輩のそばにいます。ずっとです！」

胸の前でぎゅっと拳を握り、上田遣いに悠斗を見つめる雛子の瞳には、固い決意の色が滲んでいた。

「…………わかった。俺もずっとそばにいる。ずっと、ずっとだ」

悠斗がそつと雛子の肩に手を回す。雛子もそれに応じて悠斗の首に腕を回す。二人の顔が次第に近づいて行き、やがて静かに脣が触れあつた。ほんの微かに触れるだけの接吻。だが、それは二人にとってなによりも大切な儀式だった。

「先輩……」

「なに？　櫻井さん」

「雛子つて呼んで下さい」

「ん……じゃあ、雛子」

「わたし、先輩みたいなおにいちゃんがずっと欲しかつたんです。

先輩のこと、おにいちゃんつて呼んでいいですか？」

悠斗は嬉し恥ずかしさに、その場でもんざり打つて体育館の壁に頭突きを連打したい衝動に駆られたが、すんでの所で理性がブレーキをかけてくれた。

「お、俺でよければ、いくらでもおにいちゃんって呼んでくれ！」

「嬉しいっ、おにいちゃん！」

僅かに見える空の色は夜の闇が近づいてきていることを示している。だが、二人には時間の経過など些細なことにすぎなかった。この日、放課後の体育館裏のほんの僅かの空間。それが恋人たちの永遠の愛の誓いの場となつた。

プロローグ 恋人たちの季節（後書き）

いかがでしたか？ よろしければ、意見、感想などお寄せ下さい。

第一章 恋人が妹！？ 1（前書き）

第一章の1をお送りします。それではどうぞ！

第一章 恋人が妹！？

1

露木悠斗は、一言で言えば冴えない高校生だった。背はまあまあ高いが、取り立てて顔がいいわけでも、成績がいいわけでもない。クラスの女子連中からは『安全パイ』扱いされているし、友達連中もモテない奴らばかりだ。

だが、その悠斗に彼女が出来た。それも、地味めではあるものの、控えめに言つても可愛らしい新入生だ。悠斗はその事実を噛みしめながら、夕食の支度をするためにキッチンに立っていた。

「おつと、アクはちゃんと捨てないとな。これがあると味が濁るんだ」

悠斗には母がない。幼い頃、大病を患い、あっけなく死んでしまった。まだ物心つくつかないかのころだったので、悠斗には母の思い出らしいものはほとんど無い。ただ鮮烈に覚えているのは、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがする、ということだった。

「そういうや、櫻井さ……雛子も、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがしたなあ。女の子はみんなああなのか？」

11

雛子の身体を抱き留めた時の感触が、悠斗の脳裏に蘇る。華奢に見えて良く育つた胸や、ほつそりした手脚。髪の毛から香るシャンプーの甘い匂い。どれを取つても悠斗の煩惱を刺激しまくりだつた。これ以上ないくらいだらけた表情で妄想世界の住人になつていた悠斗は、鍋が吹きこぼれそうになつてやつと我に返つた。危ない危なれたことか。

い。

「カレーは大辛。これも親父殿の指示だ。従つしかあるまい」

本当は自分は中辛くらいが好きなのだが、露木家の大黒柱にして絶対権力者である父に逆らうことなど、悠斗には思いもよらないことだった。現に、逆らおうとして児童虐待寸前のお仕置きを何度もされたことか。

だが、それ以外は悠斗の父は良き家庭人だった。夏休みや冬休み

には長期休暇を取つて、悠斗を遊びに連れ出した。おかげで母がないということで寂しい思いをすることはほとんど無かつた。

大辛のカレールーを鍋に放り込みながら、悠斗は雛子とのこれからのことと思い浮かべる。今日は舞い上がりについて、ケータイの番号やメアドの交換すら忘れていた。明日は土曜日で学校は休み。となると、次に逢えるのは月曜日と言つことになる。

「今度は絶対抜かりなくいくぜ！ きっと今『じる』雛子も寂しい思いをしてるに違いない！ 不甲斐ないおにいちゃんをゆるしておくれ！」

火をとろ火にして煮込む体勢に入ると、悠斗はキッチンを離れ、二階の自室に上がつていった。そこには、写真部の部員から買った雛子の盗撮写真が、フォトフレームに入つて机の上に立てられていた。

「やつぱかわいいよな、雛子……。自分の可愛さに気づいてない辺りが余計に可愛いぜ」

悠斗はフォトフレームを胸に抱えると、ベッドにどさつと倒れ込み、「じるじる」と転げ回つた。

「あああああ～～～～～！ 雛子を押し倒してあんなことやこんなことをしたい！ 両思いだから許されるよな？ フフン、思い知れ非モテども。俺はすでに貴様らとは違う人種にジョブチェンジしたのだ！ 悔しかつたら雛子より可愛い彼女を作つてみろつてんだ！」
メチャクチヤである。だが、本人は煩惱にまみれたその愛情に一片の疑いも抱いていなかつた。自分が煩惱まみれだということを、十分過ぎるほどに知つていたからだ。

「雛子～～つ、ちゅ～」

最後にフォトフレームの写真にキスをすると、悠斗はそれを机に戻し、スキップするようにして階段を下りていき、途中で転んで一階まで滑り落ちた。

「いつて！ くそつ、せつかくいい気分だったのに。縁起でもない」

キッチンへと戻り、カレーの煮込み具合を確認。良い感じに仕上がっている。これならカレーにうるさい悠斗の父でも文句は言わないだろう。鍋を数回搔き回して、焦げていないかをチェック。大丈夫。この火加減なら焦げることはない。

その時、玄関の鍵を開ける音が悠斗の鼓膜をふるわせた。時計を見ると、午後八時三〇分。父の帰還である。

「ただいま。お？ 今日はカレーか。いい香りだな！」

悠斗の父、露木悠大は、居間のソファーに鞄を放り出すように置くと、ネクタイを緩めた。悠斗の目から見ても、大人の男という感じのする所作で、自分も社会人になつたらあんな風になりたいと密かに思っていた。ただ、社会人になる、ということが一体どういうことなのかは、まだ悠斗には理解出来ないでいたが。

「どれ、ちょっと味見させる。うん、このくらいの辛さが丁度いいんだ。悠斗、また腕を上げたな？」

「市販のルーにちょっと隠し味を入れてるだけだよ。腕もくそもあつたもんじゃないさ」

「謙遜しなくともいい。世の中には市販のカレールーを使ってもカレーを作れないヤツもいる。まあ、それが父さんなんだがな」

はつはつはと大口を開けて笑う悠大。実際、食事といえば幼い頃は家政婦さんが作ってくれたものばかりだった。職場では部下を何人も抱えてバリバリと仕事をこなす悠大の、唯一苦手とするのが料理だったのだ。

「まあいいよ。風呂先に入る？ 飯の方が先？」

「そうだな、まずは飯だ」

「了解」

炊飯器にはすでに炊きあがつたご飯がスタンバイしている。カレー皿を持つた悠斗が炊飯器の蓋を開けると、つやつやのご飯が姿を現した。魚沼産のコシヒカリの味を損なわないよう、天然水で炊いたご飯だ。それをたっぷりとカレー皿に盛る。

続いてしつかりと煮込まれた大辛カレーをご飯の上からかける。

悠大は普段はそれほど大食漢というわけではないが、ことカレーになるとそこらの大食いチャンプ並みに食べるのだ。

「はい、お待たせ」

すでにスーツを脱いで部屋着に着替えた悠大が、ダイニングテーブルの定位置に陣取つていた。だが、すぐにはカレーに手をつけない。露木家では、余程のことがない限り、親子揃つて夕食を食べることになっているのだ。悠斗が自分の分のカレーをよそつて、自分の席に着く。それを待つていた悠大が、両手を合わせた。悠斗も同じように手を合わせる。

『 いただきます』

スプーンでカレーとご飯を掬つて、口まで運ぶ。その作業すらもどかしいと言わんばかりに、悠大は食べる。だが、その日の悠大はいつもよりさらに嬉しそうにカレーを頬張つていた。

「ねえ、父さん、もしかしてなにか良いことでもあった?」

「ん? んー、やっぱり分かるか? それより、お前の方こそなにかいいことがあつたって顔してるぞ?」

「まあ、学校でちょっとね。それより、父さんのいいことつてなにさ」

「それはちょっと内緒だな。ああそうそう。悠斗、お前口曜日は空いてるか?」

「空いてるけど、なんで?」

「久々に山の森林公园に行こうと思つてな」

「なんだよ、いきなり。それなら何か弁当でも作つていくかな」

「いや、その必要はない」

悠大は満面の笑みで言った。

「とにかく、日曜日は開けておけ。これは父さんからの命令だぞ」

「ハイハイ……」

「ハイは一回だ!」

「はーい」

* * *

一日後、日曜日は朝から快晴だつた。黄砂も降つていないし、森林浴には格好の天氣だ。悠斗は朝七時に起きて朝食の準備をした。普通の高校一年生なら「なんで俺が飯なんか作らなきやいけないんだよ」とやさぐれるとこだらうが、悠斗はちょっと違う。小学生のころに家政婦さんから料理の手ほどきを受けて以来、自分で食事を作ることがたのしくて仕方がないのだ。

今日のメニューはベーコンエッグとトーストとサラダ、それにネルドリップのコーヒー。ベーコンをカリカリに仕上げるのが悠斗流のごだわりポイントだ。食事が出来上がる頃に、悠大が寝室から一階へと降りてくる。

「おはよう、父さん」

「おお、おはよう、悠斗。今日はベーコンエッグか」

「そろそろ起きてくれると思つて用意してたんだ。今コーヒーを入れるから、座つて待つてて」

「ん……。つと、その前に新聞新聞つと」

悠大は外資系の商社に勤めるサラリーマンだ。新聞も一般紙の他に、別に経済専門紙を取つている。経済紙を斜め読みしながら、悠大は世間話でもするかのような気楽さで口を開いた。

「なあ、悠斗。もしもな、父さんが再婚するつていつたら、お前はどうする?」

入れ立てのコーヒーを悠大の前に置きながら、悠斗は特に関心もないと言つた風に答えた。

「別に、いいんじゃない?」

「なんだ、それだけか?」

悠斗はてきぱきと朝食の準備をしながら父の問ひに答える。

「それは父さんが決めるこことであつて、俺がとやかくいじじやない。父さんがそうしたいならそうすればいいよ。……までよ?」

父さんが再婚したら、義母さんが出来るのか。家事とか楽になりそ

うだな。んで、なんでそんなこと聞くのさ？」

「いや、聞いてみただけだ。特に意味はない」

朝食の支度を終えた悠斗がテーブルに着く。新聞を読んでいた悠大が、それを机の脇に置く。いつも通りの休日の朝食。いつもとかわらない日曜日。

少なくとも、悠斗はそのときはそう思っていた。

＊＊＊

「さて、そろそろ出発するか！」

時刻は午前九時。森林公园までは徒歩でも行けるが、今日はバスを使うので、バスの時間を考えなければならない。バス停までは歩いて数分だから、確かにもうそろそろ出発しなければならない時間だった。

悠斗はトレッキングシューズに足を突っ込みながら、腕時計を確認する。大丈夫、時間の余裕はある。その日の悠斗の出で立ちは、カーポパンツに黒のプリントTシャツ、上に長袖のシャツを重ねて着ている。どうみてもユニークで全部揃えました感が満点だ。

それに対して悠大の方はチノパンにブランドもののポロシャツ。腕には結構高い腕時計。シンプルだけど締まつて見えるコーディネイトだった。父親に対して何とも言えない敗北感を抱きながら、悠斗は靴紐を締める。

「よし、じゃあ行こう。しかし久しぶりだな、悠斗といつして日曜日に出かけるのも」

「高校生になつて父親と仲良く森林公园へ行くやつの方が少ないよ」「まあ、そう言つな。今日はちょっとしたサプライズを用意しているんだ」

門扉を開いて家の前の通りに出る。バス通りまではほんの数分。バスもちょうどその頃に来るはずだった。

「そうそう、父さん。俺にもついに彼女が出来たよ」

「ほう！ お前みたいな野暮つたいやつを好きになってくれる物好きな女の子もいたのか！」

悠斗は肩をがっくりと落とした。悠大は時々悠斗が自分の遺伝子を受け継いでいるということを忘れていたりのような発言をする。このときがまさにそれだつた。

「まあ、野暮つたいのは確かだけどさ。ついに俺にも春が来たんだよー。それがまた可愛い子でさ！ 一つ下の新入生なんだ」

「ふむ。つまり新入生なのをいいことに、自分のヘタレぶりを隠して通したんだな？ なるほど、それなら納得出来る」

「ひつでーなー。素直に息子に彼女が出来たことを喜んでくれてもいいじゃないか」

悠大は空を仰ぐと大口を開けてははははと笑つた。

「喜んでるさ。だがな、お前はまだ高校生だ。節度をもつた付き合い方をするんだぞ？」

そんな話をしていると、森林公園行きのバスがガタ「ゴト」と走つてきた。森林公園に向かうバスの路線はもう一路線、街の反対側を循環してくるものがある。このバスは『東部循環系森林公園前行き』という札が出ている。つまりは街の東側から森林公園へと向かうバスだ。お察しの通り、もう一本の路線は『西部循環系』である。

後部のドアからバスに乗り込み、露木親子はドアのすぐ後の席に並んで座つた。五月のうららかな陽射しが、悠斗を眠りへと誘う。やがて、悠斗は軽い寝息を立てて浅い眠りへと落ちていつた。

「悠斗、悠斗。終点だ。着いたぞ」

遠くから父の呼ぶ声がする。終点だつて？ 何の話だ？ 悠斗はまだ目覚めきらない脳みそに無理やり覚醒を命じて目を開いた。一瞬、陽の光で視界が真っ白に染まる。明るさに慣れると、窓の外には森林公園の入り口と、バス停の屋根が見えていた。

「やつと起きたか。ほら、運転手さんの迷惑になる。さっさと降りるぞ」

「う、うん」

悠大は先頭に立つてさつと一人分の乗車料金を払つて降りてしまつ。悠斗は慌てて後を追おうとするが、デイパックの肩紐が座席の手すりに絡まつて上手く取れない。運転手に平身低頭してバスを降りるまでには結構な時間を要した。

「遅い！ これが女性相手の待ち合わせだつたら平謝りしなきゃならんところだな」

「そつは言つてもさ、この肩紐が」

「言い訳は男らしくないな。ふむ、時間は丁度いいか」

悠大は見るからに高級そうでいて、渋いデザインの腕時計で時間を確かめる。一々所作がダンディなのが悔しくて、悠斗は悠大から目を逸らしていた。と、坂の下から一台のバスが上つてくるのがみえる。街の西側を廻つてくるバスだろう。それにしても、なぜ悠大は森林公园に入場しようとしないのだろう。そんなことを考えていると、西部循環のバスは目の前のバス停にゆっくりとその車体を停めた。

乗客が降りてくる。結構な数だ。大体は家族連れだが、悠斗はその中に見知った顔を見つけていた。あれは、あのふわふわの髪は！

「雛子！」

突然自分の名前を呼ばれた雛子は、キヨロキヨロと周囲を見まわし、悠斗が自分の方へと駆けてくるのを見つけた。

「おにいちゃん！？」

「偶然だなあ。こんな所で雛子に会えるなんて、今日はツイてるな、俺」

「もう、他の人が見てるよ？ 恥ずかしいよ」

「恥ずかしがることないだろ？ 俺と雛子の仲じやないか」

その時、静かで、上品な印象の女性の声が悠斗の耳朵を打つた。

「そう……あなたが悠斗くんね。雛子の『おにいちゃん』の」

その声に悠斗が振り返ると、そこには雛子をぐつと大人っぽくしたような美人が立っていた。

服は上品なワンピースにボトムスの重ね着。嫌みでない程度にアクセサリーをつけて、薄化粧をしている。

「もしかして……お母さんですか？」
「そうです。櫻井都子みやと言います。雛子の母で」
悠斗はその言葉に続いた悠大の声に凍り付いた。
「悠斗、お前のお母さんになる女性だ」

第一章 恋人が妹！？ 1（後書き）

いかがでしたか？ご意見ご感想などいただけましたら幸いです。

第一章 恋人が妹！？

2（前書き）

第一章の2です。
それではどうぞ！

悠斗は憂鬱だった。何故憂鬱なのかと言えば、答えは簡単。彼女として父親に紹介するはずの雛子が、戸籍上本当の『妹』になってしまったからだ。これからあんなことやこんな事を学校やゲーセンや遊園地や、その、高校生が行つてはいけないホテルとかでするはずだつたのに、だ！

「俺は認めないぞ、こんな結婚！ 俺たちは一昨日恋人同士になつたばっかりなんだ！ それがなんで今日になつていきなり『お前たちは兄妹になるんだ』なんていわれなきやならないんだ！！」

森林公園の一番高い場所、展望広場のテー・ブル席に露木家の父子と櫻井家の母子が顔を揃えている。悠大は難しい顔をして腕組みしたまま身じろぎ一つしない。だが、業を煮やしたのか、熱弁をふるう悠斗をじろりと睨み付けると視線で「黙れ」と命じた。

だが、今日の悠斗はそんなことでは止まらない。止まれない。何しろ雛子とのこれからのことだが、自分たちの手の届かないところで決まつてしまいかねないのだから。雛子は悠斗の反対側の席で、悠大と都子をちらりちらりと交互に見ながら、肩身狭そうに身を縮めている。

「雛子！ お前もいつてやれ！ 俺たちはばずつと一緒にいるつて誓つたつて！ これから毎日想い出を積み重ねていくんだつて！」

突然話を振られた雛子は、三人の顔を見まわすだけで何も言葉に出来ない。まるでさつきの悠大の言葉が雛子から言葉を奪う呪文だつたかのように、黙り込んでいる。

「悠斗、お前、今朝父さんが再婚するつていつたらどうするか聞かれて、反対しないつて言つたばかりじゃないか。あの言葉は嘘だつたということか？」

「うつ、そ、それとこれとは話が別だ！ よりによつてなんで雛子の母さんなんだ！ なんで俺たちが本当に兄妹にならなきやいけない

いんだ！」

「本当の兄妹」

これまで黙り込んでいた雛子が、悠斗のその言葉に反応した。
「おにいちゃん、わたし、夢みた
「おにいちゃんと、本当の兄妹になれるなんて！　わたし、夢みた
「おにいちゃん、わたしたち、ずっと一緒にいられるよ！」
「違うだろ！　俺たちは恋人同士であつて兄妹じゃない！　それと
　あの体育館裏での誓いは嘘だったのか？」

「体育館裏で誓つたのは、ずっと一緒にいる」と、おじいちゃんが、つて呼んでいたことだよ?」

「おにこちゃん、そんなえつちな事考えてたの……？」

雑子が自分の身体をかばうように椅子ごと後じさる。自分の煩惱が駄々漏れのなつていたことに気づいた悠斗は、両手でバシンと一発自分の頬を打つて目を覚まし、話を続けた。

「とにかくだ！ 兄妹ということになつたら、たとえ血が繋がつてなくたつて世間は『恋人』とは見なしてくれなくなる！ 雛子はそれでいいのか？」

「ねたし……おにこちゃんと一緒に暮らせるならそれでもいいかも

• • • •
L

「決まりだな。」の再婚に反対なのは、悠斗。お前だけだ

悠太の冷徹な声が悠斗を打ちのめす。たつた一日前に味わったこの世のものとも思えない喜びが、たつた一日後に絶望に取つて代わるとは。しかも、味方についてくれるならばかり思つていた雛子は「おにいちゃんと一緒にいられたらそれでいい」と一人の大人の側についた。これが裏切りに思えずになんだというのだろうか。

「どうわけで、私と都子さんは今日これから婚姻届を出してくる。当然離子ちゃんはうちの娘だ。法律がどうだろ?」と、一田家族とな

つた子をどうにかしようなどと考えてみる……」

悠大は普段の良き家庭人としての顔ではなく、絶対的権力者の顔で悠斗に宣言した。

「お前の寿命が相当縮むことは覚悟しておけ。妹に手を出そうなんていう兄貴は鬼畜だ、最低だ、生きるに値しない！」

悠斗を睨み付ける悠大の瞳が、その言葉は本心だと物語っている。都子は小首をかしげて頬に手を当て、「あらまあ」といつた表情を浮かべている。離子はもう悠斗と一緒に住めると言う事実にだけ頭が行っているようで、まるで相手にならない。

全てから見放された気分で、悠斗はがっくりと肩を落とした。どさりと椅子に腰をおろす。何だか視界が歪んでいる。鼻水も出てきている。ああ、自分は泣いているんだと気づくまで、悠斗にはかなりの時間が必要だった。

「もう、好きにしてくれ。俺が何を言つても、父さんが決めたことは絶対なんだろ？　だったら最初から息子の意見なんか聞くなよ」「うむ、好きにするぞ。実は夕方には都子さんたちの荷物が家に届く。引っ越し作業を手伝うんだ。分かつたな」

悠斗はふらりと席を立った。もうどうにでもなれ。それが悠斗の正直な気持ちだった。このまま家に帰ろう。財布は持ってきてる。バスにも乗れる。今はただ一人になりたい。一人になつて、多分泣きたい。だが、悠大はそれを許してはくれなかつた。

「なんだ、悠斗。帰るのか？　帰るなら離子ちゃんを家まで案内してあげなさい」

* * *

帰りのバスの中は、悠斗にとつて地獄だつた。

手の届くところに離子がいるのに、手を伸ばせば肩を抱けるのに、もうそれは許されない。しかも、離子はそれを受け入れている。あの体育館裏での誓いはなんだったのか。自分たちは両思いじゃなか

つたのか？ そんな想いが繰り返し悠斗の胸に押し寄せる。

雛子はバスの車窓から見える景色を眺めているだけで、なにも言ってはくれなかつた。一人になればもしかしたら本心が聞けるかもしれないという悠斗の微かな希望は、床に叩きつけられたガラス製のコップのように打ち砕かれた。

やがて、バスは露木邸の最寄りの停留所に止まる。悠斗は黙つて先を歩き、二人分の乗車料金を支払つてバスを降りた。

「……おにいちゃん、怒つてる……？」

何を当たり前のことを、と詰め寄りたいのをぐつとこらえて、悠斗は自宅へと足を向けた。雛子は半歩後をとことじつことくる。

「おにいちゃ……」

「俺は認めないからな」

雛子の呼びかけを、悠斗の押し殺した声が遮つた。びくりと雛子の身体が震える。雛子はすがるような目で悠斗を見つめる。まるで本当の妹が兄にすがるかのようだ。

「俺が欲しかつたのは恋人だ。彼女だ。ラヴァーだ！ 妹なんて欲しくなかつた！ それなのになんだ！ 雛子だけは俺の側についてくれると思つてたのに……。お前は裏切り者だ！」

悠斗はそれだけ言つと、もう目の前にあつた家の門扉を開いてさつさと中に入つてしまつた。ドアを閉じた悠斗は背中でドアにもたれかかりながら、深いため息をついた。もしかしたら、自分は言い過ぎたのかもしれない。でも、さつき言つたことは少なくとも嘘じやない。自分の側についてくれると信じていた、信じ切つていた雛子が、悠大と都子の側についたことに、悠斗は大きな衝撃を受けていた。

「つまりは、雛子はただ単に『おにいちゃん』が欲しかつたってことか……。ははははっ。笑えないギャグだよな」

悠斗はしばらく玄関で雛子が上がつてくるのを待つた。だが、数分待つて入つてこないと、一階の自分の部屋に引き籠もつた。
(神も仏もあるものか。結局俺はまたボッヂの非モテの非リア充に

逆戻りだ)

自分の部屋のベッドに倒れ込むと、悔しさで涙が滲んできた。高く持ち上げられて、全力で地面に叩きつけられたようなものだ。痛いのは身体じゃなくて心だけだ。

そうしてどのくらい時間が経つただろう。カーテン越しに差していた陽の光が陰り、ぽつり、ぽつりと天からの滴が屋根を叩く音が響きはじめた。いくらなんでも雨が降り出したら家に入ってくるに違いない。迎えに行くのは、何かに負けたような氣がする悠斗だった。

だが、数分経ってもドアが開く音は聞こえてこない。雨音はますます勢いを増していく。悠斗の脳裏に冷たい雨に打たれて震える雛子の姿が浮かんだ。

「ええい！ なんで入つてこないんだよ！」

ベッドから跳ね起き、階段を一段飛ばしで駆け下りる。短い廊下を駆け抜け、ドアのノブを握り、捻る。

そこには土砂降りの雨に濡れる雛子の姿があった。サンダルに乱暴に足を突っ込み、道路に飛び出す。悠斗は雛子の両肩を掴み、声の限り叫んだ。

「バカかお前は！ 今日からここがお前の家なんだ！ 雨が降つてるので、こんなにずぶ濡れになるまで外にいるなんて、何考えてるんだ！」

「だつて、おにいちゃん、認めてくれないから……わたしのこと」

「いいから、こっち来い！ これ以上濡れると風邪引くぞ！」

「おにいちゃんに嫌われるくらいなら、風邪でもこじらせて死んじやつた方がいいもん」

「バカ！ 僕は雛子が大好きだ！」

伏し目がちだった雛子の表情が、ぱっと明るいものになる。

「ほんとう？」

「ああ、本当だ！ ただし、妹としてじゃないぞ？ 男と女として、

だ。そこを勘違いって、ちょっと待て！」

ずぶ濡れの雛子が悠斗の首にぶら下がるよつにして抱きついていた。近くに、あまりに近くに顔があつて、目を逸らすこともそぞれない。雛子はゆっくりと目を閉じた。

「おにいちゃん…… 大好き」

「つて、こんなに身体が冷え切つて。雛子、とにかく風呂だ！ すぐ風呂沸かしてやるから入れ！ な！」

「ん……。わかった」

雨はますます強くなる。いつの間にか、悠斗の服もずぶ濡れになっていた。

「や、こっちだ」

「うん……」

玄関でずぶ濡れになつた靴を脱がせ、廊下を水浸しにしながら、悠斗は雛子を風呂場に案内した。カラソを捻つてお湯を出す。こんな時に瞬間湯沸かし器なのは有り難いと悠斗は思つ。

お湯の温度が適温になつたら、脱衣場に雛子を残し、悠斗はとりあえずの着替えに自分のスウェットスーツを取りに一階の自室に上がつた。クローゼットを開くと樟脳の特有の香りが鼻をつく。

「確かこの辺に……あつた！」

ちよつとサイズが大きいけれど、この際贅沢は言つていられない。すぐに階下に持つていぐ。浴室からはシャワーを浴びる音が聞こえてくる。今なら大丈夫、事故で覗いてしまうこともない。脱衣場の扉を開いて、洗面台の上に持つてきたスウェットスーツを置く。ふと脱衣かごをみると、こままさに脱いだばかりの雛子の下着が濡れた服と共に置いてあつた。手に取りたいという煩惱を振り切つて、悠斗は浴室内の雛子に声をかける。

「雛子…… 雛子。着替え、持つてきたから」

『うん…… ありがと』

「湯船にお湯はって、ちゃんと暖まれよ」

『うん……』

磨りガラスの向こうで、雛子の白い肢体が動いているのが見える。悠斗は理性をフル回転させて扉を開くのを我慢していた。心の片隅で別の悠斗が自分に囁く声が聞こえる。ドアを開けて一糸まとわぬ雛子を抱きしめてしまえと。

（そんなのはダメだ！……でも、俺は本当はそうしたいんだよな……）

正直に言つてしまえば今この時、扉一枚を挟んで全裸の雛子がシャワーを浴びているというシチュエーションは、悠斗にとって天国以外の何ものでもない。だが、悠大の鶴の一聲で、雛子は妹ということになってしまった。

このまま兄として一緒に過ごすのが正しい事なのか。きっと世間一般の常識ならばそういうのだろう。だが、自分は違う。悠斗はそう思っていた。戸籍がどうだどうと、雛子を愛する気持ちは変わりない。

「あやつー！」

その時、雛子の短い悲鳴と何かがぶつかる音が聞こえてきた。思わず悠斗は扉を開いて中に飛び込んでいた。

「…………」

「…………」

「す、すべつた、のか？」

「お、お、お、お……」

「せ、石けんで滑つたのか。危ないから気をつけないと」

雛子はタオルで辛うじて身体の前方だけを隠した状態で倒れていた。ほっそりとした腰と対照的に膨らんだ胸がギリギリのところでタオルに隠れて見えない。そういうしているうちに、みるみる雛子の顔が赤くなつていく。そして、耳まで赤くなつたその時。

「お、おにいちゃんの、えっち っ！！」

耳をつぶさくような大音声で雛子は叫んだ。浴室の窓や扉がビリ

ビリと震える。雛子は手当たり次第にそちら辺にあるものを悠斗に向かつて投げはじめた。シャンプー、リンス、入浴剤の瓶、石けん、ボディーソープ等々。

「また、落ち着け雛子！ これは事故だ！ 僕は決して下心があつて覗いたわけじゃ」

「言い訳は私が聞こようか、悠斗」

氷より冷たく、鉛より重い声が背後から悠斗に投げかけられる。恐る恐る振り返ると、そこには鬼の形相の悠大が腕組みをして「王立ちしていた。

（ああ、俺の人生もここまでかもしれない……）

「あらあら。廊下がずぶ濡れだったから、もしかしたら雨に降られたのかと思ってたんだけど、悠斗君、なかなかやるわね」

都子が微妙に話をややこしくしてくれた。今の一言で悠大の怒りゲージがワンランク上がつたらしい。

「悠斗……さつさと風呂場から出て行けえつー！」

「ひいっ！」

情けない悲鳴を上げながら、悠斗は風呂場の扉を飛び出し、悠大の脇を通り抜けてドタドタと階段を上り、自室に引き籠もった。

* * *

「まあ、事故だということは分かった。だがな、その原因を作つたのは、悠斗、お前だ」

雛子からの事情聴取を終えた悠大は、自室のベッドで布団にくるまつていた悠斗をたたき起こして正座させた。そしてお説教タイムである。

「着替えを用意してやつたのも、まあお前なりの優しさからだろう。だが、最初から雛子ちゃんを妹と認めてうちに上げていれば問題は無かつたはずだ。違うか？」

「うう……違ひません」

「なら、雛子ちゃんを妹と認めるか？」

「それとこれとは話が……」

「同じ話だ」

「ううつ……」

「いいか、お前たち一人は今日から兄妹だ。ただでさえ血の繋がらない年頃の男女が一つ屋根の下に暮らすんだ。世間様の目は厳しいぞ？ 少しでもおかしそぶりを見せようものなら『あの一人は爛れた関係だ』と噂を立てられる。ならばそういう噂を立てられるような隙を見せないように普段から自分たちを律しろ」

「……」

「分かつたのか？」

その時、悠大の胸ポケットに入っていた携帯電話が軽快な電子音を奏でた。悠大はまだ説教したりないといった様子だったが、着信名を見てから廊下に出て電話を取った。

「はい、露木です。は、はい。え？ 米国赴任？ は？ 再来週から？ はい、パスポートはありますので、就労ビザがあれば、はい、はい。分かりました」
「どうやら職場からの電話だったようだ。悠大の表情が深刻なものに変わる。

「と、父さん、どうしたの？」

「再来週から、父さんは一年間アメリカの支店に赴任することになった」

廊下で話を聞いていたのだろう、都子も姿を現す。

「せっかく籍を入れてきたのに、離ればなれなんて嫌ですわ」

「うむ。この際だ。一家全員でアメリカに……」

「ちょっと待ってくれよ！」

悠大と都子は、悠斗の言葉に振り返った。何を言うつもりだろう、という表情がありありと見える。悠斗は大きく息を吸うとほつきりと宣言した。

「俺と離子は、日本を離れないと！」

第一章 恋人が妹！？ 2（後書き）

いかがでしたか？ よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章 恋人が妹！？ 3（前書き）

第一章の3をお送りします。それではどうぞー！

一階のリビングルーム。風呂から上がりつて悠斗の持つてきたスウェットスーツに着替えた雛子も交えて、四人が『家族』になつてから初めての家族会議が行われていた。

「で、悠斗。お前はさつき何と言つたんだつたかな？」

冷徹な悠大の声がまるで巨岩のような重さを持つて悠斗にのし掛かる。だが、ここで怯んでいるわけにはいかない。悠斗はありつけの勇気を振り絞つてそのプレッシャーをはね除けた。

「俺と雛子は、日本を離れないと言つたんだ。大体、俺が仁正学園に入学するのにどれだけ勉強したと思つてるんだ？ 担任教師からは『絶対無理だ、やめておけ』と言われ、友達からも『高望みはやめろ』と言い続けられ、そんな中で勝ち取つた合格だぞ？ 父さんはそれを紙くずのようにほいほいと捨てろつていうつもりか？ 父さんだって仁正学園への合格は喜んでくれてたじやないか」

悠大は口を一文字に結んだまま、腕組みをしてソファーに深く腰を下ろしている。悠大にとって、悠斗がこれほど反発するのは初めての経験だった。もちろん反抗期はあつた。だが、「父さんの言うことは絶対だ」という教育方針の下、悠斗の反抗期はさほど長くは続かなかつたのだ。

その悠斗が、恐らく初めてと言つていいほど、はつきりと自分の意志を父親に伝えようとしている。鬼のような形相の下で、悠大は正直驚かされていた。自分の息子がここまで自分の意見を主張できるほどに育つっていたということに。

「だがな、悠斗。世間様はそうは見てくれないぞ？ 血の繫がらない男女が一つ屋根の下に暮らすと言つことは、そこには……うおっほん、それ、あれだ、色々と不純な事があるのじゃないかと疑われるものだ。確かに進学校の仁正学園に通い続けたいというお前の意見はもつともだ。だがな、それで家族が離ればなれになつてもいい

「こうことはないんじゃないかな？」

「俺はこのまま仁正学園に残りたい。雛子！ 雛子だつてそうだよな？」

突然自分に話を振られてあたふたとしていた雛子だったが、落ち着きを取り戻すと控えめながらはつきりと頷いた。

「うん……。わたし、今の中学校園に通い続けたい。せっかく難関を突破して入った仁正学園だもの。わたしは卒業まで通いたい」

「まあ、雛子がこんなにはつきり自分の意見を口にするなんて。もしかしたら初めてなんじゃないかしら」

都子が驚きを隠せないと行つたようすで自分の娘を見つめている。「お母さん、わたしも日本に残りたい。アメリカにはついていかない！」

「というわけだ。これが子供たちの共通の意見つてことになる。どうだ、父さん。それとも、やつぱり『親の言つことは絶対だ』と言つて受験の努力までふいにするつもりか？」

「つうむ……」

悠大の心は揺れはじめていた。確かにこの二人は恋人同士になりかけた。だが、悠斗の言動を見ていれば、雛子の嫌がることをするとは思えないし、そんな風に育てた覚えもない。雛子は悠斗になつていているし、これは子供と都子を置いて自分でアメリカに赴任した方がいいのではないか。

「悠大さん、私はあなたについていきますからね」

「えっ？ しかし、それは……」

「あなたが何を考えていたかはお見通しです。子供たちと私を残して単身赴任しようとしていたでしょう？」

まさにその通りなので、悠大はむうつと一言つめいたきり下を向いてしまった。

その時、玄関のチャイムが軽快な音をたて、来客を告げた。

「あ、そろそろ引っ越し屋さんが来る頃ね。家族会議は一日中断しましょう。お夕飯の時にでも再開したらどうかしら」

「そうだな。まずは荷物を家に運び込まなきゃならん。悠斗、雛子ちゃん。手伝ってくれ」

「分かった」

「はい！」

こうして悠斗対悠大の親子対決バトルの第一回戦は、引っ越し屋の登場によって引き分けという形で終わった。引っ越し屋が荷物を手際よく運び込む間にも、悠斗は夕食のときに行われるであろう第二回戦のことを考えていた。

少なくとも、学園へ通い続けたいという意見は武器にはなった。雛子の意見もそうだ。だが、あと一つ押しが足りない。そう、それは何かが自分には分かっている。だが、それを認めてしまえば、雛子と日本に残る事はできるだろうが、恋人という関係は壊れてしまうだろう。

悠斗はその一律背反を乗り越えなければならぬと心に決めるのだった。

* * *

夕食は引越祝いを兼ねて出前の寿司だった。都子はせっかくだから自分が作ると言つたのだが、今日くらいはいいだろうと悠大が注文してしまつたのだ。悠斗は寿司が見えるなら引っ越しも悪くないな、などと内心思いつつ、マグロばかりを狙つて食べていた。

食事が終わりにさしかかった頃、悠大がわざとらしく咳払いすると、新しい三人の家族に向かつて宣言した。

「それじゃあ、さつきの続きをはじめようか」

悠斗も雛子も表情が真剣なものに変わる。ここで両親を説得出来なければ、仁正学園での学園生活が終わってしまうことを意味している。それは悠斗だけでなく、雛子も望まないものだった。だから、悠斗は悠大に負けるわけにはいかないのだ。

「お前たち二人は日本に残りたい。だが、都子さんも残るのならま

だしも、都子さんは私についてくると言つてゐる。この状況で子供たちだけを日本に残して私たち一人だけでアメリカに渡るわけにはいかない

「なんですかー、俺は家事全般何でも出来るし、生活に不自由はないはずだ！ それに、仁正学園に匹敵するレベルの授業をやってくれる高校なんて、そういう見つかりはしないぞ？」

「だがな、世間体というものがあつてだな……。父さんや都子さんが子供を放り出して一人だけでアメリカに行つたという評判が立てば、それには尾ひれがついて世間様に知れわたる事になる」

「つまりは、俺と離子の血が繋がつていらない事が問題なんだろ？？」

悠大は鷹揚に頷いた。

「ならば、その件はもう解決済みだ

「どういうことだ」

悠斗はぐつと奥歯を噛みしめ、拳を白くなるほどに握りしめ、ソファーから立ち上がった。

「俺は、離子を妹として認めるー、だから、俺は兄として離子をどんなことがあつても、何からも護つてみせるー、たとえ父さんや都子さんがいなくたつて、俺は離子を護つてやるー、どうだ、これで問題はないだろうー？」

言い終えた悠斗は、大きく肩で息をしていた。これで全ては変わつてしまふ。離子との関係も、これまでの『彼氏と彼女』から『義兄と義妹』に変わつてしまふ。だが、それでも一緒にいられないよりはいい。仁正学園に、一緒に通えなくなるよりはずっといい。全ては自分が耐えれば済むことなのだと、悠斗はそう思つていた。

「その言葉に、嘘はないか、悠斗」

「ああ、一切ない！」

本当は未練たらたらなのだが、悠斗はぐつとそれを飲み込んで、父に返答していた。悠大は腕組みして黙考する。リビングの壁に掛けられたアナログ時計の秒針が時を刻む音がかち、かち、かちと静かな室内に響く。まるで永遠の長さのように感じられる数秒間が過

ぎ、悠大がふうっと息をつき顔をあげた。

「分かつた。悠斗を信じよう。悠斗は私の息子だ。その息子が全てをかけて離子ちゃんを妹として譲るというのだから、これを信じなくて何が父親だ」

「悠大さん……」

「都子さん。私たちの子供たちは、思つていた以上に大人になつていたということです。あなたは、私についてくれますね?」

都子は花がほころぶような笑顔を浮かべると、静かに、しかし確かに頷いた。

「もちろんですわ。悠大さんが行くところなら、私はどこにでも黙つてついていきます」

「ありがとうございます。悠斗、飯を食い終わつたらちょっと話がある。部屋に居る」

「う、うん。分かつた」

* * *

夕食の後、悠斗が父に言われたとおり自室で待つていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「悠斗、いるか?」

「いるよ。どうぞ」

扉を開く音と共に、悠大が姿を現す。いつもはとても大きく見える悠大の身体が、不思議なことに何故かその時の悠斗にはとても小さく見えた。

「父さん、正直お前があそこまで強硬に反発するとは思つていなかつたんだ。いつも父さんの言つことにはちゃんと従つてきたお前だからな。今回の再婚の件も、離子ちゃんの件も、アメリカ赴任の件も……。全部まとめて驚かされた」

「正直、俺だつて怖かったさ。ぶん殴られるんじやないかつて思つてた。でも、学校のことは本当に譲れなかつたんだ。俺は頭が良く

ないから、仁正学園の授業についていくのもやつとだけビ、このま

まならそこそこのいい大学だつて狙えるかもしね。でも、今アメリカにいつたら、それもふいになつちまつ。雛子もそうだよ。やつとの思いで入学した途端に転校なんて、そんなのあんまりだ

悠大はベッドの端に腰掛け、悠斗はその対面にある机の椅子に腰を下ろす。

「雛子ちゃんのことは、本当に妹として認めるんだな？」

「さつきも言つたとおりだよ。雛子は俺の妹だ」

「そうか。ならばいいんだ。邪魔をしたな。明日からまた学校だ。寝坊しないように、早めに寝ろ」

それだけ言つと、悠大は静かに部屋を出て行つた。トントントンと階段を下りる足音が聞こえる。きつとこつものよに一杯やつてから寝るのだろうと悠斗は思った。

悠斗は、閉じられた扉をじっと見ながら自問していた。俺は本当に雛子を諦められるのか？　あの初めて雛子を新入生の中から見つけ出した時の衝撃。一ヶ月半に渡つてうじうじと悩み続けたこと。そして、一日前の体育館裏での告白と誓い……。

「ダメだよな。俺にはやっぱり諦められない。でも、雛子と日本に残るにはこうするしかないんだ」

ベッドにひたすらうつぶせになる。自然に涙が滲んでくる。泣きわめいたら、少しは気分が晴れるかもしれない。だが、悠斗は布団で涙を拭くと奥歯を噛みしめてそれ以上涙が溢れてくるのを必死で耐えた。

(こんなことで泣いていたら、雛子を護るなんて出来やしない！)

その時、悠斗の部屋の扉を控えめにノックする音が悠斗の鼓膜をふるわせた。こんな時間にだれだ？　悠大ならもつと大きな音でノックするだらうし、都子は多分悠大に付き合つて下で酒を飲んでいるだろ？

「おにいちゃん、雛子だよ。入つてもいい？」

雛子の小さな声が扉の向こうから聞こえてきた。一瞬悠斗の心臓

が跳ね上がる。こんな間に、男の部屋にくるなんて。いやいや、妹なんだから不思議じゃないだろう。でも血は繋がっていないわけだ……。一瞬のうちに悠斗の頭の中で様々な思いが交錯する。

「入っちゃダメかな」

雛子の声には、僅かな陰りがあった。悠斗は胸を締め付けられる思いで扉の前の立つと、静かにそれを開いた。そこには、自分の荷物の中から出したのだろう、ピンクのパジャマを着た雛子の姿があった。

「入っていいよ」

「よかつたあ。ダメって言われたらどうしようって思つちやつた。

ふうん、これがおにちゃんの部屋かあ」

物珍しそうにキヨロキヨロと周りを見まわす雛子。悠斗はまだ風呂場でのことを謝罪していないことに気づいた。だが、あれは言わない方がいいのだろうか？ 悠斗は迷っていた。謝るべきか、無かつたこととして封印してしまうか。そして、彼は決断を下した。

「ひ、雛子。その……風呂場のことだけ……。『ごめん！ 本当に覗いたりするつもりじゃなかつたんだ！ 倒れる音が聞こえて、慌てて飛び込んでみたら、その……』

雛子は悠斗の言葉が進むごとにじわりじわりと顔を赤くしていた。頭から湯気が出そうなほどに真っ赤になつた雛子は、それこそ聞こえるか聞こえないかといった感じの声でぼそぼそと呟いた。

「わ、わたしこそ、ごめんなさい。手当たり次第そこらにあるもの投げてぶつけ……。痛かったでしょ？」

「いや、そんなに大したことはないから！ それより、雛子に恥ずかしい思いさせて……ほんとうに『ごめん』

雛子はますます赤くなりながら消え入りそうな声で言った。

「いいよ……」

「えつ？」

「おにいちやんなら、見られてもいいよ。大丈夫だもん。だつておにいちやんだもん」

それだけ言つと、雛子は桜の花びらのような脣をきゅっと結ぶと、下を向いて黙り込んでしまった。悠斗は今雛子が言つた言葉を反芻していた。『おにいちゃんになら、見られてもいいもん』『見られてもいいもん』『見られても』……。その途端、悠斗の脳裏に風呂場で見た雛子の肢体が蘇ってきた。ほつそりとした手脚。きゅっと締まつた腰、ふつくらとした胸元……。

想い出すにつれ、悠斗の鼻の穴から、真つ赤な液体がつうつと垂れてくる。

「あうつ！ 鼻血が！ テイツシユ……」

雛子がベッドの間に置いてあつた箱入りティツシユを悠斗に手渡す。手で鼻の穴を押さえていた悠斗の右手は鼻血で真つ赤に染まっている。ティツシユを丸めて鼻の穴に突っ込むと、悠斗は机の上にあつたウェットティツシユで手を拭いた。

「『めんな。あんな風に啖呵切つたけど、俺、やつぱり雛子のこと大好きだし、女の子だと思つて見ちゃつてるんだ。でも、おれは『おにいちゃん』だからな！ これからは雛子をどんなことからも護つてやる！ 任せておけ！』

鼻血を噴いてティツシユを鼻の穴に詰めて言つても説得力に欠けるというものだが、それでも雛子には悠斗の言葉が頬もしく響いていた。

「うん。おにいちゃん。わたしもおにいちゃんが大好き。誰よりも大好きだよ」

「雛子……」

「それに、血の繋がらない兄妹での禁断の愛つて、実はちょっとあこがれてたの。これってまさにそのシチュエーションよね」

悠斗はがくつとその場にくずおれた。禁断の愛。まあ、世間様から見ればそもそも見えなくも無いのかもしねいけど、それにあこがれる雛子つて、もしかして相当の変わり者なのだろうか？ 悠斗がそんな疑問を抱いていると、耳元で雛子の囁き声がした。

「ね、おにいちゃん。ちょっとだけ目をつぶつてくれないかな」

悠斗は何故だろうと思いながらも雛子の言つとおりに口を閉じた。次の瞬間、悠斗の脣がなにか柔らかく、暖かなものに触れていた。

「……！」

それは雛子の脣だつた。一日前の体育館裏でのキスより、ほんの少し深く、情熱的なキスだつた。ほんの僅かではあつたが。ゆつくりと脣を離すと、雛子は照れ笑いを浮かべて言つた。

「えへへっ。おやすみのキスだよ、おにいちゃん！」

それだけ言つと、雛子は扉を開けて廊下へと出て行き、最後にちらりと部屋の中の悠斗を見やると、軽く手を振つて扉を閉じた。悠斗はというと、突然脣を奪われたことに呆然として、しばらく放心状態だつた。だが、だんだんと両の拳に力を込めるとそれを天に突き上げてガツッポーズの形にしていた。叫びたい気分だつたが、悠斗は理性をフル動員して、どうにかそれだけは免れた。

第一章 恋人が妹！？ 3（後書き）

いかがでしたか？よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章 恋人が妹！？

4（前書き）

第一章の4をお送りします。
それではどうぞ！

雛子の『おやすみのキス』の衝撃で、悠斗の中の煩惱パワーはフル回転をはじめていた。だが、悠斗は悠大たちの前で雛子を兄として護ると宣言している。この約束を違えることは出来ない。

「俺は一体どうしたらいいんだ……」

布団の中で悶々と眠れない夜を過ごし、時間はもうすぐ午前四時。目を閉じると風呂場で見た雛子のあられもない姿が目に浮かんできて、男としての生理機能が目を覚ます。だが、義妹をオカズにするところのラインだけはギリギリの理性で回避し続ける悠斗だった。

「おはよっ……」

結局悠斗はその晩一睡も出来なかつた。たかだかキスくらいと笑うながれ。彼女い年齢だつた悠斗にとつて、キスとはあいさつ程度のものではないのだ。それは野生の本能を呼び覚まし、男としての機能を呼び起こす。

「あら、悠斗君、おはよっ。朝食できるわよ？」

いつもより早く起き出して来たのにもかかわらず、都子はすでに朝食の支度を調えていた。誰かに朝食を用意してもらうなんて、何年ぶりだろうかと感慨にふけつていると、まだ眠そうな雛子が階下に降りてきた。

「んー、おはよっ……えつ？ おにいちゃんー？ なんでおひつー…？」

「昨日から家族になつただる、つて寝ぼけてるな、これは。ほら、洗面所はこっちだ。顔洗つておいで」

「んー……」

キッチンからは味噌汁の香りが漂つてくる。寝不足の脳にもそれは嗅覚神経を通じて送られていて、悠斗は無性に食欲をかき立てられた。

「悠斗君、先にご飯食べちゃう？」

都子が実際に魅力的な提案をしてくる。だが、朝も露木家では親子揃つての食事が基本だった。

「いえ、父さんが降りてくるまで待ちます」

「そう。 そういえば、露木家は家族揃つての食事が基本だったわよね」

「櫻井家ではそうじやなかつたんですか?」

「私が仕事で遅くなることが多かつたから、ね。 雛子だけで先に済ませてもらうことが多かつたわ」

悠斗は一人で食事をとる雛子の姿を思い浮かべていた。 それはあまりに寂しい光景で、これからはそんな寂しい思いはさせまいと、悠斗は強く決意するのだった。

しばらくすると、悠大が寝室から降りてきた。 すでにスラックスにカッターシャツ。 首にはネクタイという姿である。 あとは上着を着て鞄を持てば通勤出来る格好だ。 洗面は二階にある洗面台で済ませたのだろう。

悠大はいつもそうである。 常に隙を見せないのだ。 格好だけではなく、悠大は仕事の上でも常に隙を見せない。 それ故に会社では部下を何人も率いる立場にいるのだ。

「おはよう、都子さん、悠斗。 雛子ちゃんは洗面所かな? 二階のは私が使っていたのでね」

「さつき寝ぼけながら降りてきたよ。 今顔を洗つてるはずだ。 はい、新聞」

悠斗は全国紙と経済紙の一部の新聞を悠大に手渡す。 いつものようだに、悠大は経済紙から目を通しあげた。

「悠大さん、新聞は後にしてご飯にしましょ。 雛子も来ましたし」

「あ……おはよう……『ございます』

「ん、おはよう、雛子ちゃん。 目は覚めたかい?」

「は、はい! それはもうバツチリ」

「そうか。 ジゃあ、露木家の恒例行事。 家族揃つての食事といこう。 ダイニングテーブルの悠斗の席の隣が雛子の席になつた。 悠大の

隣が都子だ。これまで、たつた一人で、それでも家族がそろって食事をしてきたダイニングテーブルが、急に賑やかになつたように悠斗は感じていた。

「では、いただきます」

『いただきます』

賑やかになつた食卓を楽しんでいたのは悠斗だけではなく、雛子も、都子も、そして悠大もまた大いに楽しんでいた。

一週間なんていうものは、普通に生活していればあつという間にすぎていくもので、明日はいよいよ悠大と都子がアメリカに旅立つ日である。ちなみに赴任先はアメリカ西海岸の大都市、シアトル。当分はホテル暮らしぶしながら、アパートメントを探すといつ。

一週間の間に、悠斗の心の中にもある種の余裕のようなもの出来つつあった。煩悩はしつかり保つたままだが、それを人様にさらけ出さない程度には理性で行動できるようになつた、というべきだろうか。だが、そんな彼でも、たとえば雛子の部屋の中から衣擦れの音が聞こえてきたりした日には、理性をぶつちぎつて煩悩が大爆発しそうにもなるのだつた。

『ん……、ちょっとブラがきつくなつたかも……また大きくなつちやつたのかなあ……。いやだなあ』

扉から漏れ聞こえる雛子のつぶやきに、鼻血を垂らしながら聞き入る義兄の姿。最近ご近所では「露木さんのところの新しい妹さん、お兄さんにもなつてほほえましいわね」と噂されているにもかかわらず、いざ煩悩のスイッチが入るとこれである。やはり悠斗は悠斗ということだろうか。

「はあ、はあ……、ひ、雛子、俺が護つてやるからな」

悠斗は煩悩を何とかして払いながら、常備し始めたポケットティッシュを鼻に詰め込む。實に情けない姿ではある。

その時突然扉が開かれ、学園の制服姿の雛子が姿を現した。

「ん？　おにいちゃん、どうしたの？」

「なななな、なんでもない！　ちょっと最近鼻の粘膜が弱くなつたみたいでな。鼻をかむと鼻血が出たりするんだよ」

「それより、そろそろ時間じゃない？」

「ああ、もうそんな時間か！？」

悠大と都子は、アメリカに旅立つ前日に、簡単ながら結婚式を挙げることにしていたのだ。

一週間での準備だから、本当に簡単な式しか挙げられないが、これは都子のたつての希望だつた。

悠斗も土曜日だというのに学園の詰め襟制服に身を包んでいて、いつでも出発する準備は出来てはいたのだが、雛子の着替えの脳内妄想で時間のことをするつかり忘れ去つていたのだ。

「や、おにいちゃん。お父さんたちが待つてるよ！」

この一週間で、雛子は悠大を『お父さん』と抵抗なく呼ぶようになつっていた。最初は遠慮がちに、でもだんだんと自然に。悠斗も都子のことを『母さん』と呼ぶようになつてしまふく経つ。ただ、こちらはまだ照れが混じつているのだが。

一階に降りると、すでに玄関前にタクシーが待つてあり、両親もいつでも出発が出来る姿だつた。

「よし、みんな揃つたな。じゃあ、式場にいこうか」

悠大の一言で全員が動き出す。大きな荷物がいくつかあるのは、式の後はそのまま式場のあるホテルに宿泊するからだ。明日はそこから最寄りの国際空港へと向かい、そこから空路シアトルへと旅立つ。子供たちは空港まで見送つたあと、そのまま家に帰ることになつていた。

悠大がタクシーの前席に乗り込むと、運転手は静かに車を発進させた。ホテルまでは高速を使えばタクシーで二〇分ほどだ。悠斗は手持ちぶさたにシートベルトを指先で弄りながら、今後の事を考えていた。

明日からは、悠大と都子の一人はいない。考え方によつてはこれは大チャンスだ。既成事実を作つてしまえという悪魔の囁きが聞こえるような気が、悠斗にはしていた。だが、あくまでも悠斗は兄として雛子を護ると誓つたのだ。だから、雛子が嫌がるようなことは出来はしない。それに何より、いざとなつたら多分雛子が許したものでも、度胸がなくてなにも出来ないだろう。そんなヘタレンな悠斗だった。

高速を降りしばらく走ると、空港に隣接した大きなホテルが見えてくる。一週間前という非常識なスケジュールを実現出来たのは、悠大の会社がこのホテルの大得意であり、悠大自身もよく利用するからだつた。やがて車はホテルの車寄せに滑り込むよつてして停車する。

ホテルのフロントで結婚式の予約をしている旨を告げると、受付をしてくれたホテルマンはてきぱきと必要な部署に連絡をした。

「六階がお召し替えのお部屋になります。まずはそちらへどうぞ」
ホテルマンの先導でエレベーターに乗る。するとエレベーターが上昇する感覚を感じながら、悠斗たちは六階へと上つた。六階には小さな受付があり、そこで新郎新婦と家族の名前を記名する。悠斗たちにとっては初めての経験で、記名するときの手が少しだけ震えていた。

そして、新郎である悠大と、新婦である都子はそれぞれ別室に案内された。悠斗と雛子は廊下に並べてある椅子で待ちぼうけである。「結構着替えにも時間かかるんだろうなあ

「ん……、そういううね。でもどんなドレスなんだろう。早くみたいなあ」

「雛子はやつぱりドレス派か。神前式の結婚式もいいもんだと思うけどな、俺は」

「そりなんだけどね。やつぱりドレスは着てみたいなあ

悠斗はウエディングドレス姿の雛子を想像してみた。それは想像するだけで抱き上げてお持ち帰りしたくなるほどに愛らしく、美し

い姿だった。妄想だけでこれだけ綺麗なのだから、本人に着せたらどれだけ綺麗か想像もつかない。悠斗は密かにポケットティッシュに手を伸ばし、鼻血の来襲に備えた。

「お待たせしました。ご家族の方はこちらへどうぞ」

ホテルのブライダルスタッフが悠斗たちを呼びに来る。そこには純白のタキシードを着た悠大と、真っ白なウエディングドレス姿の都子が並んで立っていた。思わず一人の口から感嘆の溜息が漏れる。

「お父さん、ダンディ……」

「母さん、すげー綺麗……」

「褒めても何も出ないぞ？　さあ、招待客も揃つたようだし、そろそろ式本番だな」

「はい、悠大さん」

六階の廊下をしばらく歩くと、何やらアンティークなデザインの木の扉がある。そこをブライダルスタッフが開くと、ホテルの六階には小さな中庭のような空間が広がり、その中央に小さなチャペルがあつた。

参列者はすでに揃つている。元々急な結婚式だ。極々近しい者しか呼んでいない。それでも、参列者たちは盛大な拍手でもつて新郎新婦を迎えた。都子の瞳に光るもののが見える。

「こら、都子さん。泣くのはまだ早いよ」

「ええ、悠大さん。分かつてます」

悠斗と雛子は二人の後に続いてチャペルへと入つていった。

莊厳なバイオルガンの演奏、聖歌隊による合唱。神父による誓いの儀式と指輪の交換。そして、誓いの口づけ。どれもが悠斗にとって眩しいものであつて、同時にもし雛子とこういう関係になれたらと思うものでもあつた。雛子は悠斗の隣で黙つて静かに涙を流していった。

「雛子？」

「ん……、お母さん、よかつたなつて」

「そうだな。すげー幸せそうだ」

「お父さん……前のお父さんね、交通事故でわたしが小学校に上がる前に死んじゃったの。それからずっと、わたしを育てるために一人で頑張ってきて、やっと新しい幸せを掴んだんだね」

「父さんもそうさ。一人が結婚するって聞いて最初は反対だつたけど、こんな幸せそうな顔されちゃ、反対なんて言つてられないよな」

「おにいちゃんは、今でもわたしが……好き……なんだよね？」

「ああ、でも俺は離子のおにいちゃんだからな！」

無理に笑顔を作つて見せる悠斗。傍目には仲むつまじい兄妹にしか見えないこの二人だが、やはりどうにも複雑な感情が入り乱れているようである。

* * *

明くる日、国際空港の出発ロビーに露木家の四人が揃っていた。当分の間、家族四人が揃うことはない。そう思うと、何とも言えな寂しさを感じる悠斗だった。それは離子も同じだったようで、「最後の夜だから」といつて都子と一緒に寝たのだった。

「父さん、初夜だったのに残念だったね」

「ぶつ、ばかもん！ あれは最初からそつするつもりで部屋を取つてあつたんだ。だから両方ともツインルームだつただろう？」

なるほど、と悠斗は納得した。そう言えば昨夜の悠大は妙に饒舌だつたと悠斗は気づく。当分の間会えない息子との時間を大切にしたかったのかもしれない。そう考えると、自分ももっとたくさん話ををしておくべきだったかもしれないと思う悠斗だった。

搭乗手続きが済み、悠大と都子は搭乗者待合室へと入つていった。もうあそこはある意味日本ではない。ほんの十数メートルしかはなれていないのに、歩いて行ける距離なのに、決定的に隔てられてしまっている。国際空港とはそういう場所だった。

最後に悠大と都子が大きく手を振る。悠斗と離子も振り返す。やがて、両親の姿は他の乗客たちの群れに紛れて見えなくなつていつ

た。

「雛子、JETは屋上の展望デッキから送迎が出来るから、そこから見送りう」

「ん……。わかった。おにいちゃんがそう言つなら、そうする」エレベーターとエスカレーターを何度も乗り換えて、送迎デッキに出る。両親の乗る飛行機はすぐに見つかった。まだ様々な車両が飛行機の周りで作業をしており、離陸までは結構な時間がかかりそうだ。

「出発時間、何時だつけ？」

「一七時五〇分だったと思つ」

「そうか。あと三〇分くらいかな。飛行機の出発時間ってのは、駐機場を出る時間だから、滑走路までいつて離陸するのはもつと後だ」

「うん……。でも、ちゃんと見送りう、おにいちゃん」

「分かつてゐる。最初からそのつもりだ」

父の全面的な信頼を勝ち取つた、悠斗の『雛子は俺が護る』宣言からすでに一週間。もうすでに雛子は妹としての自覚も出来ていて、今までみたいに悠斗にべつたりといふこともなくなつてきている。悠斗としてはなんとも寂しい限りなのだが、これも兄としては仕方のない事だと半ば諦めていた。

もうすぐ六月になろうかという季節の夕刻、展望デッキには結構な数の見物客がいた。昼間は暑いくらいだつたけれど、夕方になつて気温も大分下がつていて、風も爽やかで、これで時折風に乗つて流れてくる飛行機の燃料の匂いが無ければ、なかなかのデータスポーツとと言えた。

やがて、両親を乗せた飛行機の機外作業が終わり、搭乗口から乗客が乗り込んでいくのが見えた。ボーディングブリッジが外され、飛行機がトーリングバーで押し下げられる。同時にエンジンを一基ずつ始動し、誘導路に出る頃には全部のエンジンが廻っていた。

誘導路を進む飛行機を見つめる雛子に、悠斗が不意に声をかけた。

「雛子、ちょっとこっち向いて」

「なに？ おにいちゃんなん……」

振り向いた瞬間を狙つたキスだった。雛子は嫌がるそぶりも見せず、しばらくうつとりと悠斗に身を任せていた。悠斗は肩を離すと、にやつと笑つた。

「愛情表現してみました」

「兄妹でキスは変だよ」

「ああ、変だな。でも、雛子は嫌だつたか？」

「そんなこと聞くかなあ」

「嫌だつたか？」

「嫌……じゃないよ」

「なら好きなときにはすればいいんだ。俺は雛子を護つてやる。どんなことがあっても。この先ずっと」

展望デッキの手すりの上で、悠斗と雛子の手が触れあう。両親の乗る飛行機が離陸していくのを見送りながら、二人はしっかりと手を握りあつていた。

第一章 恋人が妹！？ 4（後書き）

いかがでしたか？よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章　従妹、襲来

1（前書き）

第一章の1をお送りします。
それではどうぞ！

翌日から、悠斗と離子の一人だけの生活が始まった。悠斗は心に鍵をかけ、離子と一緒に引くように心がけていたし、離子は悠斗をすっかり兄として見るようになっていた。ただし、その視点は若干歪んだものだつたが。たとえば禁じられた兄妹の愛、とか。

今日も朝から悠斗がキッチンに立つて朝食の支度だ。家事などは当番制にして、それぞれが交代でやることにした。朝食と夕食は必ず一緒にとる。これは両親がいたときからの不文律だ。

「あ、離子、お醤油どって」

「ん……、……！」

醤油差しを手渡そうとした瞬間、指先と指先がほんの僅か触れた。離子は思わず手を引いて、醤油差しを落としてしまった。テーブルの上に醤油が小さな水たまりを作る。

「い、ごめんなさい」

「気にしないでいいよ。このくらいならすぐ綺麗になるし」

につこりと微笑む悠斗の顔を見て、離子は胸の鼓動が高まるのを感じていた。妹としての自覚は芽生えつつあるものの、やはりそこは血の繋がらない一人である。お互いを異性として意識してしまうのは無理のないことだ、いく健全なことと言えなくもない。（ダメダメ。おにいちゃんはおにいちゃんなんだから。他の男の人とは違うのー）

「離子、どうした？ 少し顔が赤いぞ？ 熱でもあるのかな」

不意に悠斗が離子の額に手を載せる。離子の額の赤さはどんどん増していく。

「熱はないみたいだな。でも、もし具合が悪かつたらすぐ連つんだぞ？ 季節の変わり目だし、体調も崩しやすいからな」

「うん……。わかったよ、おにいちゃん」

「もういや、離子は今日はシャワー浴びないのか？」

「んー。浴びたいけど、今日寝坊しちゃったし……。昨夜はひりやんとお風呂入ってるからいいかなって」

「やうか。んじや、俺もそろそろ登校の準備してくるよ」

「うん。わかった」

そうは言つたものの、毎朝シャワーを浴びる習慣がついてた雛子はやはり何となくだが不快だった。悠斗がほんの僅かな体臭に気づいてしまうかもしれない。そんなの、絶対困るー。せつとシャワーを浴びるだけならものの数分もあれば済むだろ。

(よし、やっぱシャワー浴びてこよう！)

雛子は制服姿のまま浴室へと向かうのだった。

「んー、雛子がシャワー使わないんなら、今日は俺が使わせてもらいうかな」

悠斗は制服に着替えようと/orして、ほんの少し寝汗の匂いがすることに気がついた。これを雛子に気づかれるのはちょっと困る気がする。何となくではあるのだが。悠斗はパジャマのまま制服と下着の替えを持って、浴室へと向かった。

「さて、制服はちゃんと畳んでこいつちへ置いておこう。下着はさつき替えたばかりだから仕方ないとして、シャワーシャワーー」

浴室の扉を開ける。タイルがひんやりとした感触を足の裏から背中、そして脳へと伝えていく。

「やっぱ朝のお風呂はタイル冷たいよね。まあ仕方ないか」

雛子浴室の扉を閉じた。その瞬間、脱衣場の扉が開かる。

「シャワー、シャワーー」

(お、おこにちゃん！？)

なんということだわつ。浴室の扉の向こうには兄がいる。それも、どうやらシャワーを浴びる気満々らしい。雛子の制服は皺にならないように脱衣か」とは反対側の棚の上に置いている。

(わたし大びんちー！)

逃げ道などありはしない。あるいは小さな窓だけだが、全裸で脱出するほどの度胸は自分にはない。雛子は天に祈った。どうか兄が自分の存在に気づいてくれますように。だが、神は聞き入れてくれなかつた。浴室の反対側に追い詰められるようにして逃げて、精一杯身体を隠す。そこに全裸の兄が扉を開けて入ってきた。

「あ……」

「……っ！」

ハンドタオルで身体の前面だけを隠した雛子のあられもない姿を見た悠斗は、両の鼻の穴から大量の血を吹き出して、その場で卒倒した。

「おにいちゃん！ おにいちゃん！！ しつかりして！」

悠斗はもううつつとする意識の中で、雛子のしつかり育つた乳房を、ああ綺麗な形だな、などとのんきに評価していた。

* * *

何とか悠斗を浴室から救出した雛子は、幸せそうな顔で鼻血をどくどく出す悠斗の鼻の穴にティッシュを丸めて詰め込んでいた。もちろんシャワーはああずけだ。それどころか、全裸の悠斗に下着を着けさせ、じうして膝枕をしながら介抱している。今日はもう遅刻は確定だ。

「う……うーん……はっ！ なんで全裸の雛子が風呂場にいるんだ！！ ……あれ？」

「気がついた？ おにいちゃん」

「さつきまで凄くいい夢を見ていた気がする……」

「おにいちゃんのえっち！－」

雛子はソファーに置いてあつたクッションを探り上げると、ぼぼすと悠斗の頭を連打した。そこで悠斗も気づく。自分は確かに脱衣場で全裸になつたはずだ。それなのに、今は下着を（下だけだが）つけて、リビングの床で雛子の膝枕で寝そべつている。これらの事

実から導かれる答えは

「うわあつ！俺はむづむづお嬢にいけない！」

「それはこいつちのセリフだよ、おにいちゃん。おにいちゃんの、その、あそこが固くなっちゃって、パンツ穿かせるの大変だったんだから！」

そんなところまで見られていては、ますますお嬢にいけないと思う悠斗であった。しかし、見られたのがまだ雛子だったからよかつたのかもしれない。他の女に見せるくらいなら、雛子に全裸ダイブする方を悠斗は選ぶ。

「い」「ごめん……」

「悪気がなかつたのはわかってるから…………」

「じゃあ、許してくれるのか？」

「でも、でも、あれがあんなに大きく固くなるなんて……。保健の授業で習つてたけど、信じられない…………」

「その辺は忘れてくださいッ！――」

「忘れられないよお…………」

「お願ひだから忘れてッ――！」

不毛な会話で時間が経つのをすっかり忘れている一人だったが、壁掛け時計が九時のメロディを流しはじめたところで我に返った。完全に大遅刻である。理由を聞かれてもこんなこと説明出来るわけもない。二人は顔を見合させて恥いた。

「困つた……」

「困つたね…………」

妹（兄）と全裸で風呂場で遭遇しまして、兄の方が鼻血を大量に噴きました。これが遅刻の原因です……。変態と思われるだけだろう。

「いっそ、今日はサボるか」

「おにいちゃん、そうやってサボると癖になるよ？」

「だって雛子、お前だってちゃんと遅刻の理由説明出来るか？ 嘘ついてもすぐばれるぞ？」

そう、雛子は嘘をつくとすぐに視線が泳いでしまうのだ。だからこそ正直に素直に生きてこられたのかもしれないが。とりあえずは学校へ連絡しなければならない。この場合兄が病気で妹は看病に残るとした方がいいのだろう。

「じゃあ、わたしが学校に電話するね。電話なら田が泳いでてもわからないし、ある意味これは嘘じゃないから！」

そういうて自分を納得させないと、小さな嘘でもつけない小心者の雛子であった。

「あ、もしもし。仁正学園ですか？ わたし一年C組の露木といいます。実は兄が急な病氣で倒れまして……。はい、はい。両親もないでのでわたしが看病に残らないといけないんです。はい。担任の先生にお伝えいただけますか？ はい。よろしくお願ひします」携帯の通話ボタンを押して回線を切ると、雛子はふうっと大きく息をついた。

「もう、今日サボったのはおにいちゃんのせいだからねっ！」

「…………雛子がそんな綺麗な身体してるからいけないんだ」

「 ッ！！ おにいちゃんのえっち……」

そんな平和な露木家の日常の風景を、遠くから監視する田があつた。一見すると狙撃用のライフルのよつなビデオカメラと超高倍率のレンズ。耳には以前仕掛けておいた盗聴器からの音声を再生する為のイヤフォン。直線距離にして五〇〇メートルほど離れた高層マンションの屋上で、その少女は事の一端始終を目撃していた。

「いつの間にあんな女が……。おにいちゃん、待っててね。必ず助け出すから」

* * *

しかし、平日に学校をサボってしまうと、普通の生徒には大変退屈な一日が待っている。外に遊びに出るわけにもいかず、家の中で

趣味の合わない主婦向けのワイドショーを見るか、大して興味もないし意味もよくわからない国会中継をみるか、その程度の選択肢しかないのだ。

そして、悠斗と雛子も退屈していた。『のべら』い退屈かとくうと、変装して街に繰り出すことを本気で考えはじめるくらいには退屈していたのだ。ただ、それは悠斗の「補導されて不良のレッテルを貼られるぞ」の一言で却下されていたが。

「うー、退屈だよ……」

「仕方ないだろ、今日は一日じつして過ごすしかないんだから」
その時だった。悠斗は何か違和感を感じていた。何なのかははつきり分からぬ。だが『なにかがいる』ような気がしてならない。こんなことを雛子に言つと、オカルト関係が大の苦手の雛子のことである。裸足で家を出て逃げかねない。しかし、確かに何者かの気配がするのだ。

悠斗はまず室内で様子のおかしいところはないかを見まわした。大丈夫。特に変なところはない。この居間に限つてだが。では玄関はどうだ？

「あ、新聞取り忘れてた。ちょっと取つてくるな」

雛子に余計な心配をかけないために、悠斗はそう言つて席を立つた。雛子は総理大臣が野党の追及をのらりくらりと躲し続ける国会中継に見入つている。これなら一階も見てこれるだろう。

一階の自室と父母の寝室、そして雛子の部屋も確認する。怪しいものはなにもいない。だが、気配はより濃厚になつてゐる。これは一体何がいるというのだ？ 悠斗は背筋に冷たい物が伝うのを感じていた。

「ん？ おにいちゃん、ずいぶん遅かったね」

「ああ、ちょっと自分の部屋に戻つてた」

そう言いつつソファーの雛子の隣に腰を下ろす。一瞬、殺氣にも似た気配がその濃さを増す。なんなのだ、これは。ふと、悠斗は庭の植え込みの様子が前と少し違うような気がした。あそこの部分、

あんなに茂つていただろうか？ 疑いは確信になり、悠斗は居間の窓を開いて庭に出た。

「おい！ いるのは分かつてるんだ！ 一体何者だ！」

しかし、その不自然な茂みは全く動くことはなかった。

「そこにいるのは分かつている！ 出でこないと警察を呼ぶぞ！」

五つ数える。その間に立ち上がれ。一つ……二つ……三つ……四つ……五つ……

カウントが五になると同時に、その不自然な茂みがじそりと動いた。そして、それは人の形を取つて立ち上がった。まるで全身を植物で覆われたようなその姿は、映画に出てくるモンスターのようだつた。だがそうではない。これは

「ふん、ギリースーツか。よくできてはいるが、こんな至近距離じや流石にばれるぞ。どれ、正体を見せてもらおうか！」

悠斗の手でギリースーツを着た侵入者はみるみるその正体を露わにしていく。身長はどうみても雛子と変わらない程度。長い黒髪。ギリースーツの下には黒いゴスロリのドレス。そしてなによりその顔に、悠斗は嫌と言つほど見覚えがあった。

「ゆ……柚希……なのか？」

「……おにいちゃん……おにいちゃんっ！」

ギリースーツの下から出てきた少女は、涙を目にためながら悠斗に抱きついてきた。その少女は露木柚希、悠斗の従妹である。叔父のところの娘で、小さい頃から悠斗を実の兄のように慕っていた。だが、中学に上がってから陰湿ないじめに遭い、不登校になつていると悠斗は聞いていた。その柚希がなぜこの街に？

「柚希ね、柚希ね、とってもおにいちゃんに逢いたかったの。だからコツソリ盗んだバイクで走り出して、隣町から長距離バスにてこの街に来たの。でね、お父さんの趣味のサバイバルゲーム用のギリースーツを着込んで、庭に陣取つてたの。そしたらね、あの女があにいちゃんとイチャイチャしてるじゃない！ これって一体どうこうことー？ おにいちゃんには柚希という心に決めた相手がい

たんじやなかつたの？ なんで他の女を家に入れてるの~~~~~！

！」

もうメチャクチャである。泣き出した柚希をとりあえず部屋に入れながら、悠斗は「これで」近所の評判は一気に下がるな」と予感していた。事実、何事かと聞き耳を立てて奥様連中が多々いるのである。

柚希は部屋に入つてからも全く泣き止む様子がない。とりあえずと言つことで離子が出してやつたお茶にも一切口をつけない。

「そんな女の入れたお茶なんて、穢らわしくて柚希飲めないわ」

「おにいちゃん、この子……だれ？」

「ああ、離子は初めて会つんだつたな。叔父さんの娘さんで、名前は柚希。俺たちの従妹だ」

「俺『たち』の…？ 那は一体どういう意味、おにいちゃん！？」

悠斗はこの一週間ほどの経過をかいづまんで柚希に説明してやつた。柚希の顔がだんだんと蒼くなつていぐ。

「つまり、この女は、おにいちゃんの戸籍上の『妹』なのね？」

「そういうことだ。だから柚希も仲良くしてやつてくれ……」

「イヤよッー！」

柚希は全身で嫌悪を示していた。何でこんな女と自分が仲良くしなければならないのか、そう訴えていた。

「おにいちゃんは、柚希のおにいちゃんとしょ？ 柚希よりこんな女を選ぶっていうの？」

「こんな女なんて言つなよ。離子は俺の大事な……」

「大事な、なによ」

妹だと言い切つてしまえば柚希も納得するのだろう。だが、悠斗には何故かそれが出来なかつた。妹として接して来て、もう一週間以上も経つのに。

「ふん、なーんだ。ちゃんと関係も言えないような間柄なんだ。それなら柚希の敵じゃないわよね。『戸籍上の妹』さん、私は露木柚希。』」覧の通り、おにいちゃんの大切な従妹よー！」

「柚希ちひるんですね？わたし、おにいちゃんの『妹』の露木雛子です。よろしくね」

「なれ合つもりは無いわ！ 柚希は必ずあなたの手からおにいちやんを救い出してみせるんだから！」

悠斗は田畠を感じて、その場にへたり込んでしまった。

第一章 従妹、襲来 1(後書き)

いかがでしたか? よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章 従妹、襲来

2 (前書き)

第一章の2をお送りします。
それではどうぞ！

悠斗は柚希の家に連絡を入れた。電話に出た叔父は済まな顔をうつに柚希を頼むと繰り返すのみだった。

「いやね、悠斗君。柚希ったら昔つから君になついてたじゃないか。どうか頼むよ。しばらくの間、柚希をそつちに置いてやってくれないか」

「叔父さん…」

「とにかく、柚希はしばらく君に預けるから。君なら間違つても起これないだろつし」

「叔父さんは僕をなんだと思つてるんですか！？ 年頃の男ですよ！？ 今うちに親がいない事は叔父さんだつて知つてるでしょう！」

叔父はそれでも引き下がらない。何とかして柚希の苛きのつもりを治したい一心なのだろつ。

「頼むよ。柚希の生活費は当然こちらでもつか。昔みたいに遊んでやつてくれ。それじゃあ、頼んだよ！」「がちやん。つー、つー、つー……。

「なんて叔父さんだ……」

「ね？ 柚希の言つた通りでしょ？だから、おにいちゃんは安心して柚希を預かつてくれていいいの。もちろん、柚希にあんなことやこんなこともしていいのよ？お父さんはダメだつていつてたけど、柚希が許しちゃう！」

悠斗は顔を真っ赤にして怒鳴つた。

「なんだその『あんなことやこんなこと』ってのは…俺には柚希にそんなことをするつもりは一切ない！」

その言葉を聞くと、柚希は大きな瞳に涙をため、ぱるぱるとこぼしあげた。慌てて柚希をなだめようとするが、柚希の涙は止まらない。しゃくり上げる声も大きくなり。またさつきと同じように大

声で泣き出してしまった。

「おにいちゃんは柚希が可愛くないの…？ そんな女の方がいいって言つたの…？ いいわよ、柚希、電車に飛び込んで死んじやうから！ その方がおにいちゃんもせいするでしょ！ 止めても無駄なんだからあつ！」

手脚をじたばたさせて、全く手がつけられない。悠斗は頭を抱えて、やるかたなしといった感じで首を振った。柚希は昔はもっとおとなしい女の子だったはずだ。最後に会つたのは柚希が小学六年の冬休みだから、二年半ほど前になる。この三年間で一体彼女に何が起きたのか。悠斗は口ではきつこことをいいながらも、やはり幼い頃から良く知つてゐるはずの柚希の変貌を心から心配していた。

なにしろ登場の仕方からしておかしいのだ。ギリースーツというのは、戦場で狙撃兵が茂みなどに隠れるときに使う偽装服だ。植物そつくりで、遠田にはまったく本物の茂みと見分けがつかない。そんなものを叔父さんが持つていたのも驚きだが、それを使って庭に忍び込もうなんて考える柚希の思考回路もまた驚きだつた。聞けば、家でも毎日パソコンに向かつてなにやらブツブツいながらキーボードを叩いていたらしい。

（不健全だ。まったくもつて不健全だ。中三の女の子がそんなことでどうする。仕方ない、叔父さんのことおつ、しばりくの間うちで預かるか）

それが柚希の張つた巧妙な罠であるとも知らずに、悠斗は柚希を家で預かることを決めてしまつていた。

「わかった。柚希、お前はしばらくうちにいていい。引き籠もつてばかりいるよりは何倍もましだろうからな。ただし…」

悠斗はそこで言葉を切ると、すつと大きく息を吸い込み、より大きな声ではつきりと柚希に告げた。

「万一離子になにか変なことを仕掛けたら、即家に送り返すからそのつもりで… いいね？」

「はーい！ 柚希いい子だからそんなことしないもん！」

「どの口でほざいてやがりますか、この弓見のもり娘は……」「

「ん？ なにか言つた、おにいちゃん？」

「あー、何でもない！ とにかくだ。今日は一日家で過ぐせ。実は

今日俺たちは学校を休んでいる」

柚希がそう言えば、といった表情で首をかしげる。

「今日つて平日だよね？ なんで学校休んでるの？」

「ううう……そ、それは……」

にやりと柚希が笑う。その瞳は「なんでもお見通しだ」と言わんばかりに輝いている。悠斗はその柚希の目を見て、何故か背筋に冷たい物が走ったような気がした。

「柚希知ってるもーん。おにいちゃんとそここの女が朝から素っ裸で風呂から出でてくるところ見てたから。うわあ、いやらしい。とんでもない女よね。人のおにいちゃんを取るだけじゃなくて、色仕掛けまで仕掛けるなんて！ 柚希信じられない！」

なぜ柚希がそんなことを知っている？ 悠斗は正直焦っていた。一体どこから見ていたと言うのだろうか。朝カーテンを開けたときには植え込みに異常はなかつた。塀のおかげでお隣さんなどからは居間の中はみえないし、お隣さんの二階の窓は雨戸が閉まつたままだ。

と、悠斗の目に一つの建物が目に入った。直線距離で五〇〇メートルほどは離れているだろうが、ちょっとした高層マンションだ。この部屋を覗くには絶好のポジションである。しかし、まさか？

「スナイパー柚希ちゃんを舐めないで欲しいわ。狙った情報は即ゲット。どんなに隠そうとしても、この柚希ちゃんの目からは逃れられない。それがたとえおにいちゃんのひとりえつむぐうつ……」

これ以上喋らせては危険だ。雛子にも教育上よろしくない。そう判断した悠斗は、柚希の口を無理やり塞いですると自分の部屋に引きずつていった。ひとり居間に残された雛子は、まるで嵐が去つた後の被災者のような表情で呆然としていた。

「……なんか、凄い子だったなあ……」

* * *

自室にまで柚希を引きずり込んだ悠斗は、そこでやつと柚希の口を放してやつた。柚希はといえば、涙田で何かを言いたがっている。

「あとにかく座れ」

柚希はベッドサイドにそつと腰掛けそのまま横にならうとする。

悠斗は頭から湯気を出しそうな勢いで怒鳴つた。

「そうじやなくて！ 床に正座しなさい！」

「えー、柚希、正座つきらいー。足が短くなつちやつ

「そんなことはないから、とにかく正座！」

ブツブツと文句をいいながらも、一応悠斗の言つことに従う柚希だつた。これでとりあえずお説教モードに入る事が出来る。悠斗はようやくほつとした。だが、相手は三年前の素直な柚希ではない。この三年間で歪みきつた柚希である。

「いいか、柚希。朝のあれはな、事故だ。そう、不幸な事故なんだ。だいたいなんだ？ あれを見ていたといつことは、あそこのマンションの上からでも見ない限り無理じゃないか！ 朝に庭の植え込みには異常はなかつたからな！ なんでそんな非常識なことを

「ちつちつちつ。おにいちゃん、自分の常識だけが世間の常識だと思つちゃダメよ。柚希には柚希の常識があるの。柚希はそれに従つて行動しているだけ。誰にも恥じることはないわ」

「世間一般的の常識を『常識』つていうんだよー。柚希がいつてるのは『自分ルール』つてやつであつて、常識じゃない！」

「じゃあ、その世間一般的の常識つていつのを柚希に教えて。か・ら・だ・で(はーと)」

正座していた足を崩し、黒の「スローリーラスの裾から、白い太腿を悠斗に見せつける。黒のスカートと白い肌のコントラストが眩しい。大体、この柚希という少女は黙つて座つていればどんなでもない美少女なのだ。すらりと伸びた手脚。スレンダーな体つき、小ぶり

な顔に精緻の極みを仄くしたよつた田鼻立が。それがわざとスカートの裾をめぐりあげて悠斗を誘惑しようとしている。

「だから… そういうのをやめなきこつて言つてるの… 誰に囁つたんだそんな」と…

「え？ ネットのえつちなサイトだよ？」

「ああいつとこりは子供は行つちゃダメでしょ！」

頭痛のする頭を抱えながら、悠斗はさつきの決断は早計過ぎたんじゃないかと思ははじめていた。悠斗のなかの柚希のイメージは、可愛らしくて、素直で、大人しくて、とても頭のいい少女だった。だが、田の前の柚希はどうだ？ 引きこもりが過ぎるといつも人格が歪んでしまうのだろうか。

「とりあえずだ。当分の間うちで預かるといつのはいい。叔父さんにも頼まれちゃつたしな。でもな、柚希。いつかは家に帰らなきやならないんだぞ？ それはちゃんと分かつてるだろくな？」

「うん！ 柚希ちゃんと分かつてるよー。その時はおにいちゃんも一緒にお父さんとお母さんにあいさつに来てね」

「全然分かつてないじゃないか！ 僕は、柚希をそういう対象に見てない！ そりや柚希は可愛い従妹だけど、それとこれとは話が別だ！」

「うう… 後から抱きすくめて部屋に引き寄せり込んだくせに…」

…

「それは柚希がるくでもなことと言つからだろー。いいか？ とにかく柚希は離子に手を出さない！ あいつは俺の、俺の…」

「『俺の』… なに？」

「……っ！ な、何でもいいだろー。とにかく柚希は離子にちよつかい出すな。いいな！」

悠斗が扉を開けて部屋を出ようとすると、外では離子が壁に耳をつけて中の様子を窺つていた。慌てて居住まいを正すが、何をしていたのかは一目瞭然である。

「何してんの、離子？」

「え……、ん……敵情視察？」

「なんだそりや。とりあえず居間に戻ろつ。そろそろ昼だからな。何か軽く食べるものでも用意するよ」

「え？ いいよいよ。おにいちゃん朝作ってくれたじゃない」

「これは柚希の出番ね！」

二人の間に柚希が割り込んで仁王立ちしていた。右手はぐつと拳を握つて、目には炎を燃やしている。大昔のスボ根アニメみたいだ。

「出番つて、柚希、料理なんて出来るのか？」

「カツブ麺にお湯を注ぐことは得意よ？」

「そんなんじやなくて！ ちゃんとした料理が出来るのかって聞いてるんだ！」

「失礼ね。柚希引き籠もつてたから、昼はいつも自分で作つてたわよ。チャーハンぐらいならすぐ作れるわ」

チャーハンなら自分にも作れるという言葉をぐつと飲み込んで、悠斗は目の前の超絶美少女である従妹を見下ろした。身長差がかなりあるので、柚希はあごを気持ち上に上げて、上目遣いに悠斗を見上げてくる。その目には自信が満ちあふれていた。これならまあ任せてもいいか。悠斗はそう判断した。

「じゃあ、昼は柚希に作つてもらおう。俺たちは居間でテレビでも見て待つてるから」

「はいはーい！ 柚希ちゃん特製のチャーハンを待つてね」

柚希のその軽いノリの返事に、何となく嫌な予感のする悠斗であった。

＊＊＊

予想に反して柚希の料理の手際はとてもよかつた。いつも昼を自分で作つてゐるという言葉に嘘はないようだ。悠斗はこれなら任せ大丈夫だろう、とキッチンから居間のソファへに戻ってきた。

「どうだつた、おにいちゃん？」

「うん。手際はかなりいい。作りなれてるって感じだつたな

「そつか。わたしも負けてられないなあ」

両の拳を胸の前でぐっと握る雛子。そんな仕草もとても可愛く見えて、悠斗の頬は緩みっぱなし。そんな一人を尻目に、柚希はある企みを実行に移そうとしていた。

腰につけたポーチから小さな小瓶を取り出すと、皿に盛る前の一杯分のチャーハンにこれでもかと振りかける。

「ん？ なんだ、この匂い？」

「え？ なんのことかしら。柚希には普通のチャーハンの匂いしかしないけど？」

「うーん、まあ、食べ物の匂いだからそんなに気にする事ないか」

柚希は密かにガツッポーズをしていた。柚希の持っていた小瓶の正体は、間もなく明らかになる。三杯分のチャーハンを作り終え、柚希はダイニングテーブルに皿を運んだ。

「はーい！ 柚希ちゃん特製のチャーハンの出来上がりですよー！」

柚希の作ったチャーハンは、見た目にはとても美味しそうである。これと言った特徴もないのだが、ごく普通に作られた家で作るチャーハンだ。だが、悠斗はとも、とても嫌な予感を抱えていた。そして、その予感はおそらくは正しい。

「柚希、お前のチャーハンと雛子のチャーハン、取り替えてくれないか？」

「えっ！ ……な、なんで？」

「特に理由はない。なんだ？ 同じものなのに取り替えられないのか？」

?

顔にびっしりと脂汗を浮かべる柚希。心なしか全身が震えているようにも見える。「これはビンゴだ。悠斗はそう確信した。これは絶対になにか仕掛けがあるに違いない。悠斗は追い打ちをかける。

「雛子の方が少しだけ量が多いんだ。雛子はちょっと小食でさ。その量だとちょっと多すぎると思つんだよな。だから、取り替えてくれないか」

悠斗の真剣なまなざしが柚希の瞳を射貫く。今やその震えは端から見えていたのはつたりと分かるほどで、テーブルに置かれたタンブラーに注がれた麦茶の表面がさざ波を立てているほどだ。

「どうなんだ？ 取り替えられない理由でもあるのか？」

「わ、わかつたわよ！ 取り替えればいいんでしょう！ はい！」

柚希は乱暴に皿を雛子の方につきだしてきました。雛子はそつと自分の皿を柚希の方へ差しだす。自分の方へ廻ってきた皿を見て、だらだらと汗を流す柚希に、悠斗は満面の笑みで言つた。

「さあ、露木家の食事は家族揃つてが基本だ。では、いただきます」

「いただきます」

「い、いただき……ます」

悠斗と雛子の二人はごく普通に食べ始めた。味もごく普通。当たり前のチャーハンの味だ。だが、作った本人の柚希は一向に手をつけようとしない。

「どうした？ 柚希、さつきから全然食べてないじゃないか」

「お、おほほほほ！ そんなことはないわ！ ほら、この通り！」

スプーンの先に米粒をほんのちょっと載せて、柚希は口に運んだ。次の瞬間、柚希の前にあつたタンブラーの中の麦茶は空になつていった。急いで継ぎ足す柚希に向かつて、悠斗の容赦のない声が飛ぶ。

「そんなんちびちび食べてたらいつまで経つても食べ終わらないぞ？ もつとこう、がばつと食べろよ。柚希は昔からよく食べる子だつたじやないか」

「ううう……。わ、わかりました！ 柚希、逝きます……」

なんだかセリフの漢字が不吉なのは仕様なので気にしないで欲しい。ともかく、柚希はスプーン一杯のチャーハンを掬つて、それを自分の口の前まで運ぶと、震える手で口の中に放り込んだ。

見る間に柚希の顔が真っ赤になつていぐ。そう、まるで『唐辛子』でも丸かじりしたかのように。

「やっぱり何か仕込んでたか……。柚希、怒らないから仕込んだものを出しなさい」

やつとの思いでチャーハンを飲み込み、『ぐぐぐ』と麦茶を流し込んでいた柚希だったが、悠斗の言葉に身を固くした。怒らないから出しなさい、と言われて正直に出したらきっと怒られるに違いないのだ。だが、悠斗はじっと柚希の瞳を見つめ続けている。嘘は絶対許さないという、確固たる信念がそこにはあった。

「ばれてしまつては仕方ないです。これです……」

ことん、という音と共にテーブルの上に置かれたのは、一部の辛い物好きの間では有名な『死のソース』だった。それが半分ほどなくなっている。

「これ、どれだけかけたんだ?」

「一気に半分ほど……」

悠斗は呆れ果てたと言つ様子でため息をついた。まあ、策士策に溺れるというところなのだが、自分の作った『死のチャーハン』を前に涙目になつている柚希をこれ以上強く叱る氣にもなれない悠斗だった。

「ふう……。とりあえず柚希はこれ食べてる。俺は自分でなんか作るから。流石に『死のチャーハン』は捨てざるを得ないだろうからな」

一口ほど食べた自分のチャーハンを柚希に差しだした悠斗は、『死のチャーハン』の皿を持ってキッキンに向かった。生ゴミの中にそれを捨てるとき、思わず心中で「お百姓さんごめんなさい」などと呟いてしまう。ご飯はまだチャーハン一杯分ほどは残っている。

「じゃあ、格の違いってヤツを見せてやるか!」

悠斗は中華鍋を取り出すと、腕まくりをしてエプロンを着けるのだった。

第一章 従妹、襲来 2(後書き)

いかがでしたか? よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章 従妹、襲来 3（前書き）

第一章の3をお送りします。
それではどうぞおー。

『死のチャーハン』事件以来、柚希の態度は日に見えて大人しくなった。悠斗もようやく息をつく暇ができ、雛子もまた同じだつた。午後になつて学校の担任教師から悠斗と雛子それぞれに連絡があつたが、雛子がなんとか誤魔化して事なきを得た。本当にやつてしたことなんて言おうものなら、停学とか退学とか言う前に、教師たちは呆れ果てて開いた口が塞がらないだろ？

そして時刻は夕暮れ。下校時刻もすぎ、ようやく外に出ても怪しまれない時間になつた。悠斗は冷蔵庫の中身をチェックする。食材が大分えしくなつてきていた。これは買い物に行かなければならぬいだろ？

「というわけで、俺と雛子は近所のスーパーまでちょっと買い物に行つてくる。柚希はその間テレビでもみてゆつくりしててくれ」

「はーい。おにいちゃん、今日の夕飯は誰が作るの？」

「今日の当番は雛子だよ」

それを聞くと、柚希は露骨に嫌そうな顔をしてみせた。まるで「そんな女の作った料理なんて食べるのは『免だわ』」とも言いたげだ。いや、実際そう思つてているのだろう。

悠斗と雛子が買い物に行く支度をしている間、柚希は大人しく大方の二コース番組をテレビで見ていた。悠斗もこれなら大丈夫だろうと思つたのだろう、出かける前に柚希に一言声をかけた。

「んじや、柚希、留守番よろしくな」

「はーい。柚希におまかせあれ、おにいちゃん！」

ドアの閉じる音と鍵をかける音を確認した柚希は、口の端を釣り上げてにたあつと笑つた。いま、この家の中には柚希一人しかいない。こんなチャンスを逃すほど、柚希はお人好しではなかつた。庭に起きつぱなしになつていていた軍用ショルダーバッグを部屋に持ち込むと、柚希はその中から様々な電子機器を取り出した。小型のカメ

ラ、トランスマッター、赤外線センサー、振動センサー、その他諸々……。

「さて、まずは風呂周りから攻めましょうか……。フフフ……おにいちゃん、待ってね。必ずあの女の魔の手から救い出してあげるから」

両手に電子機器を山のように持った柚希は、早速行動を開始した。まずは脱衣場である。物陰にかくれるように、かつ被写体の姿を見逃さぬように、細心の注意を払つて隠しカメラを仕掛ける。それにトランスマッターを取り付け、手元にある液晶モニタで画像を確認する。角度も絶妙、これなら被写体の裸身を余すことなく撮影出来る。

続いてマイクだ。これも物陰に隠れるように設置する。コンセントのタップの形をしており、実際にそういう使い方も出来るし、一〇〇ボルトのコンセントから電源を取るため、電池を用意する必要もない。

浴室も同様だ。だが、浴室の中は物陰が少ない上に湯気でレンズが曇る。そこで、柚希はレンズに特殊コートを施したカメラを用意していた。それを浴室の上有る窓の枠に仕掛ける。マイクは反対側の枠だ。手早く作業を終えると、手元の液晶画面とレシーバーでカメラとマイクの動作状態を確認する。どちらも良好。問題なし。

続いて居間だ。こちらには振動感知センサーと赤外線センサーを用意。やはり物陰に隠して設置する。カメラは照明器具の枠に見えにくいうように配置。マイクは一年半前の冬休みにおもしろ半分で設置したものがまだ生きていた。

一階はこれでよし。続いて二階に手をつける。

一階の構造は、柚希の頭に入つていなかつた。前に遊びに来たのは一年半前。それもたつたの二泊しかしていない。だが、さつき引きずり込まれたのは間違いなく悠斗の部屋だろう。ならばまずそこから攻めるべきだ。柚希は隠しカメラとマイクを手に、悠斗の部屋

の扉を開けた。

「ああ、おにいちゃんの匂いがする……」

変態的な自分の欲求に素直な柚希は、しばしその甘美な香りに心を奪われていたが、はつと我に返ると先ほどと同様の作業を繰り返した。しかし、小学六年の冬休みに父親に無理を言って遊びに来た時、居間に「冗談半分に仕掛けおいた盗聴器がまだ生きているとは、さすがの柚希も思わなかつた。もうとっくに寿命を迎えているだろうと考えていたのだ。だが、そのおかげで『あの女』と悠斗との桃色遊技を確認することが出来たのだ。

「頑張ってくれたね、盗聴器さん」

悠斗の部屋の次は、そう『あの女』の部屋だ。だが、どの部屋だらう。確かにこの部屋は客間に使っていたはずだ。ということは、この部屋をあてがわれている可能性は高い。それに、この部屋には内側から鍵がかかるようになつていて。柚希はドアのノブを捻つて鍵がかかつていることを確認した。間違いない、ここだ。

「こんなチョロい鍵なんて、三〇秒もあれば……ほら、解錠！」

中は予想したとおりの女の子の部屋だつた。柚希は内心ほくそ笑みながら、てきぱきと盗聴、盗撮グッズを仕掛けていく。そして終了。開始から一五分も経っていない。恐るべき手際の良さだつた。

「フフフ……。これも全てはおにいちゃんをあの女の魔の手から救い出すためなのよ。柚希にはその権利があるの。おにいちゃん、待つつてね」

* * *

「ただいま。柚希、ちゃんと留守番してたか？」

買い物から帰つた悠斗が家中に声をかける。すぐに柚希の元気な声が返ってきた。

「うん。ちやーんとも留守番してたわよ、おにいちゃん。柚希を褒めて褒めて？」

「よーし、えらこやー」

「えへへへー。おにいちゃんに褒められちゃつた。柚希、しあわせ
っ！」

背後では雛子が面白くなれやうな顔で一人の様子をみていく。何となくではなるが、疎外感を感じる雛子であった。

（そりや、この子は昔からおにいちゃんと仲がよかつたんだし、当たり前なんだけど……なんか、イヤだ）

玄関でサンダルを脱いだ雛子は、ふくれつ面のままキッチンへと向かった。今日は柚希も来ているからちょっと贅沢にすき焼きにしよう。悠斗はそう言つた。だが、なんであんな子を歓迎しなきやいけないんだろう。雛子にはそれが納得いかなかつた。

「さて、今日は柚希を歓迎してすき焼きだ！ 肉も結構いいのを買つてきただぞ？」

「歓迎料理がすき焼きって、昭和のセンスだよ、おにいちゃん……」「美味ければそれでいいじゃないか」

「まあ、そういうけど……『あの女』にどれだけ美味しいすき焼きが作れるか、柚希、疑問だわ」

また『あの女』呼ばわりだ。いつまでこんな風に我慢していいなければならないのだろう。雛子の中には黒い雲がわき上がり始めた。悠斗の従妹で、自分にとつても、戸籍上は従妹になる柚希。悠斗は優しくて大人しくていい子だったと言つけれど、今の柚希を見ると雛子にはとても信じられなかつた。

夕食の間も、雛子のその気持ちは收まらなかつた。それどころか、ますます黒い雲の量は増えていき、やがて嵐が吹き荒れるようになつた。怒りの対象は柚希だけでなく、悠斗にも向かうよになつていつた。

「んじゃあ、悪いけど先に風呂入らせてもらひうな」

「ん……。わかつた。おさきにどうぞ、おにいちゃん」

「柚希は次にはいるーー！」

雛子は柚希と一緒にいるのが正直苦痛だった。だから、この家で

唯一ひとりきりになれる場所、自分の部屋へと向かった。階段を上がる間も、雛子は憂鬱だった。これではまるで自分が柚希から逃げているようではないか。いや、実際そうなのだ、と雛子は気づいた。あの一つ年下の『従妹』は、自分と悠斗との間にはない信頼関係や、深い理解で結びついている。自分にはそこに割り込む余地はない。

自分の部屋の前まできて、雛子はショートパンツのポケットに入れてあつたキー ホルダーを取り出した。この部屋は家中で唯一鍵がかけられる。雛子と悠斗が日本に残る事を許された理由は、この部屋の存在もまた大きいのだ。雛子は鍵を鍵穴に射し込んで回す。

「あれ？ 鍵、閉め忘れてたかな……」

部屋に一步入る。別段変わった様子はない。気にしそぎだ。単に自分が部屋を出るときに鍵をかけ忘れただけの話。ただそれだけの話だ。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドに腰を下ろし、そのまま上体だけ横になる。蛍光灯の光が眩しい。何だか視界が歪んで見える。雛子はそれが自分の涙だと言うことに気づいた。

（ああ、わたし、あの子に嫉妬してるんだ……）

* * *

「ふう。今日はなんか学校サボつたわりには妙に疲れる一日だったな」

浴槽にたっぷりのお湯を張り、肩まで湯に浸かった悠斗が呟く。無理もない。可愛かつた従妹が、いや、今でも十分美少女なのだがそれは置いておいて、あの素直だった柚希が、二年半でまるで別人に変貌してしまっていたのだ。気疲れするのも無理はない。

「さて、シャンプーするかね」

悠斗は浸かっていた浴槽から出ると、壁面についたカラランのところまで歩いた。歩くといつてもほんの一歩ほどだが。リンスインシャンプーのボトルの頭を数回プッシュして、手のひらにシャンプー

をとる。頭から熱いシャワーを浴びて髪と頭皮を濡らし、悠斗は髪を洗い始めた。

と、その時、かちりと浴室の扉が開く音がした。悠斗はシャンプー中で目を開ける事が出来ない。だれだ？ 誰だといつても、今この家に居るのは悠斗以外には離子と柚希しかいない。そして、そ のどちらが入ってきたとしても、それは悠斗にとつて非常にまずい事態だった。

「フフフ……おにいちゃん、柚希がお背中お流しに来ましたわ」

悠斗は目を開けようとするが、シャンプーが目に入つて開けられない。逃げようにも逃げられない絶体絶命の状態だった。

「フフフ……。おにいちゃん。目を開けたくても開けられないのね？」柚希がちゃんと身体を洗つてあげますから安心してね？」

悠斗の耳はボディソープのポンプを数回プッシュする音と、それを何かに塗りたくる艶めかしい音を捉えていた。

（これは……まさかっ！）

「おにいちゃんの身体は、柚希の身体でキレイキレイしてあげますからね」

ぬるりとした感触が背中に触れる。あの柚希が、身体を使って自分の身体を洗つている！ これつてまるで……。悠斗の理性は崩壊寸前だった。背中には小ぶりだが柔らかな双丘の感触。胸から腹部にかけては細く華奢だけど、それでもやはり柔らかな腕と手の指の感触。こんな責め苦に耐えられる男がいたら、悠斗はそいつの顔を是非見たいと思った。

悠斗の下半身が熱く硬くなつてくる。これ以上はダメだ！ そう思つた瞬間、柚希の指が悠斗のそこを撫でていた。

「つ…………！」

「おにいちゃん……、こんなに固く、熱くなつて……。気持ちいいんですね？ 柚希嬉しい！」

悠斗はカラソのノブを思いきり捻つて、熱いシャワーを全開で浴びた。もちろん後にいた柚希も巻き添えだ。

「さやつー、お、おにいちゃん、いつたい何を？」

「それはこっちのセリフだ！ なんで柚希が入ってくるんだ！」

「だって、やつさ『柚希は次にはこります』って宣言したもん」

「それはもう言ひ意味じゃないだろ！」

「それより、おにいちゃん……。その逞しいものを隠さないでいいの？」

悠斗は股間を柚希に突きつけるようにして呟んでいたことに気がついた。シャワーで泡を無理やり洗い流して、風呂場を脱出する。「うん、もう……。おにいちゃんの恥ずかしがり屋さん。柚希に見られるのなんて初めてじゃないのに」

* * *

「まだだ。また女の子に見られてしまった。俺は本当にお嬢にいけない！」

濡れた身体のまま一階の浴室に駆け込むと、悠斗はベッドの上で悶絶していた。今日は厄日だらうか。それとも自分は何か悪いことでもしたのだろうか。これはその罰だとでもいうのだろうか。

「このままじゃダメだ。俺がもつとしつかりしないと、煩惱に流されてしまうー。離子となならそれもまたありなんだが……いやいや、何をいつてるんだ俺は！ 畦子は妹なんだぞー。父さんだって信用してくれたから日本に残らせてくれたんだ」

悠斗はとりあえず自分の分身に落ち着くように言ひ聞かせつつ、自分にも理性的であれと言い聞かせるのだった。

その夜、柚希は悠大が使っていた部屋を寝室としててがわれた。露木家で預かる間は、この部屋を自分の部屋として使つていいと悠斗に言わされたのだ。もちろん、国際電話で悠大に許可をもらつてのことである。

「父さんの本とか結構あるから、勝手に触らないでね。あと、布団

は押し入れの下の段のが来客用のだから、そつちを使って

「はーい。ホントはおにいちゃんと一緒に寝たかったのになあ。柚

希寂しい」

「ななな、なにをいつてるんだ柚希はー そんなの小学生までだ！」

「ちっ」

「なんか言つたか？」

「ん~ん? 柚希何も言つてないよ?」

「ならよし。明日からは俺たちは学校だけ、とりあえずあんまし近所をうろつかないよう!」補導されたりしたら面倒だからね

「はーいー!」

「じゃあ、俺はもつ寝るから。柚希も早く寝ろよ?」

悠斗は部屋の扉に手をかける。振り返ると畳の床にぺたりと座り込んだ柚希が手を振っている。

「おやすみ、柚希」

「おやすみなさい、おにいちゃん」

柚希は悠斗が部屋に入り、寝入るまで隠しカメラで監視し続けた。小型のノートパソコンに悠斗の部屋と、離子の部屋の両方の映像が映し出されている。画像は極めて鮮明。音声も明瞭に聞き取れる。悠斗は朝が早いせいか、布団に入つてすぐに寝息をたてはじめた。対して離子はまだ着替えておらず、机でなにか書き物をしているようだ。

「丁度いいわ。あの女に柚希とおにいちゃんのうぶらうぶ泡プレイを見せつけるチャンスね」

映像はすでに都合のいいようにカット、編集されている。音声もだ。これを見せつけられたら、離子はどんなに驚くだろう。柚希はその歪んだ喜びに身を震わせていた。

ノートパソコンの一人の部屋の映像を閉じ、柚希はそつと部屋の扉を開く。悠斗が起き出してくる気配はない。

離子の部屋の前で、柚希はすっと息を吸い込み、ふうっと吐き出

した。そして軽くドアをノックする。中から雛子の「どうぞ」という声が聞こえる。なんだ、鍵がかかる部屋なのに、その鍵をかけてないじゃないか。

(これはおにいちゃんがいつでも夜這いに来られるように、つていう配慮に違いないわ！)

嫉妬の炎に身を焦がしながら、柚希は扉を開き、雛子の部屋に入った。

「こんばんは。戸籍上の『妹』さん」

「こんばんは。引きこもりの『従妹』さん。何かご用？」

「ええ、あなたにちょっと見て欲しいものがあるの」

「見てほしいもの？」

柚希はノートパソコンを広げて、動画を再生した。都合のいいよう位に編集した、悠斗と柚希のあられもない姿が画面の上で動き回る。雛子の顔は蒼白だった。信じられない、信じたくない。でも、こんなにはつきりした証拠がある。これでは……。

「柚希ちゃん。ちょっとこれ貸してね」

「どうぞどうぞ」

柚希は雛子に恭しくパソコンを差しだした。それをひつたくるよう位に受け取ると、雛子はまっすぐ悠斗の部屋に向かつ。悠斗の部屋には鍵はない。雛子は扉を乱暴に開けて踏み込んだ。

「おにいちゃん！ ちょっと起きて！」

完全に寝入っていた悠斗は、何事かとあたふたしながらも目を覚ました。その目の前には、これまでに見たことのない怒りの形相を湛えた雛子が仁王立ちしている。

「おにいちゃん……これは、どうこうひとつ……！」

雛子がノートパソコンを突きつけると、悠斗のあたまから血がさつと下がった。いつの間にこんな動画を？ いや、問題はそっちじゃない。完全に雛子に誤解されている事の方が悠斗にとつては大問題だ。

「わたし、おにいちゃんにとつては邪魔者だったんだね」

「ひ、雛子。誤解だ！ これは柚希のヤツが！」

「聞きたくない！ おにいちゃんなんて、大ッ嫌い！」

そう叫ぶと、雛子は階段を駆け下り、サンダルに乱暴に足を突っ込むと、夜更けの街へと走り去つていった。

第一章 徒妹、襲来 3（後書き）

いかがでしたか？ よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第一章 従妹、襲来

4 (前書き)

第一章の4をお送りします。
それではどうぞ！

行くあてなんてどこにもなかった。ただ、家に居たくなかった。悠斗と柚希のいる、あの家に。離子は家を飛び出してから財布も何も持つていなかつたことを思い出していた。まったく、そそつかしいにも程がある。でも、あの映像を見て冷静でいられる程、自分は人間が出来ていないと離子は思った。

五月末の夜の空気は、昼間の熱気を少し残したねつとりとした粘りのあるもので、それがなんとも離子には不快だった。

「これから……どうしよう」

ポケットを探ると、五百円玉が一枚出てきた。これで深夜営業の喫茶店にでも入るか？ それともファーストフード店で朝まで粘るか。でも、その後は？ 朝になつたら、自分は一体どうすればいいのか分からぬ。

足は自然と明るい方へ明るい方へと進んでいく。それにつれて、人の数も増えていく。終電も間際のこの時間でも、醉客は数多く街を徘徊している。自分はその酔っぱらいたちよりよほど惨めだ。離子は涙をこらえるのに必死だった。

やがて、彼女は自分が繁華街より一本路地裏に入り込んでいることに気づいた。前には柄の悪そうな若い男たちが数人たむろしている。普段の彼女なら、脱兎のごとく逃げ出す状況のはずだった。だが、離子はそちらへと足を向けた。

「彼女、一人？ よかつたらオレたちと遊ばない？」

「あ、この子泣いてるよ。こんな可愛い子泣かすなんてどんな悪人だ？」

「ねえねえ。この先にさ、オレのよく行く店があるんだ。そこで一杯どう？」

普段は口をきくのも怖いと感じるタイプの男たちが、離子を取り囲んでいる。だが、不思議なことに、その時の離子にはその男たち

が怖いとはこれっぽっちも感じられなかつたのだ。

「ん……、いいよ。いつしょに行く」

「ヒューッ！ 今日はツイてるぜー。こんな可愛い子とお近づき元なれるんだからー。」

「店つて、どー?」

「ヒッチだよ。ついて来な」

ああ、自分はなんか道を踏み外してるんだなと離子は感じる。だが、それでもいい。信じていた悠斗が柚希とあんな事をしていたのだから。もう何がどうなつても構わない。今はこの男たちに身を任せよう。そんな諦めが、離子の心を支配していた。

「離子……。離子ーー！」

家を飛び出していつた離子を追つて、悠斗もまた街へ出でいた。嫌な予感が止まらない。このままでは何か取り返しのつかないことになつてしまつ。そんな考えが悠斗の頭の中に渦巻いている。走つて、走つて、走り回つて、離子が立ち寄りそなところをしらみつぶしに訪ねる。だが、そのどこにも離子は居なかつた。

「くそつ、あんな動画さえなればっ！」

あれを撮つたのは間違いなく柚希だ。確信を持てる。でも、三年前の柚希はパソコンのパの字も分からぬよつた機械音痴だつたはずなのだ。それがこの三年間で、あんな事が出来るまでになつている。

「とにかく、離子を捜し出せなきや。この街だつて夜はヤバイ奴らが結構いるんだ」

悠斗は疲れた足に鞭を打つ、再び夜の街を走り出した。

その悠斗を冷めた目で見つめるひとりの少女がいた。黒髪にゴスロリのドレス。スレンダーな体つき。誰あらう柚希だ。

「ふーん、おにいちゃんはあの女のためにそんなに必死になつちゃうんだ。柚希、もつと意地悪したくなつちゃつたなあ」

その時、柚希のスカートのポケットに入つていた携帯電話が着信

音を奏でた。片手で操作し、通話ボタンを押す。

「柚希よ。首尾はどひへ。うん……うん。それ、好きにやがやつ。

柚希ちゃんが許しちゃう。え？ ご褒美？ FXでちやんと稼いでるから心配しなくていいわよ。じゃ、お願ひねー

柚希は片手で再び通話ボタンを押して、回線を切る。その白い相貌には、酷薄な笑みが浮かんでいた。

「かわいい！」

柚希は咽をくくつと鳴らすと、我慢出来ないといった様子で笑いはじめた。その笑い声は、夜の街に遠く響いていった。

六

「さて、お嬢さん。リリードのお楽しみタイムどこでかと思ひで
すがね」

先頭を歩いていた男がニヤニヤと笑いながら雛子に顔を近づけてくる。酒とタバコのヤニの匂いが鼻をつく。思わず顔をしかめた雛子に、男は容赦ない平手打ちを食らわせた。よろめいて、路地に倒れ込む。すえた匂いのする路地裏の、その薄汚い路面に、雛子は力なく横たわっていた。

「ボス」からは好きなんうにしていいでよ。お前ら、もうこう乳臭いタイプ好みだろ？ 剥いちまえ」

その言葉の意味を理解すると、みのやく雛子に恐怖感ひしこものが沸き上がってきた。剥ぐところは、要するに……服をはぎ取れということだらけ。その先は、おさまつの一ースだ。

「アサヒ二年生」

「お？ なんだ、抵抗すんの？」

そんな気力死んでからかうにがり腰抜けになつてると思つてた」

「わやわやわやわや」と、下衆な笑い声が裏路地に響き渡る。男たち

の手が、雛子の服にかかる。

「面倒だから破いちまおうぜ」

「いや、さすがにオレはそこまではしたくないぞ？」

「いい子ちゃんぶりやがって。お前だってこれからオレと六兄弟になるんだぜ？」

「それもそうだな、んじゃ、遠慮なく破らせてもらつか」

雛子は路地の地面を後じさりながら、必死に自分の身体を隠そうとする。だが、ここには裏路地。身体を隠すものなど何も無い。その時、雛子の耳に自分を呼ぶ義兄の声が聞こえたような気がした。こんな路地裏で、そんなはずはない。見つかるはずなんかない。そう思っていても、雛子はその僅かな望みにすがりついた。

「おにいちゃん……、おにいちゃん、んー！」

「あやははは、おにいちゃんわ〜ん、だつて！」この子ブラコンだぜ！」

「残念だけど、お前さんのおにいちゃんとやうは来やしないよ。こんな路地裏でみつかるわけガツ！」

一人の男が、突然の背後からの一撃で打ち倒される。男はその場にくずおれた。

雛子は信じられない思いだった。目の前に、悠斗がいる。どれだけ走ったのだろう、全身汗まみれで、肩で息をして。両膝に手をついて、ゼエゼエとえぎながらも、その双眸には怒りの炎が燃えていた。

「お前ら……俺の大事な雛子に何してやがる……」

悠斗の押し殺した声が男たちを一瞬怯ませる。だが、多勢に無勢だ。一人倒したとはいえ、相手は四人、こちらは悠斗ひとり。だが、悠斗には守るべき約束があった。父と交わした大切な約束。どんなことがあっても、雛子を護つてみせるという、男の約束だ。だから、人数なんて関係ない。こちらが命を落とそうが、雛子さえ無事に家に帰せば、それで約束は果たされたことになる。

「コイツ、なんかヤバイ薬でもキメてるんじゃねえの？」

「あー、ジャンキーはヤベェな」

「つるせえー！　俺は正気だし、薬なんかキメてねえ！　てめえら、タダで済むと思うなよ？」

一人の男が懐からナイフを取り出して鮮やかな手つきでそれを開く。バタフライナイフというヤツだ。悠斗もその存在くらいは知っている。

「おもしろい、おもしろいよ、お前。だからちょっとだけ相手してやるよ」

「雛子！」

「え……え？」

「俺の後に下がれ！」

「ん……わ、わかった……」

路地にへたり込んでいた雛子がふらりと立ち上がり、悠斗の後に隠れる。悠斗は履いていたスニーカーの靴先で、地面にざつとラインを引いた。

「ここから先には、誰一人通さねえ！」

男たちはその言葉に色めき立った。

「舐めやがって！」

「ぶつ潰してやる！」

だが、男たちには気づいていない事実があった。それは、この路地があまりに狭く、同時に打ちかかるのはせいぜいが二人まで。ちゃんと動こうとすれば一人ずつしか前に出られないのだ。そして、悠斗は『素人』ではなかつた。仁正学園では、授業で必ず武道を履修し、卒業までには全員が初段をとるまでに腕を上げるのだ。

まず一人同時にかかつてきた男が次々と打ち倒される。確実に急所を突いた一撃に、男たちはたまらず悶絶した。次に飛び込んで来た男は、手に鎖を巻き付けていた。だが、悠斗はそれを余裕を持って躊躇する。次の瞬間、男は宙を舞っていた。受け身の取れない角度での投げ技。とても危険な技だ。だが、男の頭は先に倒れていた二人の男たちの上に落ちた。それでも男は脳震盪を起こして気を失

つた。

最後に残つたのは、バタフライナイフの男だつた。下手にナイフを振り回さず、切つ先を確實に悠斗に向けてくる。しばしのにらみ合いの後、男が悠斗の顔面めがけて突きを繰り出した。悠斗はギリギリのところで躱す。薄皮一枚がナイフの刃で斬られ、つうつと赤い血が頬を伝づ。

「驚いた。これを躱されるとはな。だがな、ボウズ。ナイフにはこんな使い方もあるんだよ！」

男は突然ナイフを悠斗の腹をめがけて投げつけた。後には雛子がいる。避けることはできない！ だが、悠斗の怒りは集中力を極限まで高めていた。彼は飛んで来たナイフを上げた膝と下げた肘で挟んで受け止めたのだ。

「う、嘘だろ……。そんな馬鹿な……」

「まだやるのか」

「ひつ！」

「まだやるのかと聞いていいる！」

悠斗の一言に気圧された男は、仲間を見捨てて路地の反対方向へと走り出した。

「忘れ物だ！」

男の足下にバタフライナイフが転がつてくる。男はそれを畳んで懷に隠すと、路地の角を曲がつて走り去つていつた。風に乗つてパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。もしかしたら通報されたのかもしれない。

「長居は無用だ。雛子、走れるか？」

「う……うん。大丈夫だよ、おにいちゃん」

だが、走り出した途端に雛子は転んでしまつた。見れば足首が少し腫れている。どうやらさつき軽い捻挫をしていたようだ。悠斗は黙つてしまがみ込んだ。おぶされ、という意味だろう。

「ほら、早く」

「ん……」

雛子はしつかりと悠斗の背中ににおぶさると、耳元で呟いた。

「おにいちゃん」

「ん?」

「怖かったよ……」

「もう大丈夫だ。家に帰ろうな」

雛子は堰を切つたように泣き出した。胸に回された腕にぎゅっと力がこもる。ふつくらとした胸が背中に当たっているけれど、不思議と煩惱は発動しない。悠斗はある種の充実感を感じていた。自分は雛子を護れた。その充実感を。

「で? 柚希は『あの女』を好きにしていいよっていったよね?
それがなに? 全員伸されてこの様なわけ?」

深夜、人気のない廃工場。ゴスロリドレスに黒髪ロングの美少女が、数人の男を前にしてふんぞり返っていた。少女は靴の先で跪いた男のあごを持ち上げると、靴の裏で頬をぐりぐりと踏みにじる。「あれほど『任せてください。チヨロいつすよ!』なんていつてたのに、何その体たらくは。そろいも揃つて無能ばっかり」

少女 露木柚希 はこの男たちを金で雇い、雛子を襲わせたのだ。要するに、自作自演というやつである。柚希はまだ毒づき足りないと、言つた風に男の顔に向かつて唾を吐きかけた。べちゃりと音がして、少し粘りけのある唾液が男の頬を伝う。男は屈辱に耐え続けていたが、我慢もこれまでだつた。

「なあ、あんた。あんたは何か勘違いしてないか? オレたちはあんたの払う金と、少々の楽しみで雇われてやつてるだけなんだぜ?」「お金なら払つたじやない。それともあれじゃ足りないとでも?」

男は口の端をぐいっと釣り上げて凶悪な笑みを浮かべた。まるで肉食獣が羊の群れを見つけた時のような表情だつた。

「ああ、足りないね。金じやなくて、お楽しみの方がな!」

男たちはそれまで『ボス』と慕めていた柚希を『お楽しみ』の対象に格下げした。男たちの雰囲気が豹変したことにより、柚希も当然気づいていた。だが、時はすでに遅すぎた。

飢えた狼どもが、華奢な肢体を求めて我先にと殺到する。手脚を無理やり押さえつけられ、動きを封じられる。ここに至つてやつと柚希の防衛本能が目を覚ました。怖い。怖い。怖い。こんなのイヤだ！

「いやあっ！ 柚希、こんなのがいやあっ！」

「へつへつへ。さつきの子は可愛かつたけどちょっとばかり乳臭い感じだったからな。お前さんみたいなべっぴんさんなら、俺たちも大喜びだ！」

「こんなはずじゃなかつた。男たちなんて、所詮は金で雇う使い走りに過ぎなかつた。その男たちが、今自分に向かつて牙を剥いてくる。欲望をむき出しにして、押さえつけてくる。

「いやつ、やめてえつ！！」

黒いゴスロリのドレスが破られ、下着が露わになる。リーダー格の男がショーツに手をかける。

「へつへつへ。ではご開帳～」

「いやあっ！ 助けてっ、おにいちゃん！！」

「おやあ、ボスもブランコですか？ おにいちゃんが助けに来てくれるといいですねえっ！？」

リーダー格の男は、ブランコのように振られてきたクレーンのチーンの直撃を背中に食らつてもんなり打つた。他の男たちも柚希から手を放し、周囲を警戒する。

「ごふうつ！」

また一人、チエーンの餌食になる。

残る男は三人。

「へげえつ！」

また一人がチエーンの直撃を受けて地面に転がる。残るは一人。

その二人の男の頭には、さつきイヤと言うほどぶちのめされた相手

の顔が浮かんでいた。

「天が呼ぶ地が呼ぶ従妹が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ……」

「ま、まさか、そんなことは……」

「そうだ。そのまさかだ！『おにいちゃん』参上ー！」

「おにいちゃん……おにいちゃん……！」

残る二人の男は顔を見合わせると、「クリと領き、脱兎のう」とくかけだしていた。その背中を容赦のないクレーンの一撃が襲つ。男たちは縛れるようにして倒れ、びくびくと痙攣していた。

「柚希、大丈夫か？」

「あ、ああ、うわあああああああああああん！怖かったよ、おにいちゃん！！」

安心して張り詰めていた緊張の糸が切れたのか、柚希は声を上げて泣いた。悠斗の後にはいつの間にかノートパソコンを持った雛子が寄り添うように経つていた。柚希はそれを見て、なぜ自分の位置が悠斗に分かつたのかを知つた。

「ぐすり、おにいちゃん、柚希の携帯をGPSで追跡したでしょ」「ああ、お前のお気に入りのケータイらしいからな。いつでも持つてるだろ？これならお前がどこにいようと、すぐに場所が分かる」「ぐすり、柚希に隠れてそなことしてるなんて、おにいちゃんずるこ」

「金に任せた雛子を襲わせた柚希がそれを言つたか？」

「ううう……。そ、それは」

「冗談でした、じゃ済まないぞ。雛子、お前から言つことはないか？」

雛子は苦笑いを浮かべながら、悠斗から風呂場であったことの真相を聞いたこと。襲われたのは事実だけど、悠斗が助けに来てくれたから無事ですんだこと、そして自分は柚希を許そうと思つていてることを伝えた。

「ほんとうに、それでいいの？」

「うん、いいよ。だつて……」

「おこちゃんね』わたしたちの『おこちゃんだつて分かつたか

」

「うん……でも、柚希、おこちゃんは渡さないからね」

「墨むすびね。わたしだつて絶対におこちゃんは渡さないから

！」

第一章 従妹、襲来 4（後書き）

いかがでしたか？ 少しでも楽しんで頂けたとしたら書いたものとしてはこれ以上ない幸せです。もしよろしければ「意見」「感想などお寄せください。

幕間劇と云ふ言葉でもなこのですが、ストーリーにちよつと絡んで
へゆのじよりしかねばならぬから。

おにこちゃんがあそびに来てくれた。久しぶりにこっしょにあわんでくれた。とつともうれしかった。つかれておひるねしたときが、おにこちゃんがうでまくらをしてくれた。わすれ、とつともうれしかったよ、おにこちゃん。

月 田

わよいわねにこちゃんがひづらこる。わのひはねとまつだつた。わすれとこっしょのおくやで、みんなでこっぱこおはなしした。わよいわねりとおねむりこっしりしたけど、おにこちゃんが「わるこのせねれだ」ってかばつてくれた。あつがとく、おにこちゃん。

月 田

わよいわねにこちゃんがこべにかえつかけられた。えきまでおへつに行つたけど、わすれをびしくてなこちやつた。そしたら、おにこちゃんがおでこにキスをしてくれた。「なかなかで。またくるから」と。でも、つぜにあえるのはめりと来年だ。わすれ、それまでがまんできなこよ。おにこちゃんがほんとうにわすれのね元いちやんだつたらここに」と。

* * *

月 田

おにこちゃんが遊びに来てくれた。一年ぶりだった。少しせがのびていた。わすれは小さこままなのよ、おにこちゃんだけずるこ。そうこつたり「わすれもわいちゃんと大きくなつてゐよ」とつてこつてく

れた。やつぱりゆずきはおにいちゃんが大好きだ。

月 日

おにいちゃんがおつきなクワガタをつかまえてきた。ゆずきは虫がこわいので、ないてにげまわつたら、なんでなくんだよつて追いかけてきた。きょうのおにいちゃんはちょっときらり。だつて、ゆずきが虫をひこなのはしつてるはずだもん。でもね。ほんとうはゆずき、おにいちゃんがだいすき。ほかのおともだちとまちがつ「だいすき」なの。

月 日

ゆずきはおにいちゃんがいえにかかる日でした。えきまで送つたら、やつぱりねびしくてゆずきはないぢやいました。そしたら、おにいちゃんがほっぺにキスをしてくれて、「またかなうするからつけてやくそくしてくれました。ほかのひとがみてるまえでキスされるのは、とつてもはずかしかったけど、でもとつてもうれしかったです。ゆずきはおにいちゃんがだいすきです。

* * *

月 日

今日、おにいちゃんがうちに来た。本当に久しぶり。ずっと大事にしてた写真より、もっと大人っぽくなつててすきだつた。柚希はおにいちゃんと一緒にお風呂に入れるのを楽しみにしてたのに、おにいちゃんがいやがつた。なんでつて聞くと、男の子と女の子が一緒にお風呂に入るのはおかしいつて言つた。ゆずきは楽しみにしてたのにな。

中学に入つてから、おにいちゃんはなかなか遊びに来ててくれなくなつた。もしかしたら、柚希のこときらいのかな。でも柚希はおにいちゃんがだいすき。クラスの男子なんて子供にしか見えない。

おにいちゃんは柚希にとって特別な人。

月 日

今日はおにいちゃんが勉強をしてくれた。でも、柚希がどんどん問題を解いていたら、「これじゃあ、俺がみてやる必要ないよなあ」とて言つてた。もしかして、嫌われちゃったかな。でも、そのあとおやつと一緒に食べたときは、にこにこしてるのでおにいちゃんだった。柚希の考えすぎだったかもしれない。

やっぱり柚希はおにいちゃんが大好き。クラスの誰に告白されても断るくらい、おにいちゃんが大好き。夜もいまは別々の部屋で寝かされるようになつた。これが大人に近づいていくことなのかな。だとしたら、柚希は大人になんかならない。なれなくていいから、おにいちゃんといつしょに寝たい。また、小さいときみたいに腕まくらしてくれるかな。

月 日

今日、おにいちゃんは都会に帰つてしまつた。駅までいつものよううに送つていつたけど、いつもみたいにキスはしてくれなくなつた。おにいちゃんになんで? って聞いてみたら「キスは特別な相手とするんだ」って言われた。ショックだつた。柚希はおにいちゃんの特別な人じやなかつたんだ。

涙がボロボロ出てきて止まらなかつた。そしたら、おにいちゃんはキスの代わりに頭を撫でてくれた。電車がくるまでずっと。「柚希の髪の毛はきれいだな」ってほめてくれた。キスはしてくれなかつたけど、やっぱり柚希はおにいちゃんが大好き。きっといつか、おにいちゃんの特別な人になつて、いっぱいキスしてもらえるようになるんだ。

* * *

月 日

今日、おにいちゃんが街からやつてきた。すっかり大人っぽくなつていてまるで別人みたいだつた。迎えに行つた柚希に氣づいて手を振つてくれた時は、なんだか胸がドキドキした。「柚希も大きくなつたな」って言われて、ちょっと嬉しかつた。だつて、柚希だつて来年は中学生だ。いつまでもこどもじやない。女の子の……アレも始まつちやつたし。

今はなんでおにいちゃんがお風呂に一緒に入れないつていったのかがよく分かる。柚希だつていまおにいちゃんに裸をみられるのは恥ずかしい。でも、おにいちゃんになら見られてもいいかな、とも思う。それに、保健の授業でもやつてた。大人になつたら、男の人と女人が一緒になつて子供を作るんだつて。柚希の相手はおにいちゃんしか考えられない。それ以外の人に裸を見られるなんて絶対にいや。やつぱり柚希はおにいちゃんが大好きなんだ。

月 日

今日はおにいちゃんといつしょに海に行つた。水着を見られるのが何となく恥ずかしい。クラスのほかの女の子は、柚希より胸が大きかつたりするから。きっと中学生だともつと大きいんだろうなと思う。そんな女の子を見なれているおにいちゃんには、柚希の胸はべつたんこに見えるに違いない。でも、おにいちゃんは「柚希、水着似合うな。手脚が長いからよけいにきれいに見える」つて言つてくれた！ 柚希のことをきれいだつて言つてくれた！ 柚希は嬉しくて嬉しくて涙がでそつたけど、海に飛び込んでなんとかごまかした。

おにいちゃんがきれいつて言つてくれるなら、他の誰かがブスつていつても全然気にならない。海で遊んでもとき、おにいちゃんに「柚希の夢はなに？」つて聞かれた。柚希は「おにいちゃんのお嫁さんになること」つて答えた。おにいちゃんはちょっと困つたような変な顔をしていた。柚希じゃダメなの、おにいちゃん？

月 日

今日は海辺で花火大会があつた。おにいちゃんはお父さんの浴衣を借りて、柚希はお気に入りの金魚の浴衣を着て、一緒に出店をまわつたり花火を見たりした。今年はおにいちゃんはもう少しうちにいられるらしい。また一緒に海に行きたいし、山にも行きたい。柚希が虫きらいを克服したことを教えてあげたいし、こんな大きな花火じやなくて、手で持つてやる花火も一緒にしたい。井戸で冷やしたスイカと一緒に食べたり、魚釣りをしたりもしたい。

でも、一緒にいられる時間は限られてる。昔はおにいちゃんが本当のおにいちゃんだったらしいのについて思つてたけど、今はちょっと違う。柚希はおにいちゃんのお嫁さんになりたい。そしたらずつと一緒にいられるし、一緒にいるのが当たり前になる。でもおにいちゃんはどう思つてるんだろう。柚希なんか敵わないくらいすてきな人を好きになつたりしてないよね？

月 日

今日は近所のおじさんの案内で海釣りに出た。おにいちゃんは釣りは初めてだつたみたいで、餌を針につけるのに四苦八苦してた。柚希がすんなり餌をつけてみせたら「お前、よくそんな気持ち悪いの触れるな」ってびっくりしてた。道具は全部借り物だけど、おにいちゃんはなんと初めてでタイを釣り上げた。これには船頭のおじさんもびっくりしてた。なんだか柚希は鼻が高かつた。柚希のおにいちゃんは実はすごいんだからつて自慢したかつた。

釣りが終わつたら、おじさんが釣り上げた魚をその場でさばいておさしみしてくれた。これもおにいちゃんには初体験だつたみたいで、田をきらきらさせながらおじさんがおさしみをつくるのを見ていた。都會ではおさしみはスーパーで買うものらしい。そんなの本当のおさしみじゃないよと柚希がいつたら、おにいちゃんは「そうかもしれないな」って少しさびしそうな顔をした。柚希はいつで

もおにいちゃんに笑つていてほし。柚希がそばにいるだけじゃ、ダメのかな、おにいちゃん。

月 日

おにいちゃんがうちに長期滞在している理由が分かつた。伯父さんに無理を言って、夏休みの間なるべく柚希と一緒にいたいと言つてくれたらしい。柚希は涙が出そうなくなりこつけしかつた。でも、その本当の理由を聞いたとき、柚希はしばらくおにいちゃんとお別れしなければならないんだと知つた。おにいちゃんはこれから受験勉強とかで忙しくなる。だから、この町にもなかなか来ることが出来なくなる。そしたら、柚希とも会えなくなる。

だから、あの厳しい伯父さんを説得してまでうちに来てくれたんだ。柚希がこの町にいるから、こんなに遠くにいるから、おにいちゃんは無理をした。「めんなさい、おにいちゃん。中学校に上がったら、こんどは柚希が街まで会いに行くからね。

月 日

おにいちゃんは毎日必ず勉強をしている。誰に言われなくても、必ずだ。おにいちゃんが行きたい高校は、とてもレベルが高いそうで、今から準備していいととても合格出来ないらしい。そんなおにいちゃんを柚希はすごいと思う。だつて、同じクラスの男子なんて遊ぶことしか考えてないもの。いつもカードゲームやゲーム機の話ばかりしてる。

でもおにいちゃんはちがう。自分の目標を決めて、自分で頑張つてる。柚希は応援することしかできないけど、どうか神様、おにいちゃんを入りたい学校に入れてあげてください。もしこの願いが叶つたら、柚希はなんでもします。どうか、おにいちゃんの入りたい学校に入れてあげてください。

月 日

今日はとうとうにいちやんが街へ帰つていった。いつもと同じように柚希は見送りに行つた。でも、これで今までの何倍も会えない時間が増えてしまうと思うと、柚希はどうしても涙をこらえられなかつた。ぽろぽろ涙をこぼして泣いていたら、おにいちやんがそつと肩を抱いてくれた。そして、「柚希はいつうちに来てもいいんだから、泣くな」って言つてくれた。柚希は来年中学に上がつたら、柚希から会いに行くつておにいちやんと約束した。

会えない時間が増えたなら、会いに行ける方が行けばいい。柚希はそう思つ。今までおにいちやんがそうしてくれていたんだ。電車がくるまで、おにいちやんは柚希の肩を抱いていてくれた。夏で暑いはずなんだけど、おにいちやんの体温はなぜか気持ちよくてふしぎだつた。中学に入つたら、きっとおにいちやんに会いに行こう。そして、すこし大人になつた柚希をおにいちやんに見てもらうんだ!

月 日

今日はお父さんに無理をいつて、おにいちやんの家に遊びに來た。クリスマスプレゼントに、柚希の手編みのマフラーをあげた。おにいちやんは「柚希がこんな事できるよつになつてたとは思わなかつた」と驚いてた。

そうだよ、おにいちやん。柚希は来年から中学生。一步大人になるの。だから、そのマフラーを巻くときは、柚希のことを想い出してね。おにいちやんはちょっと田が不揃いなそのマフラーを、それでも嬉しそうに受け取つてくれた。とっても嬉しかつた。

夜中、みんなが寝静まつた後、持つてきた電源タップ型の盗聴器を仕掛けた。ネット通販で買つたんだけど、本当に電源タップにしか見えない。使うあてなんてないんだけど、他に使う場所もなし、ここに仕掛けちゃおう。見つからないか、なんだかドキドキする。柚希はなんだか悪い子になつちやつたみたい。

* * *

月 日

今日、ある女子生徒から言いがかりをつけられた。柚希がその子の好きな先輩を誘惑してるとこだ。柚希はそんなことしたことはないし、第一、柚希にはおにいちゃんがいる。他の男の子なんて全然気にならない。なのにその子は「大野先輩を返して」と繰り返し柚希に言つてくる。どうして? 柚希はなにも悪いことしていないよ?

月 日

今日、体育館裏に何人かの女子生徒に呼び出された。全然心当たらないことで文句を言われた。柚希が「ちょっと可愛いのを鼻にかけてる」なんて言われた。そんなこと、一度もいったことないし、自分がとりわけ可愛いなんて思つてないのに。みんなの見てる前で土下座して謝れと言われた。謝る理由なんてないから断つた。そしたら、みんなに引っぱたかれたり蹴られたりした。バケツに入った雨水をかけられたりもした。

月 日

今日、昨日のことを持任の先生に相談した。そしたら、学級会で問題してくれたんだけど、柚希の言つことは全然信じてくれないのに、昨日柚希を呼び出した生徒たちの言つことは何でもかんでも信用していた。結局、クラスにいじめはありません、ということになつた。その日の放課後、下駄箱に柚希の靴はなかつた。探し回つたけど、どこにもなかつた。

月 日

今日から学校に行かないとお父さんと言つたら叩かれた。「首根っこ引っ張つてでも学校へ行かせる」といつて、柚希を家の外に放り出した。柚希は学校であつたことを全部話した。でも、お父さん

は信じてくれなかつた。「転校させてほしい」といつても取り合ってくれなかつた。ああ、お父さんは柚希の味方じゃないんだつて思つた。こんな家に生まれたのが柚希の不幸なのかもしけない。お父さんは柚希を守つてくれると思つてたのに。

月 日

今日も家に居る。あんな奴らのいる学校なんか行かなくても、家でも勉強は出来る。自分が不細工なのを棚に上げて「あいつは男に媚びを売つてちやほやされてる」なんていうバカ女なんて死んでしまえばいい。頭も頬もろくな出来じゃないんだから、その方が世のために人のためというものだ。学校からの連絡がうざつた。本当はただ単に自分の担任の生徒が不登校だと体裁が悪いから学校に出てこいと言いたいだけなのが丸見えだ。そんな学校なんて行く価値なんてい。柚希は自分で勉強できる。

月 日

FXのコツが分かつてきた。上手くやれば少ない元手でもあつといつまに大金持ちだ。ネットでの仲間も増えた。仲には盗聴器とかの専門知識を教えてくれる人もいる。柚希が女の子だつて知つたら急に馴れ馴れしくなつたから切つたけど。お父さんが学校へ行けどうるさい。もう中学の教科書なんてとっくに終わつてる。柚希は学校なんか行かない。こうして家に居れば、少なくともいじめられることはないから。

月 日

伯父さんが再婚して、アメリカに海外赴任したらしい。お父さんがそう言つてた。おにいちゃんは? と聞くと、学校のために日本に残つてゐるという。これはきっと神様が柚希にくれたチャンスに違ひない。ネットで隣町から出でている長距離バスの時間と運賃を調べる。大丈夫、そのくらいのお金はいつでも払えるくらいにはFX

で稼ぐことが出来た。隣町まではそこいらに止まつてゐるバイクでも盗んで走つていけばすぐだ。

家にこもつてもうすぐ一年になるけど、よつやくおにいちゃんに会いにいける。おにいちゃん、待つてね。柚希は少しだけ大人になつたから、きっとおにいちゃんの特別になれるはずだから。家を出るのは今日の夜。お父さんたちが寝静まつてから。このチャンスを逃したら、きっと柚希は一生後悔する。だから、おにいちゃんのところに行くの。

いかがでしたか？ もしもお仕事なれば、「意見」、「感想」などお聞せ顶け
い！。

第三章 義妹と従妹

1 (前書き)

第三章の1をお送りします。
それではどうぞ！

雛子と柚希を危機から救い出し、悠斗はますます一人から慕われる事となつた。甘え方も半端ではなく、二人して悠斗を取り合つなんてことも日常茶飯事だ。今も柚希が雛子にずるいずるいを連発している。学校では一人きりになれるだろうと黙々とこねているのだ。「なあ、柚希。俺と雛子は学年が違うんだぞ？」一緒にいるのは学校の行き帰りぐらくなもんで、ほとんどの時間は別々に過ごしているんだから」「ひー

「それでも、同じ学園の制服を着て、一緒に登校して、やつぱひなたんずるいー！ 柚希も一緒に登校したいー！」

あの一件以来、柚希は雛子のことを『ひなたん』と、雛子は柚希のことを『ゆずちゃん』と呼ぶようになつていた。まあ、多少仲がよくなつた程度であつて、悠斗を巡る争奪戦は終わつたわけではないのは前述の通りだ。

「ゆずちゃんも学校行けばきっとたくさんお友達できるよ？」

「そうだぞ、柚希。お前はただでさえ可愛いんだから、まず男子が放つておかないな」

悠斗のその言葉に、柚希は凍り付いた。それまで笑顔だった顔からは表情がすっぽりと抜け落ち、まるで中身のない人形のような雰囲気を放つている。悠斗と雛子も敏感にそれを察して、一体何が柚希をそんな風にしてしまつたのかと思案を巡らせていた。

「男の子なんて……嫌い。それに媚びを売る女の子はもつと嫌い。クラスの奴らなんか、みんな死んじゃえばいいのに。柚希だけがつまはじきにされて……柚希、何も悪いことしてなかつたのに、大野先輩を誘惑したとか、男に媚びを売つてちやほやされてるとか……。そんなの、全部自分たちのことじやない。なんで、なんで柚希がそんなこといわれなきやいけないの？」

言葉はだんだんと途切れ途切れになり、鼻を啜る音も混じつてくる

る。ああ、柚希が不登校になつた理由が、少しだけど分かつた。悠斗はそう思った。きっと、柚希の姿を妬んだ女子生徒に陰湿ないじめを受けたのだろう。よくある話だが、まさかそれが自分の身内に降りかかるつていふとは。

「柚希、無理に学校にいけどは言わないよ。苦しいときにはうちこ逃げてきてもいい。でも、ここはお前の本当の家じゃない。それはお前自身がいちばん良く分かつてるはずだ」

「そんなの……柚希だつて分かつてるもん。でも、学校に行つたら、また同じ事の繰り返しだもん。お父さんに転校したいって言つても、全然取り合つてくれないし、だから柚希は学校に行かないの……」
きつと柚希はいま自分の言葉に自分で傷ついている。身を切るような思いで自分がなぜ学校へ行かないかを告白している。それが悠斗と離子にはよく分かつた。だが、逃げているばかりでは解決しないのもまた事実だ。

「ゆずちゃん、よかつたら、うちの学校行つてみる?」

「ちょっと、離子、何を……」

「おにいちゃんはちょっと黙つてて。ね、ゆずちゃん。学校つてねそんなに悪いことばっかりあるところじゃないんだよ? わたしはおにいちゃんと出合えたし、他にも友達がいっぱい出来たし、樂しいことは自分でさがすところなの」

「しかしなあ。柚希は中学生だぞ? どうせつて学校に潜り込ませる気だよ」

「それにはわたしに秘策がありまーす」

「んー……なんか不安になるけど、とりあえず聞いてみようか」

「かほるちゃんに頼むんだよ」

「かほるちゃん……つて、樟葉先生か! なるほど、あの人なら事情を話せば話を通してくれるかもしけないな」

かほるちゃんこと樟葉かほる教諭は、仁正学園の中でもトップクラスの変わり種教師だった。変則的なことでも、事情次第では上に話を通してくれる。これを生徒たちは尊敬を込めて『かほるちゃん

「マジック」と呼んでいた。

「そうだな……離子、お前、かほるちゃんのクラスだったよな?」「うん。だから言いだしたんだよ。どう? 見なおした、おにいちやん?」「やん?」

「うむ。えらいぞー。なでなでしてあげよ!」「わーい!」「わーい!」

柚希は自分そっちのけでトントン拍子に話がまとまっていくのをただ呆然と見守っていたが、「学校かあ……」と呟くと、少しだけ顎を緩めていた。悠斗と離子はそれを見て、かつてこの企みは成功するだろうと確信していた。

「そうと決まれば、制服は離子の予備があるよな? 身長も似たようなもんだし、大丈夫だろ。あとは、かほるちゃんに連絡しないと…」

「ふふん、おにいちやん。実はわたしはかほるちゃんのケータイの番号知ってるんですよ」

「なに? 本当か! そりや話が早い。すぐに連絡だ!」

* * *

結果から言つと、かほるちゃんマジックの伝説は本当だった。

『不登校の中学生年に、学校の楽しさを教えた』といつも無理やりな理由ではあったが、無事校長の許可も下りて、三日間だけだが柚希は離子のクラスに編入することが出来たのだ。なんでも、『仁正学園のPRにもなりますよ~』という不純なものも、許可された理由の一つだそうだ。

そして初登校の日。離子は自分の部屋に柚希を引きずり込んで、制服を着せている。当然男の悠斗は廊下に待たされるわけで、待たされる立場としては退屈なことこの上ない。

「おまたせ、おにいちやん! ほら、ゆずちゃん、恥ずかしがつてないで前に出ないと!」「…」

「お、おにいちゃん……柚希、変じやない……？」

悠斗はぽかーんと口を開けて目の前の少女を見つめていた。いや、柚希なのは悠斗にも分かっている。だが、その魅力が仁正学園の制服のおかげで何割かアップしている。それだけの話なのだ。

「ふふつ。おにいちゃん、目を丸くしてるよ？ よかつたね、ゆずちゃん。おにいちゃんのハートを虜捕みだよ？」

「て、敵に塩を送るような真似をして、あとで後悔してもしらないう？ ひなたん」

「……化けるもんだなあ」

悠斗は本気で柚希に見とれていた。言葉がしばらく出ないほどだつたのだ。これは今日の一年C組はきっと大混乱に陥ることだろう。悠斗はそう確信していた。こんな美少女、それこそ一生に何度も見られるか分からないのだから。

「あーっ！ それ、すっごく失礼な言い方だよ、おにいちゃん！」

「いいもん。柚希は制服なしだと、どうせ魅力ないもん」

「そんなことないよ！ きっと今日学校行ったらみんなから大注目だよ！」

「そりかなか……ひなたんが言つなら信じることにするけど」

悠斗は腕時計で時間を確認すると、雛子と柚希に声をかけた。

「そろそろ行かないと遅刻だぞ。登校初日から遅刻はイヤだら？ さ、行こう！」

三人揃って靴を履けるほど玄関は広くないので、順番に革靴に足を入れる。雛子は通学鞄を持っていますが、柚希は手ぶらである。これはあくまでも学校見学ということで、授業を受けに行くわけではないからだ。

最後に悠斗が靴を履いて、玄関の扉を開けた。五月末の朝の爽やかな風が、三人の髪を撫でていく。いよいよ初めての、三人揃っての登校だ。柚希はしばらく下を向いて何事かを呟いていたが、やがて決意を固めたのか、顔をあげて歩き出した。その双眸には強い光が滲み、この三日間で何かをつかみ取ろうとする者の意志を感じら

れた。

「バス、使うか？」

「おにいちゃんはすぐサボりたがるからなあ。だめだよ、歩いて行かなきゃ」

「バスもあるの、ひなたん？」

「うん。駅前から学校直通のスクールバスが出てるよ。でも有料なの。それに、歩いても大して時間変わらないし」

「それじゃあ、歩かなきゃね！ おにいちゃんもひなたんを見つけないと」

女性陣からの突っ込みをまともに食らった悠斗は、口をつぐむしかなかつた。そういうえば、柚希はとても賢い子だつたと悠斗は想い出す。難解な算数の文章題を、そもそもパズルでも解くかのようにあっさりと解いてしまう姿には驚かされっぱなしだつた。

道はやがて住宅街の細い道から、路線バスの通る大通りに出る。道なりに進んでいくと、仁正学園の建つ丘が見えてくる。山一つが中高一貫校の巨大なキャンパスなのだ。バス道路から緩くて長い上り坂にさしかかると、道の両脇には桜の並木が続いている。

「ここにな、春になると一斉に花が開いて、そりやすげえ綺麗なんだぜ」

「へー……、これ、全部ソメイヨシノ？」

「多分そうだよ。ヤマザクラとかは見たことない。あ、でも学園の方にはヤマザクラの木があるよね、おにいちゃん」

「そういやそうだな。あれはあれで綺麗だ」

「あ、校門が見えてきたよ、ゆずちゃん」

「え？ あのおつきな門がそのなの！？」

柚希が驚くのも無理はない。とても背の高い柱に、クラシカルな作りの鉄の門扉が組み合わされた仁正学園の校門は、実際以上に大きく莊厳に見える。そして、中等部の生徒も高等部の生徒も、みなこの門をくぐって学校へ入つていいくのだ。

「さ、ゆずちゃん。第一歩だよ」

「柚希、さあ、勇気を出して！」

柚希は口を一文字に結んで目を固く閉じていたが、目を開き、顔をあげると、飛び越えるようにして校門をくぐっていた。悠斗と雛子が拍手で迎える。柚希は顔を赤くしてふくれてみせた。

「も、もつ。ただ校門をくぐつただけじゃない！ 拍手なんてしなくていいよー。おにいちゃんも、ひなたんもー！」

悠斗と雛子は一学年違う。当然、教室も別々になるわけで、雛子と柚希は旧校舎へ、悠斗は一年生の教室のある新校舎へと向かった。悠斗は内心気が気ではなかつた。果たして柚希は雛子のクラスで受け入れられるのか。陰湿ないじめにあつたりしないか。学校なんてどこも同じだなんて絶望したりしないだろうか。

だが、賽は投げられた。もうあとはなるよつにしかならない。この三日間で、柚希が何かに気付き、何かを手に入れられるかどうかは、他でもない本人次第なのだ。周りはそれを手伝うだけ。当然、悠斗もその一人であつて、この場では脇役にすぎないので。主役はあくまでも柚希なのである。

「とは言つてもなあ……、本当に大丈夫かな、柚希」

「お？ 悠斗、どうした。なんか心配事か？」

級友の北浜^{きたはま}一哉^{かずや}がまだ生徒の来ていない前の席を占領して声をかけてきた。銀縁眼鏡のこの男子生徒は、悠斗の親友を自負して憚らない。悠斗はふうっと溜息をつくと、一哉にことのあらましを聞かせた。

「なるほど……不登校か。難しい問題だな」

「そつなんだよ。もしこの三日間で『学校は嫌なところじゃない』と思ったとしても、もしかしたらもとの学校へ戻つたら今までの繰り返しかもしれないし……。ホント、頭が痛いよ」

「でもな、悠斗。本当に三日間この学園に通つて、学校のいい所を

見つけられたら、もしかしたらその子……えーと、柚希ちゃんだけか？ その子は自分で自分を変える」ことが出来るかも知れないぞ？」

「本当にやつ思うか？」「

「ちゃんと『見つけられたら』な」

「見つけるって、具体的には何を？」

「そうだな。陳腐なセリフだが、自分が何をしたいのか、何になりたいのか。要するに夢だな」

「お前、言ひてて恥ずかしくないか？」

「なんで？ 陳腐ではあるが、恥ずべきセリフだとは思わないぞ？」

「……お前はそう言ひやつだつたよな。しかし、夢かあ。小学校の頃に聞いた夢は……。ダメだ。これは言えない」

「なんだよ、勿体ぶるな。言えよ、ほら！」

「まあなんだ、女の子によくあるアレだよ。お嫁さんつてやつ」「なるほど、その相手がお前なんだな？」

「読心術かつ！？」

「ほんと、分かりやすいな、お前は。雛子ちゃんのことだつてそうだし、柚希ちゃんのことだつてそうだ。優しいのは確かに美德ではあるが、度が過ぎると相手にとつて残酷だぞ？」

悠斗はそんなことは分かつていると反論したかった。したかつたが出来なかつた。なぜなら、雛子を妹として大切に護ることを誓いながらも、心の奥底ではやはり女の子として愛してゐる自分に気づいてしまうからだ。

柚希だつてそうだ。三年間会わないうちに、あんなに綺麗になつてゐるとは思いもしなかつた。なにやら怪しげな技術を色々とマスターしているのが気になるところではあるが。

「今じろは一年C組は大騒ぎだらうなあ。柚希のヤツ、外見はホントアイドル顔負けだから」

「そんなに可愛いのか？」

「まあ、従兄の俺が言うのもなんだけどな。可愛いよ。可愛いって

「つまり、綺麗だな」

「中二にしてそれだけの美貌か。俺も是非お近づきになりたいもんだ

だ

「お前には絶対に紹介してやらん!」

一哉は悠斗の首に手を回して、ぐいぐいと引つ張つてくる。悠斗としては男とこんなに至近距離で触れあうのは「免被りたい」ところだが、まあ友人のことだと半ば諦めモードである。だがやつぱりやめて欲しい悠斗であった。何しろ息が苦しい。

「まあ、冗談は程々にして、その子の覚悟次第だな。かほるちゃんの伝を使つたんだろうけど、お前ら結構な無茶をしてるんだぞ?だから、絶対に無駄にさせんな。これはお前の親友としての忠告だ」
ちよしきその時、一哉が占領していた席の生徒がやつてきた。軽くあいさつを交わして席を譲る一哉。そろそろ予鈴がなる時間である。悠斗はやはり気が気ではなかつた。どんなに親友が「その子次第だ」と言つてくれても、やはり何か自分に出来ることがないかを探してしまつ。

結局、悠斗は柚希の『おにこちゃん』なのだと、嫌といつまでも自覚させられた朝だった。

第三章 義妹と従妹 1(後書き)

いかがでしたか? よろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第三章 義妹と従妹 2（前書き）

今日は一回の更新です。

第三章の2をお送りします。それではどうぞー。

そのころ、一年C組の教室では、どうにも居心地の悪そうな柚希が樟葉先生から皆に紹介されていた。樟葉かほる。通称『かほるちゃん』。ゆるくパーマのかかった髪以外は、どう見ても中学生か小学生高学年にしか見えない外見と、幼い服装センス。それが一年C組の担任にして、『かほるちゃんマジック』の使い手である。

「はーい。ちゅうもーく。今日から三日間、みんなのクラスメイトになります、露木柚希さんです！　はい、拍手～～」

その瞬間、割れんばかりの拍手と歓声が一年C組の教室に響き渡った。居心地悪そうにしていた柚希は、そのあまりの迫力に思わずびっくりと身体を硬くしてしまってぼじだつた。固かつた柚希の表情が、だんだんと解れていく。

「はい、露木さんがびっくりするぐらいのいい拍手でしたね～。続いて、露木さんに自己紹介をしていただきます。みなさん、ちゅうもーく

「え……、あ、あの……」

「大丈夫ですよ。正直に自分の事を話してください。みんな受け止めてくれますよ」

樟葉先生が柚希の耳元で小さく囁く。だが、柚希は不安だつた。自分の事を正直に話す。それがどれほど恐ろしい事か。いじめにあって、不登校になつた。それだけの話だが、話してしまえばもしかしたらみんなの自分を見る目が変わつてしまつかもしれない。それは、怖い。

一年C組の生徒全員が、柚希の言葉を待つてじっと見つめている。陰口を叩くものも、ひそひそ話をする者もいない。もしかしたら、これなら自分の話をしても受け入れもらえるのかもしれない。柚希は固く閉じていた瞳を開くと。きっと顔を上げた。

「あ、あのっ、露木柚希です。露木雛子さんとは、戸籍上では従姉

妹といつことになります。一年生の露木悠斗も柚希の従兄です。柚希は……中学校でいじめに遭つて……学校に行けなくなりました。正直、学校は怖いです。あの……こんな柚希ですが、皆さん、どうかよろしくお願ひしますっ！」

途切れ途切れにそこまでいようと、柚希は思いきり頭を下げた。自分の一番いいたくないことを言つてしまつた。これでもしかしたら、ここでもいじめの対象になつてしまふかも知れない。そう思つと自然に涙が滲んでくる。怖さで膝が震えてくる。

だが、柚希を待つていたのは、再びの大拍手だった。きょとんとした顔で教室中を見まわす柚希に向かつて、全ての生徒が大きな拍手を送つていた。その中には笑顔の離子もいた。隣では担任の樟葉先生も拍手をしている。

（ああ、柚希、ここにいてもいいのかも知れない……）

柚希は拍手の渦の中で、自分の表情がだんだんと笑顔になつていくを感じていた。自分はここで三日間を過ごす。その間に、もしかしたら大事な何かを見つけ出すことが出来るのかも知れない。そういう思ひと、柚希はたつた三日間の高校生活を、思いきり楽しもうと改めて思うのだった。

「はい、露木さんの自己紹介でした。このクラスには露木さんとおなじようなことで悩んだことがある人も多いかと思います。みなさん、露木さんが困ついたらなんでも手伝つてあげてくださいね」

『はい！』

「それじゃあ、露木さんは席に着いてください。空いてる席は、『ごめんなさい、教室の後しか空いてないの』

「大丈夫です。柚希、目はいいですから」

「じゃあ、そこで決まりですね。はい、ではみなさん！ しつかり勉学に励むように！ 朝のホームルームは以上で終わりです～」

クラス委員が号令をかける。

「起立！ 礼！ 着席！」

一旦着席したあと、何人かの生徒が早速柚希の席を取り囲む。

「露木さんって、雛子の従妹なんだって？」

「え、あ、……はい」

「そつか。困ったことがあつたらなんでも言つて！ 力になるから！ 私、南原智恵。なんばり ちえみんなはちいちゃんつて呼ぶわ。よろしくね！」

「しつかし可愛いよなあ。是非お近づきになりたい

「あー、なんかやらしー」

「露木さん、こんなヤツは放つておこしていいからね」

「ちょ！ それはないだろ！」

自分の周りで繰り広げられる会話に、柚希は驚きながらも大きな安心感を感じていた。こここの生徒は自分が行っていた中学校の生徒たちとは違う。なぜ違うのかはよく分からぬ。でも、言葉の端々に現れる気遣いや優しさは、中学のクラスメイトたちからは感じられない種類のものだつた。

「もう、ゆずちゃんがびつくりしてゐるでしょ？ みんなもつ少し気を遣つてあげて」

雛子が腰に手を当てて皆に注意する。集まつていたみんなも「そうだな」「ちょっと浮かれすぎた」と反省の言葉を口にする。でも、それで距離が開く感じはしない。柚希にとつてはとても不思議な光景だつた。

「ひなたん。柚希、困つてなんかないよ？ みんな……優しいし」「ゆずちゃんがそう言つならいいんだけど……、男子連中は確實にいやらしい目で見てるわね。気をつけてね、ゆずちゃん」

柚希は苦笑いを浮かべながら頷いてみせた。確かに自分の容姿だけを担当てに近づこうとしてくる生徒もいるかもしれない。でも、さつきの男子生徒からはそんな感じは受けなかつた。柚希には不思議でならなかつた。たつた一つ歳が違うだけで、こんなにも余裕が出来るものなのだろうか。

「とにかく、仁正学園一年C組によつていた。わたしたちはみんなゆずちゃんを歓迎するよー！」

* * *

柚希は学校見学という扱いだったので、授業はただ聞いているだけだった。だが、隣の席の生徒が教科書をみせてくれたので、いまこのクラスがどの辺りの勉強をしているのかは知る事が出来た。引き籠もつてゐる間も、柚希は自分で勉強を続けていたので、実は中学レベルの勉強はすっかり終わってしまつていて、今は自主的に高校レベルの勉強をしている。その柚希にとって、高校一年の初めのカリキュラムは、さほど難しいものではなかつた。

（でも、仁正学園つてやつぱり授業のレベルは高いなあ。毎年有名大学にたくさん合格者を出すだけはあるわ）

仁正学園は中高一貫の進学校である。高等部から受験で入つてくる生徒もそうだが、中等部からエスカレーターで上がつてくる生徒たちの学力も相当に高い。卒業生の進学先は有名国公立大学や私立が中心で、進学率はほぼ一〇〇パーセントだ。

今は英語の時間で、長文の読解をやつてている。普段からネットで英語のサイトを毎日のように読んでいる柚希にとって、高校レベルの英語を読むことは容易いことだつた。

「えーと、それじゃあ、この部分を和訳出来る者！ 誰かいないか？」

？

教師の声にぱらぱらと手が上がる。柚希は思い切つて手を上げた。
「お？ 君は確か……学校見学の中学生だよね？ この問題が分かるのかな？」

「はい！」

「頼もしいな。じゃあ、和訳してください」

「はいっ！」『彼は今やヤンキーの四番打者になりました。彼の次の夢は、彼が時折言つように、ワールドシリーズで毎年優勝することです。そして彼の最後のゴールは何でしょう？ 彼は野球で繋がつてゐる一つの国の間の大使として活動したいと言つています』で

す

「はい、正解。中学生なのによく読めたね。自分で勉強してるのでな？」

「はい……。あの、柚希は引き籠もってたから、自分で……」

「うん、学校に行けなくてもちゃんと勉強してるあたりは本当にえらいぞ。ほら、お前ら！ 一つ年下の中学生がこんな完璧な答えを出したんだ。お前らもしっかり勉強しないと、すぐ追い抜かれるぞ！」

教師の言葉に教室中が笑いに包まれる。こんなことも以前通つていた中学では有り得ない事だった。教師はただ淡淡と授業を進め、生徒はそれぞれ勝手なことをしている。おしゃべりに興じる者、別の教科の勉強をしている者、マンガを読んでいる者、コンビニで買つてきたお握りを食べるもの……。

だが、『正学園のこの雰囲気はビックだわ！』同じ『学校』とはとても思えない空気が、この教室を、この学園を支配している。柚希は心底驚いていた。これが本当に学校なのだろうか？ いや、もしかしたらこれが本当の学校とこいつものなのかもしれない。

和訳を終えて着席すると、隣の席の男子生徒が親指を立てて「よくやつた！」と合図してくれていた。柚希も同じようにそれに応える。

「さて、じゃあ次に進むぞ。次の段落を音読してもらつー。出席番号一四番はだれだー？」

「はーー！」

「じゃあ、次の段落までを音読。他の者も自分が読んだと思つて聴くよ！」

授業は滞りなく、しかし時にコーモアを交えて進んでいく。面白いように内容が頭に入つてくる。これが、本当の授業というものなのだろう。柚希はこれをしらない自分の本来のクラスメイトたちを氣の毒に思つっていた。もつとも、そんなことを言つたところでのクラスメイトたちが変わるとはとても思えなかつたのだが。

やがて、四時間目の終了のチャイムがスピーカーから鳴り響き、生徒たちは休みモードに入つていった。柚希の机の周りは相変わらず人だかりだ。それも男子ばかりではなく、女子生徒も同じくらいの割合で混じっていた。

「ね、露木さん。お昼はお弁当?」

南原智恵と名乗った、髪をポニーテールに結い、眼鏡をかけたそばかす顔の女子生徒が、柚希に尋ねる。

「い、いえ……、柚希、学食があるつて聞いていたので、そつちに行こうかと」

「そつかー。離子も学食だよね?」

「ん……。そうだよ。ちにちちゃん。ゆずちゃんも学食行いつか

「は、はい!」

「俺たちも一緒に行つていいかな?」

「ゆずちゃんに変なことしないつて約束するならね」

その時、教室の外から離子も柚希も良く知つた男の声が聞こえてきた。

「おーい、離子、柚希! 今から学食行くけど、一緒に行くか?」

「あ、おにいちゃん。ゆずちゃん、どうする?」

「うーん……。みんなのお誘いも嬉しいから……今日は皆さんと!」

「そつか。じゃあ、ちょっとおにいちゃんにそれでいいか聞いてくるね!」

離子は教室の後の扉の外に立つていていた悠斗に事情を説明した。柚希はそれをちょっと心配げにみている。やがて、悠斗が頷くのが柚希にもはつきりと見えた。離子がぱたぱたと小走りに戻つてくる。

「おにいちゃん、みんな一緒にOKだつて! よかったね、ゆずちゃん!」

* * *

結局、悠斗は一年生十数人をぞろぞろ連れて学食へ向かうことになってしまった。本当は露木家の面々だけで静かに昼食をとるつもりだったのに、である。だが、柚希のたつての希望だ。これを無下に断るわけには行かないだろ？ 悠斗は柚希がちょっとだけ変わりつつあるのを敏感に感じ取っていた。

学食は新館の一階にある。かなり広いが、全校生徒を収容するほどには広くはない。そこで、生徒の半分くらいは弁当を家から持ってきたり、通学途中でコンビニ弁当を買つたりして昼食を確保していた。

「しかし、この人数で行つて座れるもんかね」

「だいじょうぶだよ、おにいちゃん。生徒の半分はお弁当持参なんだから」

「離子は気楽でいいよなあ」

「あ、あのー。お兄さん？ 本当に私たちついて来ちゃつてよかつたんでしようか……」

一人の女子生徒が悠斗に申し訳なさそうに問いかける。

「構わないよ。それにこれは、柚希が望んだことなんだ。だったら叶えてやるのが筋つてものだろ？」

「は、はあ。お兄さん、結構こころ広いんですね」

「おい、悠斗。お前、こじろが広いなんて言われたの、生まれて初めてじやないか？」

一哉がニヤニヤ笑いながら混ぜつ返す。悠斗は仏頂面を作りながら、その自称親友の言葉を聞き流していた。やがて廊下の向こうに学食の入り口が見えてくる。どうやらさほど混雑はしていないようだつた。

「お、ラッキー。これなら楽に座れるな。とりあえず席を先に取ろうぜ」

一哉が手近に空いていた席に着く。一年生たちはそれぞれ持つてきていた荷物やハンカチなどを机や椅子に置いて席を確保していた。「じゃあ、順番に食券買いに行くか。俺はあとでいいよ。悠斗は離

子ちゃんと柚希ちゃんを案内してやれ」

「ああ、んじゃ、そうさせてもらつよ。柚希、JJJは食券制なんだ。食べたいメニューが決まつたら食券を買って、そのカウンターに出す。するとあら不思議！　あつといつ間に毎飯の登場、つてわけだ」

「おにいちゃん、それ全然不思議でもないし面白くないから。柚希だつて食券の買い方くらい知つてるもん」

「ふうつとふくれつ面を作つてみせる柚希に、悠斗は思わず苦笑いでしまつた。ふくれつ面をしていても、全然可愛さに影響がないのだ。むしろこれはこれで萌えるというものだつた。

「んで、女の子だつたらBランチあたりがお勧めかな。Aランチはちょっとボリュームがありすぎて多分もてあますと思ひ」

「ふんふん。二五〇円かあ。お財布にも優しいのね、学食つて」

「まあ、学校がかなりの部分持つてくれてるようなもんだからな。さて、俺はAランチつと」

悠斗は五〇〇円玉を券売機に放り込むと、Aランチのボタンを押した。軽い唸りをたてて、機会が食券を吐き出す。

「ゆずちゃんはBランチ？　それじゃあ、わたしもそつじようかな」

柚希も五百円玉を券売機に投入すると、Bランチと書かれたボタンに手を伸ばした。細い指先が透明なプラスチックのボタンを押し下げる。また券売機が小さなうなり声を上げて食券を吐き出した。

「同じもの食べるんだつたら同時に一枚買えれば良かつたのに」

「あ、そうだつた！　そんな機能もあつたんだよね。わたしすっかり忘れてたよ」

雛子はきつちり二五〇円を券売機に入れると、Bランチのボタンに指を伸ばした。だが

「あ、売り切れだあ」

「え……、柚希が最後だつたの？　……これ、ひなたんにあげる」

「いいよお。わたしは別の食べるからー。玉子丼も美味しいんだよ？」

「ほちつと」

雛子は玉子丼のボタンを押した。五〇円玉がおつりとして戻ってくる。柚希はそれを済まなさそうに見つめていた。そんな柚希に、悠斗が真面目ぶった言葉をかける。

「柚希、学食はな、戦場なんだ」

「え？ せ、戦場？」

「そう、戦場だ。先を争つて人気メニューを奪い合つ、血で血を洗う情け無用の戦場だ。だから、遠慮なんかしてたら飯が食えなくなる」

「そうだよ、ゆずちゃん。だから、遠慮なんかすることないの。自分がツイてたつてだけで、他の人に遠慮なんかいらんんだよ」

柚希は手の中の食券を見つめて小さく「学食は戦場」と呟いた。次の瞬間には、柚希の表情は晴れ晴れとしたものになり、右手に勝ち取った食券を掲げ、定食のカウンターの行列へと突進していくのだった。

いかがでしたか？ もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第三章 義妹と従妹

3 (前書き)

第三章の3をお送りします。
それではどうぞ!

午後の授業も終わりに近づき、そろそろ放課後のことを考えてソワソワする生徒が始める頃、柚希は校庭のトラック近くにおいてあるベンチに一人座っていた。本日最後の授業は体育。それも持久走だ。体操服までは用意していなかつた柚希は、それでも誰かに借りても走ると言い張つたが、体育教師の「今日はしつかり見学して行きなさい」という一言で渋々引き下がつた。

「ほらー、もつと元気出せー！ 気合いが足りないぞ気合いが！」

「うへえ、気合いだけで校庭何周も出来るかつての」

「柚希たん、見てるだけでちと羨ましいかも」

「バカ、あの子は一緒に走りたいんだよ。見ただろ、さっき先生に食つてかかつてたの」

確かにしょんぼりと座っている柚希は、一緒に走りたかつたというオーラを全身から発していた。

「こんなことなら体操服も借りておくんだつたなあ。でもひなたん、柚希より胸おつきいから……ううつ。多分胸元が寂しいことに……」

制服のブラウスも若干胸元に余裕がある。雛子の方はといふと、胸のボタンが千切れかねないほど元気いっぱいに育つている。なん

という残酷な現実。天は柚希に一物を与えたかったというわけだ。

「でも、この制服、よく見るといい作りしてるんだなあ。デザインも可愛いし。ブレザーだけど、ちょっと変わった形だし。こんな制服を着て、毎日学校に来られたら、柚希もかわれるかなあ」

「それは君次第だな。制服は所詮人間の外側を飾るだけのものにすぎない。問題なのは、それを着る事で内面まで変われるかどうかだ」

持久走の監視をしながら柚希の雑談に付き合つていた体育教師が、そのよく日に焼けた顔を柚希に向かって言つた。

「君は中学でいじめに遭つたと聞いている。でも、それは果たして相手ばかりが悪かったのかな？ たぶん、君には答えが分かってい

るだろうから敢えて言いはしない。でも、その辺りを考えただけで
も、君は自分自身を変えることが出来る。私はそう思つよ」

「ああ、この先生も自分と会つて一日しか経つてないのに、こんなに深いところまで自分を見抜いている。大人なんてみんな自分のことしか考えてない」とばかり思つていた。あの中学の先生たち、そして、自分がいじめられているのを見て見ぬふりした自分の両親……。「まあ、君があと二日で一体何を掴めるかは、私には正直分からない。でも、三日間の経験つていうのは、案外大きなものだと私は思うよ。おつと、そろそろ時間だな。おーい！ ラスト一周だ！ ダッシュ！」

「柚希もまだよく分からないんです。でも、なんか今日一日でボンヤリとだけど、その『掴まなきやいけないもの』が見えてきたような気がします」

ル・ル・ル・ル

息も絶え絶えだつた生徒たちが、疲れ切つた足にむち打つて再び加速しはじめる。柚希はそれを見て根性という言葉の意味を少しだけ別の意味で考えるようになつていた。

た
?

「うん。先生が話しある相手になつてくれてたし、大丈夫だつたよ」「先生だけずるいよなあ。柚希たんとあんなに馴れ馴れしくさあ」「そ、うだそ、うだ。職権乱用だぞ！」

男子生徒たちからブーイングが浴びせられると、体育教師はこめかみに血管を浮かせながら鬼の形相で言った。

かつてるからな！ 逃げたら……分かつてるだろうな？」

男子生徒たちが震え上がる。体育教官室への呼び出しこうのは、いつてみれば軍隊で新兵が鬼軍曹に呼び出されるようなものだ。だ

が、その男子生徒たちの様子をみて、柚希は思わず吹き出していた。

「あー、柚希たん笑ってる！ ホント怖いんだって、体育教官室つて！」

「さうだぞ、普通に職員室に呼ばれるのはわけが違うんだからー！」

「でも、せっかく柚希が退屈しないように気を配つてくださった先生にブーケイングしたのはみなさんでーす！ 頑張ってきてくださいねー！」

『そんなん……』

体育教師はニヤニヤと笑いながら生徒たちのやうとうを見ていたが、最後の一言を口にして授業を締めくくった。

「よし！ 今日の授業はこれで終わり！ すぐ教室に戻れー！」

＊＊＊

「柚希のヤツ、ちゃんとクラスに溶け込めてるかなあ」

頬杖をつきながら悠斗が呟く。耳ざとく聞きつけた一哉が、悠斗の肩に手を回し、何でも分かつてこりますよとこづけにしおうんと頷いてみせた。

「そうだよな。『おにいちゃん』としては放つておけないよなあ。わかる、わかるぞ、その気持ち。だから……」

「『俺に柚希を紹介しろ』ってのはナシな」

「なんで言いたいことが分かつたんだ？」

「そんなのは自分の胸に聞け」

肩に回していた手を解くと、一哉は少し真剣な口調になつて悠斗に問いかけた。

「悠斗は柚希ちゃんが信用できないのか？」

「できん！」

「なぜそんなにきつぱりとー！」

「説明は……ちょっと出来ない。家族の問題でな。ちょっとあいつは常軌を逸してる部分があるんだ。だから、信じたいけど信用はで

あんー！」

一哉は深く溜息をつくと、親友に向かって言った。

「それを柚希ちゃんが聞いたら、あの子泣くだ？」

「その前にこっちが泣きたいや……」

「ほんと、何があつたんだ？」

「まあ、そのうち話せるようになつたら話すさ」

一哉はまた前の席の生徒がいなことをいこ」とに席を占領し、

悠斗と顔をつきあわせ、真剣な面持ちで口を開いた。

「んで、だ。お前としては柚希ちゃんと雛子ちゃん。どっちを選ぶつもりなんだ？」

「な、なにを突然……」

「お前は今、自分を偽つてゐるよつに俺には見える。ふたりのよき『おにじちゃん』でなければならぬ、と。でも、本当にそれでいいのか？」

図星だつた。悠斗は雛子に惹かれると同時に、何だかんだ言いつつも柚希を放つてはおけないのだ。だが、それは果たして男と女の間にある感情なのだろうか？ 悠斗にはそれが分からなかつた。

「そんなこと……いきなり言われても……」

「あの二人はその答えをきつと待つてゐるだ？ いつまでも待たせてると、他の誰かにさらわれちまつぞ？」

「他のヤツに……？ まさかお前……」

一哉は両の手のひらを悠斗に向けて『違う違う』と合図した。表情からも一哉がそんなことを考えていなことは一目瞭然だ。

「俺はそんなつもりはない。もしもそんな気があるなら、俺はきっとお前に話をつけるさ。そうじゃなくて、雛子ちゃんは実は入学以来けつこうな人気者だし、柚希ちゃんはあの外見だ。一発で口里と惚れる奴がいても全く不思議じやない。もし、そつまつ奴らが『おにいさん、雛子さんをください』とか『柚希さんをください』とか言いだしたとき、お前は平氣でいられるのか？ つてことだ」「おれはあいつらの父さんか……」

「親じゃなくてもだ。お前、そういうこと今まで考えてなかつただ
る」

またも図星をつかれた悠斗は、髪をがしがしと搔きむしり、両手で自分の机を思いきり叩いた。その音は教室中に響き渡り、帰りのホームルームが始まるのを待っていた生徒たちも何事かと悠斗たちの方をいぶかしげにみつめる。

自分の行動がはからずも他の生徒たちの注目をひいてしまったことに気づいた悠斗は、じろりと周囲を見まわした。興味本位で悠斗たちを見ていた生徒たちは、首をすくめて目を逸らす。

自分たちからとりあえず周囲の目線が外れたことを確認した悠斗は、小声で一哉に囁いた。

「俺だつて、俺だつて雛子と堂々と彼氏彼女の間柄になりたかったさ。でもな、それより先に家族になつちまつたんだよ。柚希だつてそうさ。あいつとは血の繋がつた親戚だ。いつてみりや、あいつも俺の妹みたいなもんなんだ。あいつが俺に昔からなついてくれたのは嬉しかつたさ。でもな、家族にそう言う感情をもつちゃいけないのが世間の常識つてやつだろ？ それに俺は誓つたんだ。兄として雛子を何からも護り抜くつて」

悠斗の複雑な気持ちを少しば察したのか、一哉はそれ以上なにも言おうとはしなかつた。悠斗は自問していた。もし、雛子や柚希が誰かと付き合いたいと言つたとき、自分はそれを笑つて許せるだろうかと。

(そんなこと、出来るわけがないじゃないか)

相手が誰だらうと、そんなこと認められるわけがない。雛子も柚希も、悠斗にとつては特別な存在なのだ。でも、だからこそ、もしそうなつたときに自分の答えがきつちり出せるように、常に考えておかねばならない。

担任の教師が教室の前の扉からひょっこり顔を出す。よつやくホームルームの時間だ。悠斗にとっては一人で考え方の出来る数少ない時間のひとつだった。担任の話を上の空で聞き流しながら、悠斗

は自分がいったいどうすべきなのかを考え続けた。

* * *

ホームルームが終わった後も、柚希は一緒に下校しようとか、どこに遊びに行こうとか引っ張りだこだった。それを「ゆずちゃんはまっすぐ家に帰ります!」の一言で収めてしまつたのが離子である。ふわふわした印象に似合はず、なんとなく『従姉』としての自覚も芽生えつつあるようだ。

そして悠斗たちとの待ち合わせの場所である校門で、離子と柚希はもう三〇分も待っていた。

「おせいね、おにいちゃん。何があつたのかな

「ん……。携帯にもメール来てないし……。ゆずちゃんの方は?」

「柚希の方にも来てないよ

「まさか、体育教官室に呼ばれてるとか!」

「うー……、そんなに怖いの? 体育教官室って

「男子の話によるとそういうことになつてるね

その時、離子も柚希も聞き覚えのある声が背後から投げかけられた。

「あれ、離子ちゃん、それに柚希ちゃんも。どうしたの? こんな所で

「あ、北浜さん……。おにいちゃんと待ち合わせなんですけど、まだ来なくて……」

「……」

一哉は黙つたまま深刻そうな顔をしてくる。もしや、悠斗になにかあつたのでは? 畦子と柚希のところに暗雲が立ちこめる。

「悠斗のヤツ、他のクラスのちょっとタチの悪い生徒に呼び出されてたんだ。そんなに険悪な雰囲気じゃないから放つておいたんだけど……。もしかしたらこりやヤバイかもしれないな」

「ヤバイって……おにいちゃんが? どうことですか、北浜さ

んー。」

一哉は話すのをしばらくためらつたあと、ホームルームの前に悠斗とした会話の内容を一人に伝えた。

「もしかしたら、その時が来たのかもしれないな」

「その時つて……、おにいちゃんが柚希たちを誰かに渡すかどうか決める時つて事ですか！？」

「そうだ。一人とも、よく聞いてくれ。悠斗は君たち一人を特別な相手だと思っている。でも、それ以前に家族として大事に思つてるんだ。いわば、この一つの感情の板挟みになつてゐる。その悠斗が、いまだ分その自分の心と戦つてゐるんだ。どんな結果が待つていたとしても、悠斗を責めないでやつてくれ。これは、あいつの親友としての俺からの頼みだ」

そう言つと、一哉は一人に深く頭を垂れた。上級生に突然そんなことをされた一人は、慌てて顔を上げるように言つ。だが、一哉は頭を下げたまま動こうとしない。

「北浜さん、わかりました。わかりましたから頭を上げてください」離子が静かな声で一哉にささやきかける。それはまるで、年齢差が逆転したような光景だった。離子は続けた。

「おにいちゃんがわたしたちを選ぶかどうかは、それはおにいちゃんが決めることです。それに、家族として大事にされてるつていうだけでも、わたしはどうとも幸せなんです。たぶん、ゆずちゃんもそうだよね？」

突然話を振られた柚希は一人の顔を交互に見ると、口をきゅっと閉じて「クリと頷いた。

「柚希はおにいちゃんが大好きだけど、でも、おにいちゃんを束縛する権利は柚希たちにはないよね。この前のことによく分かつた」

「ゆずちゃんは、ちょっと道を間違つちやつたけど、それは単におにいちゃんが大好きだから、だよね？」

「うん……。柚希はね、やっぱりおにいちゃんが大好き。でも、家族として大事してくれてるおにいちゃんのことも大好きなの」

「じゃあ、ゆずちゃんとわたしは同じだね。北浜さん。わたしたち、ちょっとおにいちゃんを探してきます」

「探すつて……この広い学園を一人で？」

「ええ。あ、一緒に来るつていうのはダメです。これは露木家の問題ですから」

先に釘を刺された一哉は、ただただ肩をすくめるしかなかつた。
「分かつたよ。家族の問題に首を突っ込むなつて言われりや、そりや引つ込むしかないよな」

「ご理解感謝します。さ、行こう、ゆずちゃん」

「う、うん。じゃあ、ごめんなさい、き、北浜さん……」

先を歩く雛子に、柚希は小走りに駆け寄つた。あんな風に啖呵を切つて本当に大丈夫なのかと言いたげに、柚希は雛子を見つめる。

「わたしね、おにいちゃんのいる場所、だいたい見当がついてるんだ」

「え？ そうなの？ どうして、ひなたん！？」

「こういう時にはね、人目につかないところでお話をするものでしょ？ わたしとおにいちゃんが初めてちゃんと話をした場所。多分、あそこにおにいちゃんはいるはず」

「どうして分かるの？ 人目につかないところだつたら、こんなに広い学園なんだもん、他にもあるでしょ？」

「大事な話をするところ、だからかな……」

そう呟くと、雛子はふと自分の唇に指を軽く当てた。それが何を意味するのか、柚希にも何となく察せられるのだった。

「こんな裏の方にはいつていいくの？ ひなたん、本当に人目につかないよ？」

「うん。だから大事な話にはもつてこいでしょ？」

体育館の脇の狭い通路を歩いて行くと、男の叫び声と、繰り返し何かをぶつけるような音が雛子たちの耳に入ってきた。この先で何かが行われている。自然に早くなる歩み。あと少し、あと少しだ。あの角を曲がれば

「クソッ！ こんだけ殴らせてもらつたら少しほは氣が晴れた！ 分かつたよ、お前の従妹のことほは諦める！ まったく、なんてヤツだ……。あつ」

角を曲がる寸前、その角の向こうから髪を金色に染めた男子生徒が飛びだしてきた。危うく雛子と正面衝突するところだ。男子生徒はばつの悪そうな表情をみせると、そのまま雛子たちがいまきた道を逆方向へすんずん歩いて行ってしまった。

「ふん、この程度耐えきれないでなにが『おにいちゃん』……だ……」

『おにいちゃん！』

雛子と柚希は同時に駆けだしていた。体育館の壁に力なく寄りかかる悠斗。その顔は殴られて腫れ上がっていた。顔だけではない。おそらくは制服の下も同様だろ？

「おにいちゃん、何でこんな……？」

「ん……雛子か。ごめんな、ちょっと遅刻しちまつたな」

「そんなことはいいから！ ゆずちゃん、おにいちゃんを保健室に運ぶの手伝つて！」

「柚希、悪い虫はおにいちゃんがきつかり払いのけておいたからな。明日も安心して学校にくるんだぞ」

「わかった、わかったから喋らないで。柚希のせいでの、おにいちゃんが、おにいちゃんが……」

「それは違うぞ、柚希。これは俺が選んだことだ。思いきり殴らせてやるから柚希を諦めろって言つてやつたら、本当に殴られた。だから倒れてやるわけにはいかなかつたんだ。おれは柚希のおにいちゃんだからな。家族は全力で護るもんだ」

両脇を雛子と柚希に抱えられながら、一週間前に雛子と最初の誓いをした大事な場所を歩みだる。悠斗はこの大事な場所で、こんどは家族を護るという誓いを果たしたのだった。

いかがでしたか？ もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第三章の4をお送りします。
それではどうぞ！

あつという間の三日間が過ぎた。あの体育館裏での事件のあと、保健室に運び込まれた悠斗は、単なる打ち身だと言われて湿布をべたべた貼られて家に帰されて、お咎めも何もなかつた。それも悠斗が「これは家族の問題ですから。学校には一切迷惑をかけません」と強引に言い張つたからだ。保健の先生も最後には折れて「先生方には内緒にしつくから」ということで一件落着である。

柚希はといえば、英語以外にも数学や国語などの教科も高校レベルの授業について行けることが発覚して、「いつそこのまま本当に編入しちゃえば?」などと冗談交じりに言っていた。柚希は勉強が嫌いで学校に行けなくなつたのではない。ただ、陰湿ないじめに耐えきれなかつただけなのだ。

そして、その陰湿ないじめに対抗する力を、この三日間でつかみ取れたかもしね。柚希はそう思つていた。それは一年C組の生徒たちの優しさと、それを指導している先生たち、特に担任の樟葉先生のおかげだと。

三日目のホームルームが終わつたあと、教室をあとにしようとする樟葉先生を捕まえて、柚希はこう宣言した。

「柚希、樟葉先生みたいな先生になりたいです！　いきなりそんな風になれるなんて思つてないけど、いつか必ず！」

唐突な柚希の宣言に樟葉先生はいつも糸みみたいに細い目を、どんぐりみみたいに丸くして驚いていた。だが、すぐにいつもの柔軟な笑顔に戻ると、柚希に向かつて先生として最後になるかもしれない言葉をくれた。

「ありがとうございます、露木さん。私みたいに、つていうのはあまりお勧めできませんけど、先生になるつていう目標が出来たなら、それに向かつて何をしなきやならないかは決まつてきますね。まずは学校へ戻ること。そして、いじめなんか跳ね返すくらいに強くなるこ

と。そして、もしよかつたら来年この学園にいらっしゃい。みんな
きっと歓迎してくれます」

「はい……。柚希も同じ事考えてました。来年必ず、柚希は仁正学

園の生徒になります！」

「よろしい。それじゃあ、気をつけて帰つてね。来年会えることを
待つてます」

「樟葉先生……ありがとうございました！」

深々と頭を下げた柚希の肩に軽く触れたあと、樟葉先生はきびす
を返し、廊下を職員室の方へと歩いていった。足音が少しずつ小さ
くなり、やがてそれは他の生徒たちの足音と紛れて聞こえなくなる
てしまつ。足音が聞こえなくなるまで、柚希は頭を下げ続けていた。
この三日間の感謝を込めて、深く。

「（）挨拶はすんだ、ゆずちゃん？」

「ひなたん……、見てたの？」

「うん。悪いかなとは思つたけど、声かけられなくて

「別に構わないよ。見られて恥ずかしいものじゃないもん」

「ゆずちゃん、見つけたんだね、大切なこと」

「うん。柚希ね、絶対に樟葉先生みたいな先生になるの。そして、
いつかこの仁正学園で教えるんだ」

「もしかしたら、樟葉先生の同僚になれるかもしれないね」

「そうね。柚希が先生になるまで、やめないでいて欲しいな」

樟葉先生が姿を消した廊下を見つめ続けながら、柚希は呟いた。
そして祈るのだった。結婚しても、仕事は辞めないで、仁正学園に
いてくださいと。自分勝手な願い事だと言つことは柚希も重々承知
だ。

だが、今の柚希を支えているのはその願い。もちろん、教師として仁正学園に来られる保証もなければ、それまで樟葉先生が現役で教師をしている保証もない。でも、その未来を想像するだけで、柚希は心躍るのだった。

「さ、ゆずちゃん。おにいちゃんが待つてるよ。校門にいこう!」

「うん！　いこう、ひなたん！」

いつの間にかすっかり従姉妹らしくなった二人の姿がそこにあつた。もちろん、内心では「おにちゃんは譲らない」と一人とも思つていていたが、それとこれとはまた別のお話だ。

昇降口で上履きから革靴に履き替える。柚希は上履きを持つて手提げ袋にしまった。もう今年、この学園に生徒として来ることはない。だから、上履きももう必要ない。

自分の下駄箱についていた「露木（柚）」の名札を外す。その瞬間に、柚希はもうこの学園とはお別れなのだとということを今更ながら実感した。涙が止めどもなくあふれ出でてくる。こらえても、こらえても。

「ゆずちゃん、はい、ハンカチ」

「ぐすっ、ひなたん……ありがと……」

でも、お別れなのはきっと一年間もない。自分は必ず生徒としてこの学園に戻つてくる。きっと、中学の先生たちは不登校だったことを理由に「そんなレベルの高い学校は無理だ」と言うに違いない。だが、自分はかならずこの学園に戻つてくるんだ。だから、いまはしばしのお別れ。三日間のクラスメイトたちにも、しばしのお別れ。一年後には、必ず後輩として再会するのだから。

* * *

今日の夕食の当番は離子だった。離子が当番の時は、決まって柚希も手伝うことになつていてる。あの『死のチャーハン』事件以来、柚希は一人で料理をさせてもらえないのだ。まあ当然といえば当然かもしれない。また同じ事をされば、食べさせられる方としてはたまつたものではないのだから。

献立は「出来るまで内緒」とのことで、悠斗は教えてもらえたかった。だが、何をしているのか、食材は何を使っているのか、匂いはどうかなど、色々な要素から献立の予想はつく。悠斗は今日の献

立を『鶏の唐揚げ』と予想していた。

しばらくすると、キッキンから油で何かを揚げる音が聞こえはじめた。

(予想通り。となると、どんな味かが気になるな)

露木家の本家は北海道にある。北海道にはザンギと呼ばれる独特の鶏の唐揚げがあり、各家庭ごとにそれぞれの味付けがあるので。さて、今回はどんな唐揚げになるのか。露木家式にザンギなのか、それとも旧姓櫻井家風の唐揚げなのか。

「ま、とりあえず気楽に待たせてもらつか！」

ソフナーにふんだり返り、テレビのニュース番組を見る。よく意味も分からぬが、総理大臣がのらりくらりと野党の追及をかわしてる姿が何度も映し出され、政権の支持率が右肩下がりで落ち続けているどがなり立てている。この国はアメリカとの戦争に負けてから、驚異的な経済成長をして世界第一位の経済大国になつたそつだが、今の体たらくではとても悠斗には信じられなかつた。

テレビにも飽きて別の番組に変えようとしたその瞬間、家の電話が鳴つた。こちらに電話をしてくるとなると、両親か、それとも親戚か、そのくらいしか悠斗には心当たりがない。番号通知に表示されている番号は見覚えのない数字が並んでいた。間違い電話だろうかと、一瞬取るのをためらう。その一瞬のうちに、電話が自動的に留守電モードに切り替わつた。

「もしもししつ！ 悠斗君！ 柚希！ いないのつ！？」

それは紛れもなく叔母の声だつた。慌て方が尋常ではない。悠斗は慌てて受話器を取つた。

「おばさん、俺です。悠斗です。どうしたんですか？」

「あの人？ もしかして、叔父さん！？」

「あの人？ もしかして、叔父さん！？」

「そう、あの人？ さつき急に倒れて……。今病院の電話を借りて電話してるの。携帯も持つてでなかつたから。柚希はいるの？」

「今、飯の支度してます。呼びますか？」

「ううう……お、おねがいっ」

「柚希！ 大変だ！ 叔父さんが倒れた！」

柚希はその悠斗の言葉に一瞬身体を硬くしたが、無視するよう料理を続けた。悠斗は受話器を電話機の横に置き、キッチンへと小走りに向かう。

「聞こえてるだろ、柚希！ お前の父さんが倒れたんだぞ！」

「…………」

「柚希！」

「…………しらない」

「知らないって、お前……」

悠斗には柚希の身体が心なしか震えているように見えた。だが、その背中からは絶対的な拒絶のオーラが立ち上っていた。

「あんなヤツ、さつさと居なくなっちゃえばいいのよ。柚希が一番助けて欲しかったときになにもしてくれなくて、そのくせ学校行かなくなつたら妙にちやほやして、学校に行かそっとして……。あんなヤツ、父親じゃない」

「柚希……」

悠斗は思いだしていた。柚希がなぜ不登校になつたのか。そして、不登校になる前に、父親に救いの手を差し伸べて欲しかつたということを。だが、父親は転校させてくれという柚希の願いを全く取り合わなかつたという。考えてみれば当たり前のことともいえるが、執拗ないじめに遭つている当人にしてみれば、父親は自分を護つてくれる最後の防波堤のようなものだつたのだろう。

だが、その父は自分を守つてはくれなかつた。その事実だけが柚希を今も苦しめている。しかし、このままでいいはずがない。悠斗は身を切る思いで決断した。

「柚希……」

肩を掴み、強引に自分の方を向かせる。涙に濡れた瞳が悠斗を射貫く。しかし決意は変わらない。悠斗は、右の手のひらで、柚希の頬を打つた。

パシンという乾いた音。打たれた頬を抑えて俯く柚希。もしかしたら何もかもが壊れてしまうかもしない危険な賭だった。

「柚希……、俺には本当の母さんの記憶がほとんどないのは知ってるよな？」両親が揃つてゐるつていうことは、それだけでもけっこつな幸せだと俺は思うんだ。出来れば俺だって本当の母さんに逢いたい。でも、それは叶わない。なぜなら……母さんはこの世の人じやないからだ

柚希の身体がびくつと震える。打たれた痛みからではない涙が、大きな瞳を潤させていく。

「なあ、柚希、もしかしたら、もしかしたらだぞ？　お前は一度とお前の父さんと話が出来なくなるかもしないんだ。お前は本当にそんなことを望んでいるのか？」

「……わけないじゃない」

「えっ？」

「そんなわけないじゃない！　お父さんはお父さんだよ！　でも柚希を助けてくれなかつたのも本当なの！　柚希だつてどうしていいか分からないんだよ！　おにこちゃん、柚希はどうしたらいいの！」

？」

しがみついてくる柚希を咎めることなく、悠斗は受け止めた。長い黒髪をゆつくつと優しく撫でる。自分の胸で泣く柚希に悠斗は静かに囁きかけた。

「俺は、俺と同じ寂しさをお前に味わつて欲しくないんだ。だから、まずは電話に出る。それからのことはあとで考えよう」

柚希はコクリと頷くと、悠斗の胸を離れてふらふらとした足取りで電話機の方へと歩いていった。電話機の横に置きっぱなしになつていた受話器を取る。きっと会話は筒抜けだつたに違ひない。柚希は震える声で母に呼びかけた。

「もしもし……おかあさん。うん、柚希だよ……」

柚希の父は脳内出血を起こしたが、一命を取り留めた。搬送が速かつたことと、専門医が偶然夜勤の担当だつたために命拾いしたのだ。ただし、しばらくは容態が急変する可能性もあり、医者としても「保証は出来ない」というのが精一杯らしい。

人の命なんものは、いつどこで失われるかわからない。昨日まで元気だった人が今日になつて突然いなくなる。そんなことも珍しくはない。

柚希は電話口で母親をなだめ、慰め、自分も家に帰ると言つた。あれほどまでに嫌悪していたはずの父の危篤。やはり心の中では納得のいかない部分も多いのだろう。電話を終えてからの柚希は、夕食の間も押し黙つたままだつた。

いつものように順番に風呂に入り、それぞれの部屋に戻る。悠斗も宿題を片付ける為に机に向かっていた。ようやく半分片付いたあたりで、扉が控えめにノックされる音が悠斗の耳に届いた。

「どうぞ」

「おにいちゃん、邪魔だったかな……」

「いや、ちょうど休憩しようとしてたところだから。ま、座れ。それで、用は何だ、柚希？」

「うん……あのね、柚希ね、明日の朝の電車で家に帰りたいと思つ」

「そうか」

「それだけ？」

「今は仕方ないだろうからな。とにかく、早く帰つてお母さんを安心させてやれ」

「うん……」

沈黙が一人の間に落ちる。次に何を言つていののか、それが互いに分からぬ。下手に言葉にしてしまつたら、取り返しのつかないことになつてしまふのではないかという恐怖。それを打ち破つたのは、柚希の方だった。

「ね、おにいちゃん。柚希ね、樟葉先生と約束したの。来年必ず、

生徒として仁正学園に戻つてきますつて。そして、樟葉先生みたいな先生になりますつて……。だから、もし仁正学園に受かつたら、その時はまた、『』のうちににおいてくれるかな

「当たり前だろ。柚希は俺の大事な従妹だ。露木家の一員なんだ。お前はいつにこに来てもいい。でも、本当の家は

「分かってる。柚希には本当に帰る家があるんだもん。だから、帰らないとね」

柚希は目に涙を浮かべながらもとても綺麗な笑みを浮かべていた。

翌朝早く、悠斗は目覚まし時計の音で目覚めた。何でこんなに早い時間に時計が鳴るのか。ボンヤリとした意識の中で悠斗は自問自答する。

「そうだ。柚希を見送りに行かなきゃいけないんだった」

それを想い出ると、急に脳みそが覚醒する。一階の洗面所で顔を洗い、歯を磨き、浴室に戻り手早く制服に着替える。柚希の乗る電車は始発電車だ。肝心の柚希はどうしているのかと部屋の扉をノックする。だが返事がない。悠斗は一声かけてから開き戸を少し開いた。すでに布団は上げられ、柚希の私物をまとめた軍用の『ひとつじヨルダーバッグが部屋の真ん中に鎮座している。

「もう起きてるのか。うつり、ヒトイレ！」

一階にも洗面所があるなら、一階にもトイレを作つておけばいいものを、と悠斗は心中で呟く。トイレは浴室の隣にある。まずはスッキリして、それから柚希を探そう。悠斗はそう決めた。階段を急ぎ足で下り、脱衣場の扉をがらりと開く。トイレは目の前だ。だが、悠斗の目の前にあつたのは、一絲まとわぬ柚希の白い肢体だった。

「…………」

気まずい沈黙が一人を支配する。だんだんと紅潮していく柚希の

顔。これはまずいと悠斗が逃げ出す前に、絹を裂くような柚希の叫びが家中に響いた。

「ニヤあああああああああああああああああああああつーーー オハニシゲルの
変態ーーー。」

「いや、ちょっとまで、柚希、身体を隠せっ！ 俺はまだトイレに

すつ飛んできた替えのボディソープのボトルをもろに顔面で受け
て、悠斗は悶絶した。なにしろ体育館裏で殴られた傷もまだ癒えて
いないのである。その間も柚希の物理的な攻撃は続き、様々な物が
とんでくる。悠斗は顔面をかばいながら何とかトイレに逃げ込んだ。
「ゆずちゃん！ どうしたの！？」

「シャワー浴びようとした服を脱いでたら、おじこちゃんがこわだつ……」

なんとか柚希と雛子の誤解も解けて、トイレという牢獄から開放された悠斗を待つていたのは、時間との競争だった。

「そんな」と……言われたつて……見られた事には……かわりない

「ビーブでもいいナビ……せやくしないと……間に合わないよー！」
悠斗が後を振り向くと、ちょうど空車のタクシーが走ってくると
ころだつた。手をブンブンふつてタクシーを止める。

「はいよつー」

タクシーがタイヤを軋ませて走り出す。カーブもタイヤを鳴らしながら凄いスピードで駆け抜ける。フロントガラスの前の風景が横に流れる。まるでレースか何かのようだ。後席に収まつた三人は繰り返し襲いかかつてくるGで、左右に揺さぶられっぱなしだった。

「ほい、到着！ 間に合つたかい？」

「ははは……、よ、余裕で……」

料金を支払い、タクシーを降りると、運転手は右手をシコタつと
あげて挨拶すると、颯爽と走り去つていった。

「神風タクシーってのは昭和の伝説じやなかつたんだな……」

「わたし、トラウマになりそう……」

「つうつ、柚希は車酔いしかけたよお」

時計を見れば、始発電車がくるまでまだ一〇分ほどある。悠斗た
ちはとりあえず切符売り場で柚希が切符を買つてくるのをベンチで
待つていた。

「ね、おにいちゃん

「ん？ なんだ？」

「ゆずちゃんの裸、見たんでしょ？ ビラだつた？」

「ななな、何を言い出すんだお前は！」

「わたしのと比べて……どうだつた？」

「そんなの……比べられないよ」

離子はがつかりしたと全身で表現しつつ、大きくため息をついた。
「カツコイイおにいちゃんばつかり最近みてたからかなあ。こんな
へタれのおにいちゃんはわたしイヤだよ」

そこに緑の窓口で切符を買つてきた柚希が口を挟んだ。

「へタレなのもおにいちゃんだから、柚希は大好きだよ」

「お前ね、大体お前があんな時間にシャワーなんて浴びよつとして
なければだな」

「あ、おにいちゃん、あれなんだらう~？」

柚希は不意に斜め下を指さした。つられて少し膝を曲げて下を向
いた悠斗の脣に、柚希の花びらのような湿つた脣が重ねられた。

「ちゅ、ゆずちゃん……」

「柚希……」

「えへへへ。今回の件はこれで勘弁してあげるよ、おにいちゃん

！」

柚希はぐるりときびすを返すと改札へ向かう。改札を通して、一度振り向き、大きく手を振ると、柚希はそのままホームへの階段を下りていった。

「台風は去ったか……」

「おにいちゃん、わたし、さつきの答えまだ聞いてないよ

「だから、俺になんて言わせたいんだお前は！」

いかがでしたか？ もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

幕間劇その2です。
それではじめましょう！

（前編）

幕間劇の2　おにいちゃんとわたし

おにいちゃんを初めて見たのは、あれはもう一月以上前のことでした。

掃除当番で校舎裏にあるゴミ捨て場にゴミを持っていった帰り、ちょっと近道をしようと体育館裏を通りつとったときのことです。ひとりの男子生徒が、地面にしゃがみこんでいました。その男子生徒の視線の先には、ちっちゃくて丸っこい仔猫が何かの空き缶に入れられたミルクをピチャピチャと舐めている姿がありました。

「よっぽど腹が減つてたんだな。いいか、もつと表の方へ出て行けよ？」そしたらうの生徒だつたらなにか餌をくれるかもしれないからな」

その優しい笑顔に、わたしの胸は高鳴りっぱなしでした。

それがおにいちゃん　露木悠斗　を初めてみたときです。それ以来、わたしはおにいちゃんをずっと追いかけていました。校庭で行われている体育の授業や、用事で向かつた新校舎の廊下、それに、下校時の校門……。

でも、なかなかタイミングが合わなくて、おにいちゃんを見つけることは簡単ではありませんでした。それでも、おにいちゃんのクラスと名前は知る事が出来ました。友達のちいちゃん　南原智恵ちゃん　が調べてくれたからです。こつそり写真も撮つてもらいました。それは今でもわたしの手帳の内側に入れています。

きっと、このままずつと見ていくだけなんだろうなって、そう思つてました。だって、学年もちがうし、部活とかでの接点もないし、わたしみたいな地味な子にはきっとおにいちゃんも興味ないだろうし。だから、それは仕方ないんだつて自分に言い聞かせてました。

そんなある日の朝、学校へ行つてみると、わたしの下駄箱の中に一通の手紙が入つていました。中身はとても不器用な文体で、『大

事な話があるから、放課後体育館の裏まで来てほしい』と書いてありました。

差出人の名前はありませんでした。わたしはもし誰かからお付き合いを申し込まれても、断るつもりで体育館の裏へ向かいました。体育館裏への狭い通路を歩きながら、これがもしもおにいちゃんからの手紙だつたらどんなにいいだろうと思つていました。そんな都合のいいことなんか起こるはずがないじゃないかと、自分で自分を笑いながら。

でも、どうやら神様はいたようです。体育館の角を曲がったところで待つていた男子生徒は……おにいちゃんでした。

おにいちゃんが一ヶ月半も前からわたしのこと好きでいてくれたと聞いて、わたしは思わず涙が出そうになりました。だって、絶対にわたしの一方的な片思いだとばかりおもつてたから。だから、おにいちゃんがわたしがいいと言つてくれたときは、本当に天にも昇る気持ちでした。

初めてのキスは、軽く触れるだけでした。わたしだけじゃなくて、おにいちゃんの唇も震えているのが分かりました。でも、わたしのファーストキスをおにいちゃんに捧げられて、わたしはひとつも幸せです。

だって、初めてのキスは大切な人についてずっと決めてたから。おにいちゃんは誓つてくれました。ずっとわたしと一緒にいるつ。

でも、いいことばかりが続くとは限りません。

前から聞いていたお母さんの再婚相手が、まさかおにいちゃんのお父さんだったなんて。

日曜日の森林公园で、おにいちゃんは「こんな結婚絶対認めないと息巻いていました。わたしはそれも無理ないことだと思っていました。だって、わたしとおにいちゃんはつい一日前に恋人になつたばかりだったんですから。

でも、わたしはいつもも考えていました。おにいちゃんと家族になれば、おにいちゃんと本当にずっと一緒にいたられるつて。だから、わたしはお父さんとお母さんの再婚に反対しませんでした。

おにいちゃんはわたしを「裏切り者」と呼びました。その言葉は、わたしの心臓をぎゅうっと驚愕みにしました。一番大好きなおにいちゃんに、そんなことを言われるなんて……。

家の前で雨に打たれながら、わたしは泣きました。顔もぐつしょりだつたから、涙と雨と区別がつかないのがせめてもの救いだと思いました。

でも、おにいちゃんはわたしが雨に打たれているのを放つては置きませんでした。土砂降りの雨だつたからずぶ濡れになつちゃつたけど、おにいちゃんはすぐ家に上げてくれて、お風呂場に案内してくれました。暖かいシャワーを浴びながら、わたしはまた少し泣きました。

その後のことば……ちょっと想い出したくありません。だつて……、いきなりでびっくりしたからって、おにいちゃんに物を投げつけるなんて。それは、裸を見られたのはショックだつたけど、おにいちゃんになら見られてもいいかなつて後になつて思つたくらいですから。

一回目のキスはその日の晩でした。もうお父さんとお母さんは籍を入れていて、戸籍上はわたしとおにいちゃんは『兄妹』だったのに、わたしからキスしちゃいました。おにいちゃんはポカーンとしたり、おやすみのキスつてことで許されますよね？

一週間後、お父さんとお母さんがアメリカに旅立つ前に、ホテルのチャペルで結婚式を挙げました。お母さんの幸せそうな顔を見ていたら、自然に涙がこぼれました。お母さん、おめでとう。こんどこそ幸せになつてね。

その日の晩はお母さんとホテルで同じ部屋に泊まりました。ツイ

ンのお部屋だつたけど、わたしは「最後だから」って言つてお母さんと回りベッドで眠りました。眠るまでの間、たくさんたくさんお話をしました。どんなお話をしたのかは内緒です。でも、おかあさんはわたしどおりにゆずちゃんのことを応援してくれると言つてくれました。

翌日夕方、お父さんとお母さんはアメリカへと飛び立つて行きました。空港の送迎デッキで飛行機を見送つているとき、おにいちゃんが不意打ちでキスしてきました。ちょっとびっくりしたけど、とっても嬉しかった。ああ、わたしは愛されてるんだって、そう思いました。

やしておにいちゃんと一人きりの暮らしが始まつたと思った途端、あの子……ゆずちゃんがやつてきたのです。つちの中はメチャクチヤになりました。わたしもゆずちゃんの計略でちょっと危ない目に遭いました。その時はおにいちゃんが助けてくれたんですけどね。ありがとうございます、おにいちゃん。カッコ良かつたよ！

そのあと、自分を陥れようとしてたゆずちゃんを助けるのはひとつと抵抗があつたけど、でもやつぱりおにいちゃんの従妹といつことは、わたしの従妹にもなるわけで、おにいちゃんと協力してゆずちゃんを悪い人たちから助け出すことができました。その時以来、ちょつとゆずちゃんとの距離が近づいたかな、とわたしは思っています。

ゆずちゃんが学校を嫌悪の対象としてしか見ていないのを見て、わたしは仁正学園の生徒として何日か通学してみることを提案しました。幸い、うちのクラスの担任のかほるちゃん 樟葉先生の愛称なんですが は、なんだか不思議な先生で、無理なんじやないかと思うことでもあります。

かほるちゃんの携帯に電話して、その日のうちに校長先生のOKがでたのにはわたしもびっくりしました。もしかして、かほるちゃん

んつて校長先生の弱みが何かを握つてゐるんだじゃ……なんてことも考えましたけど……まさか、ね。ともあれ、ゆずちゃんは学校から正式に三日間の通学、といつた見学を許可されたのでした。

初登校の日、わたしの予備の制服を着たゆずちゃんを見て、おにいちゃんはぽかーんとした顔をしてました。あれはきっとあんまりゆずちゃんが綺麗だから、みとれてたんだと思います。ちょっと悔しいかな。でもゆずちゃんって、ほんとお人形さんみたいに綺麗な体つきしてたなあ。おにいちゃんはゆずちゃんの裸も見たはずだけど、わたしどうべでどうちがいいと思つてるんだろう……。

「正学園での三日間は、ゆずちゃんにとつて実りの多いものになつたようです。最終日のホームルームのあと、かほるちゃんを廊下でつかまえて、「柚希、樟葉先生みたいな先生になりたいです」つて宣言しちゃうくらいですから。たぶん、ゆずちゃんはもう大丈夫。中学にもどつても、いじめなんて気にせず田標へ向かつて走り続けられるはずです。

その日の晩でした。叔母さんからゆずちゃんのお父さんが倒れたとの知らせがはいつたのは、脳内出血といつ病氣のことはよく分かりませんが、場合によつては命に関わる病氣だと言つてくらいは分かります。

それでもゆずちゃんは「あんなヤツ、父親じゃない」なんて言つてます。わたしはおとうさんがいません。あ、本当のおとうさん、つていう意味ですよ？だから、本当のお父さんが生きているゆずちゃんが羨ましかったんですね。

それなのに、ゆずちゃんはその本当のお父さんが死ぬかもしれないという時にも、突き放した態度をとる。わたしには許せませんでした。でも、ゆずちゃんに手を上げたのはおにいちゃんでした。

おにいちゃんは自分に本当の母親がない事、両親が揃つていることの幸せ、そしてゆずちゃんが今それを失いかけているという事実を言つて聞かせました。そしてやつと、ゆずちゃんは叔母さんか

らの電話に出たのです。

そのあと、夜になつてからですが、ゆずちゃんがわたしの部屋にきてくれました。明日の朝、始発で帰ろつと思つ。ゆずちゃんはそう言つていきました。そして、これからおにいちゃんにも同じ事を伝えるつもりだとも。

なぜゆずちゃんがおにいちゃんより先にわたしのところに来てくれたのかは分かりません。でも、その事実はほんの少しですがわたしのところを暖めてくれました。

翌朝早く、ちょっとした事件がありました。これについてもあまり想い出しありません。おにいちゃんの変態……。でも、やっぱ気になるな。ゆずちゃんみたいにわたしスレンダーじゃないし……。えーと、この話はここまでっ！ 深くは聞かないでくださいっ！ で、ゆずちゃんを送りに駅まで行つたんですが、その時に乗つたタクシーが……タクシーが……（ガクガクガクガク）。

はっ！ だ、大丈夫です！ ちょっと怖いことを思いだしただけです。途中からタクシーで駅に行つただけですから！ すー、はー、……。よし、大丈夫。で、駅に着いたわけです。

駅に着いてから、電車がくるまでは約一〇分ほどありました。それで……これもあまり思い出したくないんですけど、ゆずちゃんがおにいちゃんとキスを……。正直、とっても悔しかつたです！ でもその時に思つたんです。いくら血が繋がつていなければ、なんとも、わたしとおにいちゃんは『兄妹』なんだと。それに対して、血は繋がつても、従妹と従兄は結婚も許されます。わたしはもしかしたら、おにいちゃんと距離を置いた方がいいのかな、って思つたんです。

自分が傷つかない方法を選んでるだけなのかもしません。でも、おにいちゃんをおにいちゃんとして見るのは『ぐく当たり前のこと』なんだか何が正しいのか自分でも分からなくなつてきました。でも、おにいちゃんと距離をおくのも一つの手なのだということだけは

つきりしています。そして、誰か他の男の人とお付き合おうとする」とい
も。

それが本当にわたしの望むことかどうかは別ですけど……。

いかがでしたか？ よりこねねばいじ意見いじ感想などお聞かせください。

第四章 離子危機一髪 1(前書き)

第四章の1をお送りします。
それではじみぞ!

柚希がいた嵐のような数日間が過ぎ去り、露木家に再び平穏が戻ってきた。だが、柚希はとんでもない置き土産を残していったのだった。それは一通の手紙と、多数の電子機器だつた。その中には超高倍率のズームレンズをつけたビデオカメラやら、超高圧の護身用スタンガンやら、とてもじゃないが中三の女の子が持つようなものじゃない物が多数あつた。

『おにいちゃんへ。これはひなたんの部屋と、お風呂場に仕掛けてある隠しカメラの周波数と、その受信機です。柚希がいない間はひなたんをおかずにしていいからね。ちなみに着替えもバッヂリ見える場所にセットしてあります。有効活用してね（はーと）。柚希より』

「なにが『有効活用してね（はーと）』だ！」

手紙をビリビリと破こうとした、したのだが、なぜか手が動かない。空中でしばらく手紙を引っ張つたままでいた悠斗だったが、手紙を机の上で丁寧にたたみ直すと、それを大切そうに机の引き出しにしまい込んだ。

「ね、念のためだ。本当に仕掛けられているのか確かめなきゃなんからな。仕掛けられていたら即撤去だ、撤去」

妙に目が泳いでいるのはきっと気のせいなのだろう。悠斗は受信機と自分のノートパソコンを接続した。自動的に必要なソフトがインストールされ、準備が完了したと言う表示がされる。悠斗はまずCAM-1という映像を選択してクリックした。

「な……、こ、これはっ！」

そこには風呂の脱衣場が映し出されていた。そして、今までにブ

ラのホックを外そうとしている離子の姿も鮮明に

「……ハツ！ い、いかん！ 僕は何を考えているんだ！ こんなのは見ちゃいかん！」

その時、柚希を見送りに行つたときの離子の言葉が脳裏に蘇つてきた。

『ゆずちゃんの裸、見たんでしょう？　どうだった？　わたしとくらべて……どうだった？』

ブラのホックが外され、たわわに実つた果実がふるんどあふれ出す。それはスレンダーな離子とは全く違つた色香を放つていた。

「ああ……、離子……胸ではお前の圧勝だよ……つて！　何を言つてるんだ俺は！　こんな映像はこうだ！」

悠斗は画面の右上にある×ボタンをクリックして、画面のウインドウを閉じようとした。ところが間違つてその隣にある『最大化ボタン』を押してしまう。離子の見事なバストが画面いっぱいに表示され、悠斗は一発でノックアウトされてしまった。両の鼻の穴から大量の血を吹き出しつつ、それを手で押さえてティッシュの箱を引き寄せる。丸めたティッシュを鼻に詰める間も、悠斗の目は画面に釘付けだ。

やがて、離子はショーツもとり、扉を開けて浴室へと入つていった。慌てて悠斗はCAM2と書かれたウインドウをクリックする。画面が切り替わり、浴室を俯瞰する映像が現れた。瑞々しい離子の素肌が手に取るように見える。

「けけけ、けしからん！　大体これ無線だろ？　他の奴らに見られたらどうするんだ！」

悠斗は机にしまつた柚希からの手紙を取り出した。最後に『追伸』という文字のあと、短い文章が綴られている。それはこんな内容だった。

「他の人に見られる心配は無いから安心してね。最新のデジタル暗号化技術でスクランブルがかかつてゐるから。録画したいときはRECボタンをクリックしてね。なお、この手紙は自動的には消滅しないので、厳重に保管すること。幸運をいのる…」

「スペイ大作戦じゃないっての…」

画面の中では離子がシャワーを浴びていた。きめ細やかな肌が水

を弾き、玉のようになつて肌を伝つていぐ。「ぐりと唾を飲み込む悠斗。事故で裸を見てしまつた時は、こんなに凝視することは出来なかつた。その雛子の素肌が、映像とはいいま田の前にあるのだ。

「録画ボタンは……これか……。いや、これはあくまでテストだぞ？」下心なんてないんだ！」

苦しい言い訳を口にしながら、悠斗はRECと書かれたボタンをクリックする。赤い円のマークが画面下に出て、録画状態にあることを示す。ハードディスクがカリカリと音をたて、データを記録しているのが分かる。しばらく録画したところで、悠斗はSTOPボタンを押した。そしてPLAYボタンを押してみる。確かにそこにはいま録画した雛子の艶姿が映し出されていた。

「柚希のヤツ、なんて嬉しい……じゃない！なんていかがわしいものを使掛けて行きやがったんだ！こんなモノは撤去……」

そこまで言って、悠斗は口をつぐんだ。

「て、撤去はいつでも出来るよな！それにほら！風呂場で雛子が誰かに襲われないと限らない！ そう、これは監視カメラなんだ！ うん、きっとそうだ！だから撤去はしないことにしよう。そうしよう！」

悠斗が自分の煩惱に白旗を揚げた瞬間であった。柚希からの手紙には、他にも注意点がいくつか書かれていた。例えば、定期的にカメラの送信機と受信機のスクランブルの暗号を変更すること。これは他人に見られることを防ぐためだ。他には、浴室のカメラは外部電源式ではなく、赤外線センサーをつかつた電池式なので、定期的に電池の交換が必要なこと、などだった。至れり尽くせりだった。

「柚希、今度お前がきたら、おにいちゃんは思いつきりお仕置きてやるからな！ 覚悟しておけ！」

満面の笑みでさう言つ悠斗の言葉には、一片の説得力もなかつた。

* * *

そんなことになつてゐるとはこれっぽっちも思つていない雛子は、ゆつたりと湯に浸かつて一日の疲れを癒していった。柚希が帰つてからもう数日が経つ。最初はあんなに嫌な子だったのに。最後はあだ名で呼び合えるほどの仲になつていた。最後に悠斗の唇を奪つたのは許せないけど。

「でも、先におにいちゃんとキスしたのはわたしだもーん。ゆずちゃんには悪いけど、おにいちゃんは絶対に渡さないんだから…」

だが、雛子はこうも思つていた。自分は戸籍上は悠斗の妹だ。それに、両親が子供たちだけで日本に残ることを許してくれたのは、悠斗が「兄として自分を護る」と宣言してくれたからだ。そして現に悠斗は自分を家族としてとても大事にしてくれている。

「わたしも……いい妹でいなきやダメなんだろうなあ……」

雛子の目に涙が自然と溢れてくる。新しい父は優しいが厳格な人だ。世間体とか常識とかをとても大事にする。だとしたら、多分悠斗と結ばれることはきっと無理に違いない。自分は悠斗と一緒にいられたらそれでいいと思っていた。でも、それはちょっと違つたようだ。

（だつて、こんなにも胸が痛いんだもん……。おにいちゃんのことを考えると……。でも、おにいちゃんが耐えてくれたみたいに、わたくしもいい妹にならなきや！）

雛子は溢れそうになる涙を湯船のお湯で乱暴に洗い流して、浴槽から立ち上がる。カラソの前の椅子に座ると、少し曇つた鏡を手で拭つて、その鏡に向かつてにっこり微笑んでみせる。

（うん。わたしは大丈夫！　おにいちゃんに恥じない、いい妹になつてみせるんだから！）

その時、脱衣場の外から悠斗の声が聞こえてきた。

「雛子～！　あんまし長湯してるとのぼせるぞ～！　大丈夫か～？」

雛子の心臓がドキンと跳ね上がる。今まで考えていたことがあつという間に音をたてて崩れ去つていく。こんなタイミングで悠斗の声を聞いてしまつたら、決心が崩れてしまう。だが、雛子は無理や

り明るい声をだして応えた。

「うん！ 大丈夫だよ～！ もつすぐ上がるから。そしたら晩ご飯にしようね、おにいちゃん！」

雛子は愛用しているスポンジにボディソープをたっぷりと取り、何度もかにぎにぎして泡を立てた。そして左腕から洗い始める。小さい頃からの習慣だ。洗い始めてから、ふと雛子は自分が悠斗に投げかけた疑問を思いだしていた。

『ゆずちゃんの裸、みたんでしょ？』

『どうだつた？ わたしとくらべて……どうだつた？』

思いだした瞬間、雛子の顔は真っ赤になっていた。なんで自分はあんなことを聞いてしまったのだろう。あれではただ単に柚希に嫉妬するみつともない女ではないか。自分は悠斗の妹なのだ。あんなことはもう言つてはいけない。よき妹であるための努力をしなくては。そうでないと悠斗に申し訳なさ過ぎるではないか。

雛子は自分の身体を清めながら、再び決意を新たにしていた。

(わたしは、おにいちゃんの妹なんだから。家族なんだから)

だが、それは繰り返せば繰り返すほど、雛子の心の中に暗い渦のよみになつて沈殿していくのだった。

「ふう、堪能した……じゃない！ 雛子の安全は俺が護つたぞ！」
ついせつときノートパソコン片手に脱衣場へ降りていき、外から声をかけた悠斗は、再び自室に戻つていた。雛子が下着を着け终わり、服を着る様子を確認したあと、STOPボタンを押して録画を停止する。そしてノートパソコンをスリープ状態にして階下へ降りていった。

「あ、おにいちゃん。晩ご飯の支度は？」

「すまん！ 実はこれからだ」

「もう、今まで何してたの？ もしかして、インターネットでえつ

ちなサイトでも見てたんでしょ。」「

ギクウシと擬音が聞こえそうなほど悠斗は硬直した。当たり前と

も遠からず。なんで雛子はこうこうとこうで妙に鋭いのだろうか。

「あー、その反応。やつぱりそつなんだ。いけないんだよ？　ああ

いつページは一八歳以上じゃないと見ちゃダメです」

「ちひち、違うぞ？　俺はただ単にちょっと調べ物をしていただけでだな……」

「なんの調べ物？」

「うつ……、そ、それは秘密だ！」

「怪しいなあ。わたしにも言えない秘密なの？」

雛子が悠斗の腕にすがりついてくる。華奢な身体のくせに豊満な胸が、ぐいぐいと押しつけられ、悠斗の理性は崩壊寸前だ。

「ととと、とにかく！　すぐ晩飯の用意するから！　雛子はテレビでもみてゅっくりしてくれ！」

ひなこの腕を振りほどくと、悠斗はキッチンへ向かい、エプロンを着ける。雛子は少しふくれつ面をしていたが、ふうっと溜息をつくと、仕方がないなと言った風に悠斗に声をかけた。

「おにいちゃん、簡単なものでいいからね？　わたしもつお腹ペコペコなの」

「了解だ！　じゃあ、『ご飯があるからチャーハンだな。これなら曰をつぶつても作れる』

「おおっ！　炎の料理人の登場？」

「ああ、エエヒーターじゃ真似の出来ないチャーハンを作つてやるぜ！」

雛子は悠斗のチャーハンが美味しいのを良く知っていた。柚希の『死のチャーハン』事件の時に、悠斗は柚希の作った普通のチャーハンを柚希に与え、自分の分を手早く作つてしまつたのだ。一口だけ、といつて食べさせてもらつたそれは、自分や柚希の作るものとは段違いに美味しかつた。

「おにいちゃんのチャーハンか。楽しみ楽しみ」

「おひー！ 楽しみにしててくれ！ さて、調味料はよし、食材もよし、『』飯も炊けてる。それじゃあ調理開始だ！」

「ふう。じかせつさま。やつぱおにいちゃんのチャーハンは美味しいね。わたしじゃ敵わないや」

「こういう料理はな、豪快さが決めてなんだ。ちまちま作ってたら

ダメなんだな。片手で中華鍋を振れる位の力はないとな」

夕食後のお茶を飲み、まつたりとした空気が流れる露木邸。だが、どことなく普段と違う感じもする。それが何なのか、二人とも何とはなしに感じ取っていた。そう、柚希を送りにいった時の、あの離子の発言のせいだ。あれからもう数日経つといつに、その影響は影をひそめる毎に、じわりじわっと色を濃くしている感じがある。

「……あのセー！」

「……あのね、おにいちゃん！」

一人が同時に声を上げる。氣まずい沈黙が一人の間に落ち、どちらも口を開こうとしない。目を合わせてもすぐに逸らしてしまひ。悠斗も離子も、あの一言に縛り付けられ、その呪縛から逃れる」とが出来ないでいる。

「……離子、口の横、ご飯粒ついてる」

先に沈黙を破ったのは悠斗の方だった。ふと見た離子の顔に、米粒が一つついているのを見つけたのだ。離子は慌てて手でそれを取り、恥ずかしさに真っ赤になってしまひ。

（ああ、こんな事で赤くなるなんて、離子はやつぱり可愛いなあ…）

惚けた頭でそんなことを考えていることに気づいた悠斗は、ブルブルと頭を振つてその考えを自分の脳みそから追い出した。（なに考へてるんだ、俺は！ 俺は誓つたはずだ！ 離子を家族と

して護るつて！）

煩惱丸出しで盗撮カメラ映像を録画していた義兄がそんなこと言つても、なんの説得力もないのが現実である。

「……おにいちゃんだつて、『ご飯粒ついてるよ？』

「えつ？」

悠斗は慌てて口の周りを手で触る。だが、指に米粒の触感はない。

「……ふつ。ふふつ。あはははつ。『冗談だよ、おにいちゃん！』

「だ、だまされた

つ！」

それまでの沈鬱な空気が嘘のように晴れていた。なんでもない雛子の一言で、こんなにも明るい雰囲気がとりもどせるなど、誰が思うだろ？。だが、悠斗と雛子は知っていた。こんな時は、『冗談で気まずい雰囲気を吹き飛ばしてしまるのが一番だと。

「雛子……！　おにいちゃんは怒つたぞ！」

「いや／＼つ！　おにいちゃんに襲われる／＼つ！」

「人聞きの悪いことを言つな！」

「べつだ。おにいちゃんなら考えられるもんねー。なにしろ妹や従妹の裸を覗く位なんだし……あ……」

「……そ、それは……」

「……。わたし、気にしてないからつー！」

「えつ？」

「あの時言つたことも『冗談！　深く考えたりヤダメだよ、おにいちゃん！』

「冗談つて、雛子、お前

「いいの、『冗談なの！　おにいちゃんはそれで納得してくれたらそれでいいの！』

さつきまでの軽いノリが、一言の失言で元に戻ってしまった。しかも、それは悪化の一途をたどつているようにみえる。

「わたしはおにいちゃんの妹なの！　それでいいの！　だから、だから、それ以上のことは考えちゃいけないの……」

雛子は席を立つと、階段を駆け上がり自分の部屋へとむかってし

まつた。扉の閉じる音と鍵のかかる音が聞こえる。

「雛子……」

悠斗はただ呆然と雛子のいない彼女の席を見つめるだけだった。

第四章 離子危機一髪 1(後書き)

いかがでしたか? もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第四章 離子危機－髪 2（前書き）

第四章の2をおおむねつづります。
それでせびりつも！

翌朝、雛子は起きてこなかつた。悠斗は遅刻ギリギリまで雛子の部屋の外で待ち続けたが、悠斗の呼びかけに一切応えようとしなかつた。

「雛子……、俺、学校行つてくるぞ。具合が悪いんだつたら休んでいいからな」

その返事は扉に何かがぶつかる音だった。多分枕だろう。悠斗は説得を諦め、一人学校へと向かつた。

「一人で通学することには慣れてたはずなんだけどなあ」

家を出てすぐ、そんな言葉がつい口をついて出てくる。この三週間弱で、悠斗の隣には雛子がいることが当たり前になつていた。その当たり前の日常が壊れかけていた。何とかしなければいけないのに、どうしたらしいのか分からぬ。悠斗は悶々とした気持ちを抱えたまま通学路を一人歩いて行つた。

「おにいちゃんは、もう学校ついたかなあ」

そのころ家では、制服に着替えた雛子が通学の準備をしていた。さすがに遅刻は免れないだろうが、欠席するよりはずつとマシだ。雛子は自分がなぜあんな態度を取つてしまつたのか後悔していた。あれでは兄に嫌つてくださいと言つてるも同様ではないか。

「とにかく学校行かなきや。ホームルームには間に合わないけど、一時間目には間に合うよね」

雛子は通学鞄とスポーツバッグを持つと、部屋の扉を開けた。階段をとんとんとんと小走りに下りる。ふと、雛子の鼻をくすぐるい匂いに気がついた。それはダイニングの方から漂つてくる。

「あ……」

それは兄が自分のために用意した朝食だった。だし巻き卵に味噌汁。茶碗とお椀は伏せておいてある。起きてこない自分のために、

いつも通りに朝食を用意してくれていた兄の姿を想像して、雛子は思わず涙ぐんでしまった。

「一時間目も遅刻ね……」

せっかく用意してくれた朝食を無駄になんて出来はしない。雛子はキッチンに立って味噌汁を温め直し、ご飯をよそつてから、いつもは一人揃つて言うセリフを口にした。

「いただきます」

一人で食事することには慣れていたはずなのに、なぜこんなにも寂しいのか。答えは簡単だ。兄が、悠斗がないのだ。この三週間弱、朝と晩の食事は必ず一人揃つて食べることにしていた。たったの三週間弱。でも、長かつた三週間弱。

「おにいちゃん……美味しいけど、ひとりじゃ美味しいくないよ……」頬を熱い滴が伝い、ご飯と一緒に口に入る。

「ショッピー……」

白米は甘いはずなのに、自分の涙の味で塩辛かつた。

「よう、今日は一人か？ 悠斗」

通学路の途中で悠斗は思いきり背中をぶやしつけられていた。こんな事をするのはただ一人。悠斗の親友を自負している一哉だけだ。「いつてーな。たまには一人の日があつてもいいだろ？」

「ふむ、雛子ちゃんとなにがあつたな？」

「……」

「団星か。どうせお前が何かまずいことでも言つたんだる。あの年頃の女の子は難しいぞー？」

「お前だって一つしか違わないだろうが」

「一般論だよ。んで、何があつたんだ？」

「家庭の事情だ」

「またそれか。まあそつ言つんなら口は挟まないけどな。何か話しあくなつたらいつでも聞いてやるぞ」

「ああ、覚えておくよ」

校門から続く緩くて長い上り坂を登り切り、ようやく学園の校門が見えてくる。その時、スピーカーから予鈴の鳴る音が響いてきた。
「まずい！」

「走れ、悠斗！」

「言われなくたって走つてるー！」

目の前で門扉が閉じられようとしている。ギリギリのところで二人は門の内側に滑り込んだ。

「朝から全力疾走かよ。まったく……。今田は厄田か？」

「まあまあ、とりあえず教室にいこうぜ。これで遅刻扱いになつたらそれこそ走り損だ。いくぞ、悠斗」

* * *

門扉が閉じられると、生徒はその横にある通用口から守衛のいる受付を通つて学校へ入らなければならない。雛子はこれまで欠席は一回したもののみ、遅刻をするのは初めてだったので、そのルールを知らなかつた。守衛室から門扉の前は門柱の陰になつていて見えにくい。雛子は途方に暮れていた。

「あれ？ キミも遅刻かい？」

そんな雛子の背後から、優しげな男の声が聞こえてきた。雛子が振り向くと、そこには背の高い男子生徒が立つていた。制服を着崩しているわけでもなく、外見はごく真面目な感じだ。雛子は藁にもすがる思いでその男子生徒に助けを求めた。

「そうなんです。でも、遅刻するのは初めてで、どうやって学校に入つたらいいか分からなくて……」

「そうか。こっちにおいて。この通用口から入るんだ。といつても、僕も一回目だけね」

悪戯っぽく微笑むその男子生徒の笑顔に、雛子の胸はきゅっと締め付けられた。

（なんて無邪気な笑顔を見せる人なんだらう……）

雛子はその男子生徒のあとを続いて通用口を通りた。守衛に生徒手帳をみせて、学校へ入ることを許可される。男子生徒は「なんないことないだろ?」といった風に雛子に微笑みかけた。

「それじゃあ、僕は新校舎だからここで。また会えるといいね、一年C組の櫻井雛子さん……あ、今は苗字が変わって露木さんだつたつけ」

「えっ? なんでわたしの名前を……?」

「それは、僕がキミをずっと見ていたから、だよ」

「それって……」

「じゃあ、またね」

「待つてください! あの、あなたの名前は……?」

男子生徒は陽の光をバックにしてにっこりと微笑んだ。

「三年A組、神宮寺孝明。じんぐうじ たかあき覚えておいでくれると嬉しいな。それじ

やあね」

「神宮寺……孝明……さん」

雛子は立ち去る孝明をぼうっとした目で見送る。その時、雛子の頭の中には悠斗の姿はどこにもなかつた。

「俺、ちょっと雛子の教室見てくる!」

一時間目の休み時間、悠斗は我慢出来ずに教室を飛び出していた。電話しても一向に出る気配がない。もしかしたら学校に来ているのかもしれない。授業中は携帯の電源を切ることになつてるので、それで出られないのかもしれないと考えたのだ。

一年三年の教室のある新校舎と、一年生の教室のある旧校の間は、ちょっと長い渡り廊下で結ばれている。悠斗はその渡り廊下を全力疾走して一年C組の教室の前までやつてきた。教室の後の扉から中をうかがう。雛子の席の位置は把握済みだ。そして雛子は、そこにいた。

「雛子!」

突然上級生が現れた上に、クラスメイトを呼びつけたことに、雛

子の級友たちはどよめいた。だが、それが悠斗だと気づいた彼らは、「なーんだ」とでも言いたげに世間話に戻っていく。悠斗は教室に足を踏み入れ、雛子の席の方へ一直線歩いて行った。雛子は怯えたような表情で身体を固くしている。

「よかつた……。学校には来てたんだな。心配したんだぞ、雛子」「おにいちゃんが心配しなくても、わたしひとりでだつて学校には来られるもん」

「雛子……」

「もう、おにいちゃん、みんなが見てるじゃない！ 恥ずかしいから早く帰つて！」

「そりやないだろ、おにいちゃんはお前を心配して……」

「だから、それが恥ずかしいの！ 人前であまりベタベタしないで！ わたしはおにいちゃんの妹なんだよ？」

「当たり前じゃないか！」

「おにいちゃんのは度が過ぎてるの！ わたしは妹！ おにいちゃんはおにいちゃん！ けじめをちゃんととつけて！」

悠斗は頭をバットでぶん殴られたようなショックを受けていた。この前体育館裏で散々殴られた時なんかとは比較にならないほどの中衝撃だ。それは物理的な衝撃ではなく、あくまでも心理的なショックだった。

「だから、はやく自分の教室にもどつて！ それから、わたし、今日からひとりで下校するから！ 待ち合せはなしね！」

悠斗は信じられないといった面持ちでふらふらと後じさると、きびすを返して一年C組の教室から飛び出していく。走りながら悠斗は自問していた。何が悪かったのか。いつたい自分にどんな落ち度があったのか。なぜ突然雛子があんな態度を取るようになったのか。

考えれば考えるほど分からぬ。深い泥沼のような思考の渦に巻き込まれて、悠斗はあえいでいた。

「雛子……雛子……。俺はお前の事だけ考えてたのに……」

悠斗は教室に着くなり自分の席で机に突っ伏してしまった。ブツブツと妹の名前をつぶやき続ける悠斗に、親友を自負する一哉ですら声をかけることが出来なかつた。

その日一日、悠斗はまるで抜け殻のように惚けていた。

* * *

「ちょっとどじめん、このクラスに櫻井……じゃなかつた露木さんつて女の子がいたと思つたんだけど……」

放課後のホームルームが終わつた直後、長身の男子生徒が一年C組の教室をおとなつていた。今朝、離子の窮地を救つたあの神宮寺孝明である。声をかけられた女子生徒は、ぽーつとなりながらも離子に声をかけた。

「離子……三年生の先輩がきてるよ？」

「え？ 三年生？」

心当たりのない離子は教室の後の扉から覗くその男子生徒の顔をみて、今朝の事件を思いだしていた。

(あの人だつ！)

孝明は離子に気づくと、大きく手を振つてきた。思わず離子は席を立ち、扉の方へ走り寄る。

「どうしたんですか？ こんなところまで」

「いやね、もし露木さんがよければなんだけど……、僕と一緒に下校しないか？」

「えつ……？」

「迷惑かな？」

「迷惑なんてそんな……。とんでもないですっ！」

「それじゃあ決まりだ。ちょっと靴を履き替えてくるから、キミは旧校舎の昇降口にいてくれ。迎えにいくから」

「は、はい」

「それじゃ、あとでね」

孝明は軽く手を上げると、廊下をまっすぐに歩いて行った。離子はぼーっとその姿を見つめていたが、はつと我に返るとすぐに自分の席にもどつて自分の鞄とスポーツバッグを引っ掻むと、すぐさま昇降口へと向かった。自分の下駄箱から靴をとりだして、急いで足を突つ込む。そして昇降口の柱にもたれて孝明がやって来るのを待つた。

「ごめん。待たせたかな？」

「いえつ、全然！」

「じゃあ、帰ろうか。実は、帰り道がほとんど一緒なんだ」

「そうなんですか？」

その時、離子の級友のひとりがポンと肩を叩いてきた。うつすらとそばかすの残るちょっと幼い感じの眼鏡をかけた女の子だ。

「なーに、ちいちゃん？」

「いやあ、離子にもやつと春が来たんだねえ。よかつたよかつた。私がてつきり離子がブラロンなんだとばかり思つてたよ。うんうん。これこそが健全な男女の姿よね。じゃ、がんばってねー！」

「もう！ なにいつてんのよ、ちいちゃん！」

「お友達の言ひとおりだよ。お兄さんといへり仲が良くなつて、それには限度があるからね」

孝明はゆっくりと歩き出した。そのスピードは背の低い離子を気遣つてか、とてもゆっくりしたものだった。

「うぬう……、一体誰なんだあの男は！」

物陰から旧校舎の昇降口を見張つていた悠斗は、離子が見知らぬ男子生徒と仲むつまじく会話しながら下校していく姿を歯ぎしりしながら見つめていた。同じ一年生なら大抵の生徒の顔は分かっている。ということは、一年か、三年か……。

「せーんぱい！ こんな所で離子の監視ですかあ？」

「つおわあつ！」

突然現れた女子生徒に声をかけられて、悠斗の心臓は危うく止

ストを起こすところだった。だが何とか悠斗の大切なエンジンは壊れることなく鼓動を打っている。多少回転は上がっているのだが。その女子生徒はパールピンクのメタルフレームの眼鏡にポーテー ル。顔は雛子よりすこし幼い感じで、うつすらとそばかすが残つて いる。

「き、君は？」

「雛子のクラスメイトの南原智恵です。みんなは『ちいちゃん』つ て呼びますけどね。ところで田那あ。ちよこと耳寄り情報があるん ですかねえ……」

智恵はどこからか取り出した扇子で口元を隠しながら流し目で悠 斗を見つめる。扇子の表面には大きく『悪代官』の筆文字が。いか にもな雰囲気を漂わせている智恵だったが、悠斗にとつてその『情 報』という言葉はとても魅力的に響いた。

「じょ、情報？ なんだ？ どんな情報なんだ？ 教えてくれ！」

「智恵はにっこりと微笑むと両手を差しだした。
「なんだ、この手は？」

「情報料」

「世話になつたな。あとは自分で何とかする」

「ああん、先輩！ 冗談ですよ。ファーストフードのセットで いいですから！」

あくまでも情報料を取ろうとする阿漕な智恵であった。だが、フ アーストフードのセット程度で貴重な情報が得られるという事実は 悠斗の心を動かした。立ち去るなり一歩あることから、まつすぐ智恵のもとへ戻つてくる。

「条件を呑もう。情報とやらを聞かせてもらおうか」

「なら、とりあえず尾行しながらにしましょ。その方がはやいで すから」

「ちょ、ちょっと待つてくれ！ 尾行つて、そこまでするのか？」

「雛子が心配じゃないんですか？ さあ、いきますよ、先輩！」

智恵はさつさと歩き出した。悠斗も慌ててその後につづくのだつ

た。

第四章 離子危機一髪 2（後書き）

いかがでしたか？ もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

第四章 離子危機一髪 3（前書き）

第四章の3をおおむねつづります。
それでせびりつも！

「対象は三年A組の神宮寺孝明先輩です。噂によると、新入生歓迎会の時からずっと離子を気にしていたとか。これは確かな筋からの情報です。ですが、ある口から離子の周囲には常にあなたの姿があつた。それが今まで神宮寺先輩が離子にちょっとかいを出してこなかつた理由と考えられます」

電柱や立て看板などを利用しながら、智恵は巧みに身を隠して離子たちと一定の距離を保っている。探偵も顔負けの尾行術だ。一体この女生徒の正体はなんのだろう、と悠斗が心配になりかけた頃、道は露木家のある角にさしかかっていた。

離子はそのまま門扉を開き、玄関の鍵を開けた。最後に孝明に向かつて小さく手を振ると、孝明も片手を上げてそれに応え、その後離子は家に入つていった。だが、悠斗たちの尾行はここでは終わらなかつた。

「問題は、ここからです。気をつけてください。神宮寺先輩がこっちに来ますから。あの角に身を隠して！」

悠斗と智恵が急いで身を隠すと、孝明がすまし顔で角を曲がつていった。わざわざ露木邸まで離子を送り届けて、自分は逆方向へ帰るというのだろうか？ 悠斗には納得がいかなかつた。

「さあ、先輩、これからが本番ですよ。気合い入れていきましょう！ あ、ファーストフードのセットの件、お忘れなく！」

「分かつてる。そのくらいは財布に入つてるさ」

「結構。じゃあ、さつきまでと同じ要領でいきますよ？」

「おう！」

孝明は露木邸から南へ五〇〇メートルほど離れたちよつとした高層マンションのエントランスに入つていった。尾行はここまでだ。指紋認証のオートロックがついていて中に入るとは出来ないし、中に入れても管理人室には人がいる。

「神宮字先輩はこここの14階のワンルームでひとり暮らしをしています。部屋番号は14F。ちなみに、このマンションには南向きの部屋と北向きの部屋があります、14Fは北向きです。それと、神宮字先輩は一応優等生で通っていますが、ちょっととした筋の情報によると、このマンションに女の子を連れ込んではあれやこれや、教育上不適切な遊びをしているそうです。ちなみに、管理人室に人がいるのは午前七時から午後八時の間で……どうしました？ 先輩？」

悠斗はあることに気づいていた。柚希が自分たちを監視していたのは、恐らくこのマンションの屋上からだ。だとすると、北向きの部屋を持つ孝明が自分たちの生活を監視することもまた容易いことではないか。そして、柚希が屋上に入り込めたということは、どこかに屋上まで通じるような抜け道があるに違いない。

「オートロックだから入れない、と決めつけてかかったのが間違いだつたな。多分このマンションには抜け穴があるんだ」

「ほうほう」

「そして、神宮寺とかいったな。その先輩は、俺たちの生活を盗み見ていたに違いない。二人の間に何があったのか今は分からないが、これは要注意だ。南原さん、感謝するぜ！」

「はいはい。ご用があればいつでもお力になりますよ？」で、約束の報酬の件ですが……」

「分かってる。ちょうどそこにハンバーガー屋がある。そこで奢る

よ

結論から言つと、智恵はハンバーガーのセットを四人前べろりと平らげてしまった。雛子よりさらに華奢なイメージのあるこの女子生徒のいつたいどにそれだけの食べ物が入るのか、悠斗には不思議でならなかつた。

「この世は謎で満ちているな……。特に女の子は謎だらけだ」

「ん？ なにか言いましたか、先輩？」

「いや、戯言だ。忘れてくれ。それよりな、雛子から朝のことで何

か聞いてないか？」

「それが、ぼやーんとしてて何にも話してくれなかつたんですよ。聞いてたら先輩にきつちつお話しますつて」

「追加料金取るんだろ？」「

智恵はまだどこからか取り出した扇子で口元を隠しながら、くつくつと咽を鳴らして笑つた。扇子の表面には『悪徳商人』と大きく筆文字で書いてある。一体どこでそんなものを買つてくるのかが悠斗には不思議でならなかつた。

「そりやまあ、情報はタダつてわけにはいかないですからね。でも、これはおおまけにまけた方ですよ？ 本来なら現金でいただくのが基本ですから」

「まるでプロの探偵だな。まあ、セット四つでこれだけの情報が得られるなら安いもんだつてことだな」

「その通り！ さすが先輩は物わかりがはやい！」

がつくりと肩を落とす悠斗と対照的に、満腹になつた智恵は満足そうな笑顔を浮かべていた。

（だが待てよ……、この南原さんを味方につけておけば、いざつて時には心強い仲間が出来るんぢやないか？ 神宮寺つてヤツが眞面目な生徒ならまだマシだが、単に雛子の身体目当てのゲス野郎その可能性が圧倒的に高いのだが……だとしたら……。俺だけで雛子を助けることが果たして出来るだろ？）

「先輩、いま私を味方に付けておこうと考へてたでしょ？」「なぜ分かるんだ！？」

智恵は人差し指を一本たててちつちつと舌を鳴らしながら左右に振つてみせた。

「それは、私が自分の価値を知つてるからですよ。まあ、先輩の判断は間違つてません。私を味方にしても損はないし、私は先輩の味方ですよ」

その一言が、悠斗にはなんとも頼もしく感じられた。

* * *

「ただいまー！」

帰宅を告げても、家の中からは雛子の声は聞こえなかつた。だが、夕食の準備だけはしてあり、小さなメモ書きがテーブルの上に置いてあつた。

『しばらく距離を置きたいので、一人で食べてください。雛子』

悠斗は深くため息をつくと、一階に向かつて大声で言つた。

「晩飯、ありがとうございます！　いただきます！」

一人で食べる一回目の食事。何と味気ないことか。悠斗はやはり何とかして雛子との関係の修復を図らなければと決心した。それには、あの神富寺という男子生徒と雛子の関係についてもつと知る必要がある。悠斗は柚希が残していく各種装備の使用をも決心していた。

食事を終えて食器を洗う。濡れた手をエプロンで拭つて、リビングのテレビを付ける。部屋の照明は落とし気味にしてある。五〇〇メートルほど先に、あのマンションの上部が見えていい。その一室から一瞬きらりと何かの光が反射したような気がした。

（双眼鏡か、望遠鏡か……。なんにしろ、こちらを監視してるのは間違いないな。だとしたら、こつちもそつちの流儀に合わせていかせてもらうだけだ）

柚希が置いていった装備の仲には、都市迷彩の戦闘服（どう考えても大人の男性用）やら超高倍率のズームレンズ付きビデオカメラ（一見するとまるで狙撃銃）やらがあつた。あちらはまだ悠斗が監視に気づいているとは思つていない。そこが付け入る隙だつた。（見てろよ、尻尾を掴んであつといわせてやる！）

階下から悠斗の声が聞こえても、雛子はベッドの上から動こうとしなかつた。自分は妹なのだ。だから、今していることはきっと世間の常識からいって多分正しい。孝明に送つてもらつたことも、兄

にべつたりの妹といふ評価よりはずつと健全な田で見られるに違いないのだ。

それに、孝明は紳士的で優しい。常に車道側に立つて、自分をかばつて歩いてくれた。悠斗はそんなことはお構いなし。自分の好きな方を歩く。それって本当に自分を大事にしてくれているのだろうか？ 離子は疑心暗鬼に陥っていた。もしかしたら、悠斗こそ離子の身体目当てのろくでなしの男で、自分が本当に必要としているのは孝明なのではないか、と。

「おにいちゃんの、ばか……。わたし、神宮寺先輩に惹かれてるんだよ……？ 本当にそれでいいの？」

小声で誰にもなく呟くが、その離子の問いに答えるものは誰もいなかつた。

「おにいちゃん……。わたし、分からないよ……。本当にこれでいいの？」

悠斗の部屋の窓は南に向いており、前は道路に面している。いま、悠斗は超高倍率のビデオカメラを五〇〇メートル先のマンションの一室に向けていた。ビデオカメラにはナイトビジョン機能もついており、画像は荒いがまるで昼間のように周囲の様子をみることが出来た。

「やつぱりか……。あれは天体望遠鏡か？ 地上用の接眼レンズを使つてやがるな。向きはどうみても下向きだ。悪いけど、録画させてもううぜ。決定的な証拠とまではいかないけど、少なくともこちらに望遠鏡を向けているのは間違いないからな」

悠斗は引き金型の録画ボタンを引いた。録画開始。相手は悠斗が気づいていることすら感じていない。最小限しか開いていない窓、そして完全に落とした照明。これを暗視装置なしで発見するのは不可能だ。

「さて……、おにいちゃんとしてはこれは捨て置けない状況なんだが、問題は離子のヤツがどう思つてるか、だよな……」

そう、雑子は孝明に家の前まで送つてもらつたことを喜んでいる風ですらあつた。確かに長身の上にイケメン。しかも智恵の情報によれば成績も優秀で将来を嘱望されているらしい。そんな相手に目をかけられて、しかも家まで送つてもらつたのだ。女の子としては悪い気はしないのだろう。悠斗としては非常に面白くないことだが、これは事実だつた。

そのまましばらく録画ボタンを引き続けた悠斗は、相手が望遠鏡を片付けるのを待つてボタンを放した。恐らく朝も同じ事をやつてくれるにちがいない。ならば、こちらも対向手段をとるまでのことだ。考えられることは、雑子が家を出るのを確認して、通学途中で偶然を装つて接近することぐらいだろうか。これは一人ではちょっと荷が重そうだ。だが、こちらには新たな味方がついている。そう、智恵だ。

悠斗は携帯電話に新しく登録した番号を呼び出し、通話ボタンを押した。

「もしもし、南原さん？ 僕だけ……。君の力が借りたい」

* * *

翌朝早く、悠斗は孝明の住むマンション近くのハンバーガーショップ（一四時間営業）で智恵と待ち合わせた。時間は午前四時。雑子もまだ寝入つてゐる時間だ。悠斗はまず超高倍率ビデオカメラをマシンションに向け、監視の目がないことを確認した上で、雑子を起さないように静かに家を出た。朝食は田玉焼きを用意して、主食はトーストで済ませるようにとメモ書きを残してきた。

「おはよめざります、先輩。たぶん電話が来ると思つてましたよ」智恵は悠斗の対面の席に座る。トレイには一人分のモーニングセツト。もちろん彼女ひとりで食べるものだ。

「ああ、昨夜確信が持てたんだ。あの神宮寺つてヤツは、うちを監視してやがる

「ほほう、それはどうして？」

「大口径の望遠鏡を、うちの方向に向けてやがつた。天体観測するのに下を向けるのはおかしいだろ？」「

智恵はそばかすの残る顔を真剣な表情に変えて、辺りを憚るようにしていった。

「それ、なにか証拠になるようなもの、残しましたか？」

「こちらも超高倍率ビデオカメラで撮影してやつた。ナイトビジョン付きのとんでもないヤツだ。望遠鏡がどっち向いてるかだけじゃなく、ヤツの表情までバッチリ撮らせてもらつたよ」

「それは最後の手段に使いましょう。で、今日ははたぶん雛子が家を出るのに合わせて神宮寺先輩も家を出ると、そいつのことですね？」

悠斗は少し自信なさげな表情で呟いた。

「それのことなんだが、絶対とは言えない。だから君の手が借りたかったんだ。一手に分かれて、互いの目標を監視する。連絡は携帯電話を使えばいい。どうだ？ やつてくれるか？」

智恵は肩をすくめてみせると、そのちょっと猫を思わせる瞳を二日月型にして笑つて見せた。

「やる気があるからこんな時間に出てきたんですよ？」

「そうだったな。野暮なことを聞いてすまん」

智恵は腕時計で時間を確認しつつ、ソーセージマフィンにかぶりついた。朝から食欲は旺盛なようだ。

「ほろほろほうほうをはいひひはい」と

「口いっぱいに物入れて喋らなくていいから

口の中のマフィンをコーヒーで胃に流し込んで、改めて智恵は口を開いた。

「そもそも行動を開始しないといけないです。雛子、けっこう朝は早いんでしょう？」

「ああ、交代で朝食作つたりしてるからな。それに朝もシャワー浴びたりしてるし」

「で、お兄さんはそれを覗いちゃつたりしてると」

「ななな、なんでそななる！？」

「ふふふーん。血の繋がらない兄妹ですものねー。そういうのもあつていいんじゃないですかあ？」

悠斗頭痛を抑えるようにして頭を抱えた。実際頭痛がするくらいこの智恵という子の手玉に取られてるような気がするのだ。

「君はうちの家族の状況を楽しんでるだろ」

「あ、やっぱわかりますか？ だつて、私に先輩みたいな血の繋がらないおにいちゃんが出来たら、絶対ペットにしちゃいますからー！」

「ペットってなんだ、ペットって」

「ペットで悪ければ……んー、性奴隸？」

「どいでそんな単語を覚えてくるんだ、君はー！」

「企業秘密です。とりあえず、これ食べ終わつたら、行動開始しますよー。どちらがどちらを担当しますか？」

悠斗はしばし黙考した。教えてもらった智恵の家から学校までのルート上には、一ヵ所だけ離子や自分の登校ルートと合流する場所がある。ということは、そこまで見つかなければあとは見つかつたとしても尾行されたとは思われないだろ。となると、悠斗は孝明の方だ。尾行なんて昨日初めての経験だったが、あれはあれで経験値になつた。今ならもつと上手くやる自信がある。

それに、離子は明らかに自分を避けている。万が一見つかつたときの言い訳も出来ないだろう。となると、必ずと配置は決まってくる。

「君が離子を尾行してくれ。俺は神富寺をつける。連絡はなるべく密に。出来れば電話をつなぎっぱなしにするくらいで」

「それはいいんですけど、先輩、ケータイの会社どじですか？」

「え？ あの白い犬のどじ？」

「それなら大丈夫です。私もそつちを使いますので……」

智恵は鞄をゴソゴソと漁ると、一台のスマートフォンを取り出した。リンクゴのマークのついた大人気の機種だ。それともう一つ、通常の携帯用のヘッドセットも悠斗の目の前に置いた。

「先輩、いひちを電話帳に追加しておいて下せ。」これと先輩の電話なら、通話料はタダですから。それと、このヘッドセッティングを使つてください。ハンズフリーで通話が出来ます」

「なるほど、そりゃいいや」

早速電話番号を登録する悠斗。試しに一回かけてみる。普通の着信音が鳴るのかと思つたら、テレビ番組の『笑点』のテーマ曲が流れ出した。店内の客の視線が悠斗たちに集まる。

「なんて選曲センスだ……」

「えー？ 優めてもらえるとばかり思つてたのに」

「とにかく、行動開始だ！ いくぞ！」

「サー、イエッサー！」

「どこの軍隊だよ、俺たちは……」

第四章 離子危機一髪 3（後書き）

いかがでしたか？ よろしければ、意見、感想などお寄せ下さい。

第四章 離子危機－髪 4（前書き）

第四章の4をおおむねつづめます。
それでせびりつも！

『ホワイトルーク、こちらチェックメイトキングジー。目標が動き出しました。どうも』

「了解……って、なんでそんな古いネタを知ってるんだよ…」

『気分ですよ、気分。そちらはどうですか？』

「待ってくれ……出てきたぞ、ジンゴだ」

悠斗が物陰に身を隠すと同時に、長身の神宮寺がマンションのHントランスから歩み出た。悠斗の存在には全く気づく様子もなく、学校への道を歩き出す。悠斗はヘッドセットのマイクに向かって小声で囁いた。

「チェックメイトキングジー、こちらホワイトルーク。対象が動いた。こちらも行動に移る」

『先輩も気分出てきましたね！』

「つむせー！」

一定の距離を保ちながら相手に気づかれないというの、思った以上に難しい。何かの拍子に振り向かれたりしたら、素早く身を隠すか、何気ないそぶりで相手の目を誤魔化さなければならないのだから。悠斗は自分の自信が砂上の楼閣だったことを思い知らされた。「くそっ、対象を見失いそうだ。少し走る！」

『待つて！ 立たないよう日に早歩きで！ 走り切らダメです！』

『了解、努力する！』

そんな苦労をしつつもなんとか孝明を見失わずに、ラングブーポイントであるうと想定していた交差点に近づいていった。ふと、孝明が歩みを止める。

(気づかれたか？)

だが、孝明は腕時計で時間を確かめると、角の陰になる部分に身を潜めるようにして塀に寄りかかった。

「チェックメイトキングジー、こちらホワイトルーク。そちらの動

きは？』

『ランデブーポイントまであと二分弱。そちらは？』

『こちらは到着済み。待ち伏せをかける模様』

『了解。これはビンゴですね、先輩』

「ああ、俺もそう思う」

三分後、学園の制服に身を包んだ雛子の後ろ姿が悠斗の視界に入った。同時に孝明も動き出す。雛子の少し後を歩きながら、だんだんと距離を縮めていくのが分かる。間違いなく待ち伏せだ。そして、ついに孝明が雛子に追いついた。

「チェックメイトキングツー、こちらホワイトルーク。目標が接触」「見えてますよ、先輩」

「うわあ！」

いつの間に隣に居たのか、智恵の声はすぐ耳元から聞こえてきた。

驚いた悠斗は携帯電話をお手玉して、危うく落としかける。

「やつぱり待ち伏せでしたね。写真は撮りましたか？」

「ケータイで何枚かね。接触の瞬間も撮ったよ」

「ではとりあえずはOKですね。とりあえず、あとは普通に登校しましょ」

「櫻井……じゃない、露木さん」

後から突然かけられた声に、雛子の心臓はびくんと跳ね上がった。聞き覚えのある優しい声。あの三年生、神宮寺孝明の声だ。昨日はわざわざ家まで送り届けてくれた、とても紳士的な男子生徒。悠斗とは大違いの、優等生……。

「せ、先輩。どうして？」

「いや、通学路がこっちだつたんだ。で、前にキミらしい姿を見つけてね。急いで追いかけてみたつてわけ」

爽やかに笑つて見せる。白い歯がきらりと光つて目に眩しい。がさつな兄とは大違いの孝明に、雛子の『じゅはすっかり腑抜けにされていた。

「でね、露木さん。もし良かつたらだけど、今日どこかで遊んでからつりに来ない？ 突然こんな事言つたら誤解されるかもしれないけど……」

雛子の脳裏に一瞬悠斗の怒る顔が浮かんで消えた。悠斗が怒りつが、そんなことは知つたことか。自分は自分で付き合つ相手を決められる。悠斗は『おにいちゃん』であつて、それ以上のなんでもないのだから。雛子は震える声で孝明の誘いに応じた。

「は、はい。喜んで……」

* * *

その日の雛子は放課後まですっかり抜け殻状態だった。授業で当たられても、普段なら難なく答えられるような問題を何分経つても解けず、「もういい、席に戻れ」と先生にまで呆れられるほどだつた。そしてホームルームも終わつて下校時間。智恵は雛子の背後から忍び寄ると、むんずとそのたわわに実つた胸を驚撃みにした。

「ひーなこー！」

「ひやあつ！」

「なんだあ？ まーた育つたんじゃないの？ どれどれ、もつと揉ませてみなさいー！」

「やめてよお……ちいちゃんつ。あんつ」

「おつと、そうそう、お兄さんから伝言預かつてたんだつた。いけないいけない。もみ心地がよくて忘れそつたよ」

「おにいちゃんから？ どうしてちいちゃんが？」

「ん？ 最近結構仲良くさせてもらつてるから。んでね、今日はちよつと帰るのが遅くなるから、食事はひとりでしてくれつて」「遅くなるつて……もしかしてちいちゃん……」

「ピンポーン！ 実は先輩をちょっとお借りします」

「……」

智恵の言葉は雛子の心臓に氷の刃のように突き刺さつた。悠斗が、

他の女の子と……。いや、しかし自分も悠斗のことを責められないことをしようとしていることを思いだしていた。そういうことか。

冷めたこころで悠斗のことを思つ。

「わかつた。わたしも多分遅くなるから。おにこちゃんにそう伝えておいて……」

「了解！ んじゃ、お兄さんちょっと借りるね！ また明日ー。」

『ホワイトルーク。、こちらチヒックメイトキングツー。田標は『

今日は遅くなる』と発言。予想通り。』

「やつぱりそうか。あのスカした男、離子を家に引きずり込むつむりだな？ そうとなりや、先回りだ！」

（）でもまた柚希が残していった装備が役立ちそつだつた。コンクリートマイクと小型カメラを仕掛けるためには、まずは屋上までいかねばならない。その後、14F室のベランダに下りる。そしてマイクとカメラを設置後ただちに屋上に戻る。抜け道は智恵が発見していた。防犯カメラの死角を一力所通れば、それで一気に屋上まで上れるのだ。

悠斗と智恵は新校舎前で落ち合い、普段と少し違うルートで露木邸に向かつた。いつもと違うルートを使ったのは、人目を避けるためだ。悠斗は素早く鍵を開けて家の中に智恵を招き入れる。大丈夫だ、誰にも見られていないのである。

智恵の前に柚希が残していった装備の数々を広げて見せると、半ばあきれ顔で彼女は呟いた。

「これって、完全にストーカーの装備ですよね……」

「俺もそう思う。使い方は分かるか？」

「大体。ノートパソコンがあるといいんですが

「俺のがある。それを使おう」

準備が出来たのはそれから三〇分後のことだった。リュックサックに都市迷彩の戦闘服。頭にかぶるためのバラクラバ帽。そして目を保護するためのゴーグル。手には分厚いグローブ。足下を固める

のは自分の趣味で買つたコンバットブーツ。

屋上に上るのは悠斗のみで、智恵は地上でのバックアップに就くことになった。

智恵の見つけたルートで素早く屋上へ上がる。一度廊下に出て、14Fの部屋の位置を確認する。そして再び屋上へ。仁正学園の武道重視の授業で鍛えられていなければ、こんなに何度も懸垂のよつなことをするのは無理だつただろう。

田が落ちてから、14F室のベランダに下りる。室内には誰もいない。窓の隅にコンクリートマイクと小型カメラを設置、小型のトランスマジッターを接続して電源を入れる。

「チヨックメイトキングツー。」ちらホワイトルーク。映像と音声の状況は?」

『両方とも問題なし。』のカメラにもナイトビジョンモードがあるみたいですね。多分自動で切り替わるタイプです』

「了解、それじゃあ、一旦屋上に戻る!」

『了解。私は事前の情報に基づき、例のバー付近で待機します』

「なによ! おにいちゃんのば か!」

「露木さんはおにいちゃんが大好きなんだね」

「だいひらいよ! あんなおにいちゃんなんか !」

そのころ離子は、孝明と一緒に薄汚いバーにいた。学園の制服のままだというのに、バーテンダーは見て見ぬふりをしつつ、酒を提供する。離子は口当たりがいい、しかしアルコール度数はかなり高いカクテルを立て続けに飲まされていた。

「おにいちゃんなんかねえ……ちいちゃんとくつこいぢやえぱいいによみー!」

へぐれけになつた離子は、悠斗のことで悪態をつきまくつっていた。

「ゆずひやんともくつつけばいにょよ~」

「じゃあ、僕たちは僕たちでくつこいぢやうかい?」

薄笑いを浮かべた孝明が離子にわざやきかける。離子はそれにな

にも応えない。

「じゃ、僕らは帰るよ。マスター、勘定はツケでね」

* * *

五分後、屋上と14F室の間の外壁にロープでぶら下がつて待機する悠斗の携帯に、智恵からの連絡が入った。

『ホワイトルーク、こちらチェックメイトキングツー。目標と対象が帰還の模様。目標は酔つてますね、これは』

『あいつ、酒なんか飲ませたのか！』

『足下がふらふらですよ。対象の方は足取りがしつかりしています。こちらは呑んでいない模様。狙いがはつきりしましたね』

『ああ、しかし制服のままバーに入るとはね。ある意味予想外だつただけに先生たちの目にもとまらなかつた、つてことか……』

『もう間もなくエントランスに入ります。…………いま、エントラーンスに入りました。』

「了解。こちらは突入の準備完了。突入のタイミングは任せゆ」

『チェックメイトキングツー了解』

やがて、窓に仕掛けたコンクリートマイクの音声が、悠斗の耳に差し込んだイヤフォンから聞こえてきた。不鮮明だが、会話の内容は十分聞き取れる。

『大丈夫かい？』

『らいひょうぶー』

(何が大丈夫なもんか！ 女の子に酒呑ませて、酔っぱらわせて好き放題しようつてヤツが！)

『じゃあ、ベッドに横になろうか。楽だよ？』

『らいひょうぶー』

その瞬間、孝明の声色が豹変した。狼が羊の皮を脱いだのだ。

『いいから横になるんだよ！』

『えうつー！』

(まだ突入出来ないのか！？)

「思つた通り、綺麗な肌してゐるね。太腿もすべすべだ」

『いやらあ～』

「チェックメイトキングツー、こちらホワイトルーク。突入はまだか！」

『まだです。今カメラからの画像を録画中 下着に手をかけたら突入キューを出します！』

「了解！ くそつ！」

突入はロープを使って行う。すでに長さを調整したロープは、腰をつなぐカラビナで悠斗の身体と結びつけられている。突入しようとわかれたら、すぐに飛び込む体勢は出来てゐるのだ。こうしている間にも、雛子は孝明の手で……。

『さあ、下着を取ろうね。取つたら写真を撮つてあげるよ。恥ずかしい写真をたくさんね』

『突入用意！……………今です！ 突入！ 突入！』

「うおおおおおおおおっ！」

14F室の上の外壁にロープにつかまって待機していた悠斗は、思いきり壁を蹴つた。

蹴つた反動で身体は大きく後に振られる。

高さは約三〇メートル。落ちたら間違いなく即死だ。

ロープを握つた手で微妙な長さの調整をする。長さはドンピシャだ！

そして、振り子のように戻ってきた悠斗の身体は、14F室の窓ガラスに向かつて一直線に飛び込んでいつた。

ガラスの碎ける音が響き渡る。悠斗は身体の何カ所かに痛みを感じていたが、そんなことは今はどうでも良かつた。多少の切り傷などなんとでもなる！

素早くカラビナを取り外し、ロープから身体を自由にする。

立ち上るとそこには悠斗の身長を遥かに超える体躯を持った三年生が、残忍な本性を丸出しにして立っていた。一瞬怯む悠斗だが

たが、ここで逃げ出すわけにはいかない！

「てめえ、俺の大事な雛子に何しやがった！」

「派手な登場だねえ。雛子ちゃんは言つてたぜえ？『おにいちゃん
なんて他の女とくつつこちやえればいいんだ』って。で、僕たちは
僕たちでくつづくこにしたつてわけさ。なにか不服でもあるのか
い？』『おにいちゃん』？』

「ううう、たふけてー、おにいひやーん……」

「雛子！ 助けに来たぞ。もう大丈夫だ！ このゲス野郎、よくも
大事な雛子に……。食らいやがれ、この腐れ外道！」

悠斗の右拳が唸りをあげて孝明の顔面めがけて突き出される。

だが、孝明はあっさりとそれを受け流し、同時に胴体に足刀を叩
き込んできた。

悠斗は倒れることこそ免れたが、胃の中の物が口にせり上がりつて
くるのを感じる。それを無理やり飲み込んで、悠斗は田の前の二年
生に再び立ち向かっていった。

回し蹴り、ロー・キック、前蹴り、全て躊躇される。それも余裕を持
つて。

そして、悠斗の実力を十分に見極めた孝明は、ついに反撃に移つ
た。

「さて、おいたをした二年生にはお仕置きをしなけりやなつと…」
とても田で追い切れない右ストレートが悠斗の左頬にクリーンヒ
ットした。

口の中に鉄の味が広がる。ペッと唾を吐くと、その唾は真っ赤に
染まっていた。

「おいおい？ 二年ボウズが僕の部屋の窓を壊してくれちゃって。
おまけに床に血の混じった唾まで吐いてくれたな？ この落とし前
……どうやって、付けるんだよッ！」

何発もの突き蹴りが悠斗を襲う。悠斗はにはとても捌ききれない
スピードをもつて。悠斗が素人でないと同様に、孝明もまた素人
ではないのだ。しかも一学年上である。実力差は圧倒的だった。

「ちくしょう！ これでも食らいやがれ！」

悠斗は無理やり孝明の袖と襟を掴みにいき、背負い投げを打つ。悠斗の方が背が低い分だけ、孝明の重心を崩すことが出来たのだ。だが、孝明は同体で転がる悠斗の襟を掴んで絞め技を極めてきた。割れたガラスの破片を孝明の腕に突き立て、絞め技から逃れる。「くそっ。案外頑張るじゃないか。そんなにこんな乳臭い女が大事か？ 知ってるんだぜ？」

お前たち、血が繋がつてないんだろう？」

ガラスの破片を放り出し、怒りの形相で孝明を睨め付ける悠斗。触れてはいけない、絶対に触れられたくない事実に、孝明は触ってしまったのだ。

実力では圧倒的に不利。

だが、さつきの背負い投げのように、不意を突く攻撃ならばなんとかなる！

悠斗はじりじりと間合いを詰めて行く。

それに合わせるようにして孝明もまた間合いを詰めてくる。

孝明は立ち技だけでなく寝技でも悠斗の遙か上を行っている。ならば、やはり不意打ちしかない。そう決めた悠斗は、一気にダッシュしていく。

相手の意表を突いた腰へのタックルだった。だが、孝明は冷静だつた。

しっかりと上体をかぶせると、悠斗の突進力を相殺してしまったのだ。

そして、目の前にあつた悠斗の後頭部にむけて肘打ちを放つ。

一回、二回、三回。

たまらず悠斗は床にくずおれた。

だが孝明の追撃は止まらない。倒れ伏した悠斗にさらなる蹴りが繰り出される。

割れたガラスで斬った傷を。容赦なく踏みにじられる。

「なんだよ、派手だつたのは登場シーンだけか？ もつと俺を楽し

ませてくれ、よツ！」

悠斗の鳩尾に孝明の爪先が突き刺さる。

息が止まる。

呼吸をしたくても、息が吸い込めない。

酸素を求めて肺が悲鳴を上げる。

（実力じや、やつぱり勝てないか……）

悠斗は渾身の力を込めて上体を起こした。

孝明が悠斗の髪を掴んで無理やり立ち上がらせる。

「もうひやめへえ～……おにいひやんをいりめないへ～……」

離子が泣きながら訴える。

その泣き声が孝明の嗜虐心をますます高まらせた。ガラスを破つてくれた落とし前はこういう格好で付けるのがよさそうだ、とばかりに悠斗をベッドの対面にある椅子に無理やり座らせる。やろりうとしていることは一目瞭然だつた。

「いいか、これから僕はお前の大事な妹を、お前の目の前で犯してやる。どうだ、嬉しいだろ？ 自分の妹が女になる瞬間を見られるんだ。こんなチャンス、そうそうないぜ？」

「いやらあ～～～！」

孝明が離子の上に覆い被さる。服を無理やり剥いでいく。自分も服を脱ぎ、上半身裸になる。

悠斗は全く動けない。

いや、動けないように『見えた』。

悠斗は千載一遇のこのチャンスをじつと待っていたのだ。密かに腰の後に付けたホルスターに手を伸ばす。

「さあ、下着をとるぞおおおお～！」

「……その前に、お前がくたばれつ……」

両手でしつかり握った黒い箱 一〇〇万ボルト級の強力スタンガン の電極を無防備な孝明の背中に押し当てる。悠斗の指が放電スイッチを押す。

「 ッ～！」

孝明の上半身がテタラメに暴れる。

しかし、悠斗の両手はしっかりとスタンガンを孝明に押しつけたままだった。やがて、孝明の身体がぱたりと仰向けに倒れ、ビクビクと痙攣しはじめる。彼は完全に意識を失っていた。

「チヨックメイトキングツー、こちらホワイトルーク……。対象をクリア。目標を確保。これより脱出シーケンスに入る…」

『こちらチヨックメイトキングツー、了解！ 脱出路は指示通りに。命流はポイントタンゴ。以上』

電話を切ると、悠斗はゆっくりと雛子の方へ近づいていった。酔っぱらってはいるものの、意識は結構しっかりとこちらではある。雛子は悠斗の姿を認めると、涙をボロボロとこぼして泣き出した。

「『めんなひやい……おにいひやん。』めんなひやい……」

悠斗はガラス片のついた手袋を脱ぎ、ズボンのポケットにねじ込むと、雛子の服を着せ直してやりながら彼女をなだめた。

「もういい。もういいから。おにいちゃんは怒つてないから

「ほんとう？」

「ああ、本当だ。だから、もう泣くな」

「ううう、うえええええええ……」

「な、もう悪い奴は倒したから。大丈夫だから」

「うん……、ね、おにいひやん、わらしのころ、すひ？」

「な、何を言つてるんだよ…！」 こんな時に…

「こんなとひらからりよ。わらひのころ、すひ？」

悠斗は悩んだ。悩みまくつた。どのくらい悩んだかといつと、多分白髪の一本や一本増える程度には悩んだ。白髪程度でと笑うながれ。高校一年生にとつては大問題だ。そして、自分の心に素直になることに決めた。

「ああ、俺は雛子が大好きだ！ 女の子として…」

「ううう、うれひいよお、おにいひや～ん……。ね、ひすひて」

「え、ええええええええええええええええええつ…？」

「うひて、すひなとひにしれいいつれいつねら」

そうだ。悠斗は両親を見送った時にそういう約束をしていたのだった。だが、いざせがまれると手が出せないベタレの悠斗だった。しかし！ 売え膳喰わぬは男の恥。悠斗は震える手で離子のあごを少し持ち上げると、その花びらのような唇にそっと自分の唇を重ねた。一回目より、二回目より、そして三回目より。ずっとずっと長い間、一人はそうしていた。

「離子、酒臭い」

「いやあ、いわうこれえ！」

「さあ、脱出だ。離子は俺が抱えていく！ 南原さんとの会流地点はポイントタンゴだ！」

「ひーひやん？ ぽいんろらんじー？」

「もう、この作戦には南原さんが全面的に協力してくれたんだ。そしてポイントーとは『TANGO』のーだ！ 家に帰るぞ、離子！」

「うんー。」

第四章 離子危機一髪 4（後書き）

いかがでしたか？ よろしければ、意見、感想などお寄せ下さい。

ハピローグ　　お義兄ちゃんが死んだこと　（前書き）

これが最後の更新になります。
エピローグです。
それではどうぞ！

Hプローグ　お義兄ちやんとおばなこ

離子と一人きつでこの家で暮らすよつになつて、早半年ちよつとが過ぎた。俺は未だに離子を妹としてもそして、女の子としても愛している。世間体？ そんなもの知るか！ 俺と離子を引き裂こうとする奴なら、たとえ父さんにだつて逆らつてやるー。まあ、実際は怖くて逆らえないかもしれないけどさ。

離子は最近ぐつと大人っぽくなつてきた。なんて言つか、母さんあ、都子さんのことな に似てきたといふか、「元々似てたのが、さらに磨きがかかつてきた感じだ。そういう変化に気づくとき、俺はちよつと複雑な気分にもなる。都子さんは凄く若く見えて、とてもじやないが実年齢を言われても信じられない。その遺伝子を受け継いでいる離子も恐らくああなるんだろうな」と思つと、嬉しくもあり、一緒に年相応に老けていけないのでないかといふ寂しさもちよつと感じるんだ。

柚希のヤツが家中に張り巡らせていた盗聴器具などは、南原さんが全部発見してくれた。ただ、風呂と離子の部屋のカメラなどは外してないそうだ。

「先輩のお楽しみを奪つちゃ可哀想ですからね。だから、これは貸しにしておきます。あ、ノートパソコンの中にはあつた離子の動画も消してませんよ？ 何に使つかはまあ聞きませんけど、楽しんで下さい」

南原さん恥るべし。彼女には逆らわなによつにじよつ。どんな手で復讐されるか分かつたもんじやないからな。くわばりくわばり……。

その南原さんの隠れた趣味が、離子の胸のサイズを手で測ることなんだそうだ。突然うしろからもまれるんだよつて離子も困つて

た。でも悪い、離子。前述の理由で俺は彼女には逆らえないのだよ。不甲斐ないおにいちやんを許しておくれ……。

柚希はといえば、無事中学校に戻つたらしい。いじめてた連中を逆に嫌と言つほどやつつけたとか電話で言つていた。どんな手段かは、まあ想像に難くないな。言つておくけど、やり過ぎは犯罪だからな、柚希。

柚希の父さん、つまり俺の叔父さんは、大した後遺症もなく退院できたそうだ。職場にも間もなく復帰出来るそうで、柚希の復学と共に喜ばしいニュースだ。ただ、柚希がつく直前までは医者もどうなるか分からぬといつていたらしい。女には手を上げたくない俺がこいつを鬼にして柚希を引っ張る事で良かつたよ。

で、中学に戻つた柚希は圧倒的な学力を示して、中間、期末で連續して全教科満点という快挙をやつてのけたらしい。高校入試もこれなら問題ないだろうな。もともと勉強が嫌いな子じゃなかつたんだ。きっと、来年は俺たちの後輩として堂々と仁正学園高等部の生徒として入学してくるだろう。その話を国際電話で父さんにしたら、柚希をうちに置いてやれという話になつてしまつた。うーん、それだけはちょっと怖い気がする。あの柚希がもしもちらりパワーアップして露木邸に現れたとしたら……。

ま、考えすぎだな。

ちなみに、柚希を襲つたあのスカした三年生、えーと、神富寺だけ? あいつは何故か自主退学しちました。形の上では自主退学だけど、色々と悪事をしてたのが教師にばれた、というのがもっぱらの噂だ。

真相はといふと、俺と南原さんでヤツの所行を撮影した動画（離子の顔は当然モザイクかけてある）を、匿名で学校に送りつけてやつたわけだ。あいつの表情までバツチリ写つてる映像だったから、

職員室は一時騒然となつたらしい。

話によると、なんでも女の子をつかえひつかえしては、部屋に引きずり込んで食つちまつようなヤツだつたらしい。雛子も危ないところだつたわけだが、そこを颯爽と登場した俺がカツコ良く救い出したというわけだ。

「おにいちゃん、いまの言葉には嘘があります。おにいちゃんが颯爽と飛び込んで来たのは事実だけ、その後はボコボコにやつつけられてたじやない」

「な、雛子！ でもその後、きつちりつけただろう…？」

「超高压のスタンガンでね」

「それに、あの作戦はほとんど全部ちいちゃんの発案だつたらしいじゃない」

「うぐう……。返す言葉もございません」

まあ、とにかく突入作戦に協力してくれた南原さんにも感謝しなきやな。え？ 報酬？ その後一週間飯をたかられたよ。財布が軽くなつて助かつた！

「うん、うん。じゃあ、クリスマス休暇には帰つてくるんだね？ え？ おにいちゃん？ いるけど……。うん、分かった。おにいちゃん！ お父さんが代わつてくれつて！」

「わかつたよ。つたく、こつちは晩飯の支度に忙しいつてのに……。もしもし？ 父さん、どうしたの？」

『うむ。なにやら私のいない間に色々とあつたらしいな』
ギクウツ。心当たりがありすぎて怖い！

「な、何の話かな？」

『隠すな隠すな。お前が雛子や柚希を身を挺して護つたことは聞いている』

「へ？」

『なんだ、違うのか？』

「いや、やうじやなくて……離子のことはともかく、何で柚希のこと？」

『悠介から聞いている。あいつはお前に感謝していたぞ。柚希を立ち直らせてくれたってな』

「叔父さんから……。そんな……大したことはしてないよ。立ち直ったのはあいつが勝手に自分の大切なものを見つけたからだし」「だが、その切っ掛けを作ったのはお前だ、悠斗。何を恥じる」ともない。胸を張つていいぞ。私はお前を誇りに思う。だがな……』

何かいやな予感がしまくる。このまま電話を切つた方がいいんじゃないのか？

『中三の女の子と一緒に風呂に入つただと？……帰つたらじつへりその辺を話しあつ必要がありそうだな。覚悟しておけ』

ちーん。俺死亡。死亡確定。

『でだな、クリスマス休暇なんだが、日本に一時帰国することになつた。その時に柚希ちゃんもうちに呼んであげようと思つ。だが、もしお前が不埒な真似をしたときは……』

「ないない！ そんなこと絶対ないから！』

『おつと、もうこんなに話してるとか。それじゃあ、またな。

「うん。また』

電話を切るとそばに寄り添つように立つていた離子が、首に手を回して甘えてくる。そう、俺は離子が大好きだ。一人の女の子としても、もちろん義妹としても。離子と俺を引き裂こうとするヤツがいたら、相手が誰だろうと抗つてやる！

「ね、おにいちゃん。調べてみたら血縁関係にない兄妹だったら、結婚出来るみたいだよ？」

「な、なに？ それはホントか？」

「詳しく述べわからないけど、そう言う話を聞いたつていうだけ」

「そうか！ ジゃあ、お互いが成人したら、親の意見なんか無視してでも一緒になるな！」

「うん……でもね、わたしちょつと寂しい』

「何でだ！？俺たちの間に障害がないっていう話だりつー？」「

「そうなつたらわたし、おにいちやんを『おにいちやん』って呼べなくなつちやうもん」

「だから、離子は俺を男としては好きじゃないのか？おにいちやんだから好きなのか！？」

「ん……。むがうけど、おにいちやんはおにいちやんだもん」

「だから、何故いつこうとおにいちやんと呼ぶんだ！！」

俺と離子は戸籍上は兄妹だ。

この半年で、よつ絆も深まつた。

でも、俺はやっぱり離子が一人の女の子として大好きだ！だから俺は、声を大にして叫びたい！

『お義兄ちゃん」と呼ばないでっ！』

ハピローグ　　お義兄ちゃんやさんやまなこや　（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。少しでも楽しんで頂けたとしたら、書いた者としてはこれ以上の喜びはありません。明日（11月30日）いっぱいの公開になります。もしよろしければ「意見」「感想などお寄せ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259y/>

お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

2011年11月29日19時46分発行